岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 137

津島遺跡 1

岡山県総合グラウンド第一次確認調査

1999

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 137

津島遺跡 1

岡山県総合グラウンド第一次確認調査

1999

岡山県教育委員会

序

この報告書は、岡山市津島遺跡の史跡整備を前提として、平成９年度と10年度に亘り確認調査を実施した津島遺跡の第一次発掘調査報告書です。

岡山県をほぼ南北に流走する高梁川・旭川・吉井川の県下三大河川は、その下流に肥沃な沖積平野である岡山平野を形成しました。また、瀬戸内の温暖な気候に恵まれて、弥生時代以降岡山平野は一大穀倉地帯へと発展し、今日の岡山県の歴史的風土を醸成してきました。

とりわけ津島遺跡は、旭川の右岸下流域にあたる岡山平野のほぼ中央部に位置し、弥生時代を代表する遺跡として早くから知られていました。ところが昭和43年の「明治百年」記念事業を契機とする、武道館建設工事に端を発したいわゆる「津島遺跡武道館事件」によって、全国的にさらに注目される遺跡となり、文化財保護運動の起点ともいえる象徴的な遺跡となっただけでなく、またその発掘調査からきわめて貴重な発見をもたらしました。中でも弥生時代前期前半の集落と水田の一体的な発見は、国の史跡指定の重要な指定要件の一つとして認識されるとともに、弥生時代研究に新たな局面をもたらしました。

この度の津島遺跡の調査は、平成17年に開催が予定されている岡山「国体」の主会場の候補地の一つとして、現在の県陸上競技場施設の周辺および補助競技場の内外において、これが可能かどうかを検討する目的で、平成９年１月～３月に10ヵ所、平成10年４月～６月に４ヵ所の合計14ヵ所の地点について遺構の存否、その密度などを把握するため、調査を実施しました。

この結果、ほとんどの調査区で弥生時代前期から中・近世にかけての遺構・遺物が確認され、特に、弥生時代前期においては国指定史跡「津島遺跡」との関係で注目される同一微高地面および水田土壌を検出することができました。また弥生時代から古墳時代にかけての集落の跡も明らかとなり、さらには古代の土地区画方式であった条里制に伴う溝も検出されるなど、多岐にわたる発見が相次ぎました。

これら調査結果を忠実に記録したこの報告書が、津島遺跡のみならず岡山平野における歴史・文化を解明する基礎資料として生かされ、また遺跡の保護・保存のため有効に活用されれば幸いに存じます。

発掘調査の実施、報告書の作成にあたっては、「津島遺跡検討委員会」委員各位ならびに同顧問の先生方に種々ご指導を賜りました。また、発掘作業にご参加いただきました多くの皆様をはじめ岡山県土木部都市計画課・岡山地方振興局建設部・岡山県総合グラウンド事務所には暖かいご理解とご協力をいただきました。あらためて関係各位に厚く感謝の意を表する次第です。

平成10年９月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　葛原克人

例　　言

1．本報告書は、津島遺跡の第一次確認調査報告書である。

2．発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

3．津島遺跡は、岡山県岡山市いずみ町に所在する。

4．調査期間は、平成９年１月19日～３月23日と、平成10年４月22日～６月９日である。

5．発掘調査および報告書作成については、「津島遺跡検討委員会」を設け、下記の方々に顧問および委員を委嘱した。検討委員会顧問および委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

顧問

佐原　眞（国立歴史民俗博物館館長）
田中　琢（奈良国立文化財研究所所長）
坪井清足（大阪府文化財調査研究センター理事長）

委員

稲田孝司（岡山大学教授）　　西川　宏（岡山理科大学非常勤講師）
亀田修一（岡山理科大学助教授）　　間壁忠彦（倉敷考古館館長）
小林博昭（岡山理科大学教授）　　松木武彦（岡山大学助教授）
新納　泉（岡山大学助教授）　　山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手）

6．本報告書の作成は、1998（平成10）年度に津島遺跡調査事務所において、センター職員島崎　東、渡邉恵里子、氏平昭則が主に担当して行った。

7．本報告書の編集は、渡邉、島崎が行った。また、各遺構の執筆については、基本的には担当した職員があたり、文末に文責を明記した。

8．遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を頂いた。

9．遺構、遺物の自然化学分野における鑑定、分析については、下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、一部の成果については報告文を頂いた。

石器・石製品の石材鑑定	妹尾　護（倉敷芸術科学大学助教授）
プラント・オパール分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
花粉分析	三好教夫（岡山理科大学教授）
花粉分析	守田益宗（岡山理科大学講師）

10．出土遺物ならびに図面・写真類はすべて岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1．本報告書にもちいた高度は海抜高であり、北方位については第１・２・５・69図が真北で、それ以外はすべて磁北である。

2．本報告書第１図「津島遺跡の周辺地形図」は岡山市役所作成の１/2,500地形図を、第５図「調査区周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行の１/25,000地形図（岡山北部）・（岡山南部）を縮小複製し、加筆したものである。

3．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、主な遺構・遺物については一部例外はあるものの以下のように統一している。

遺構

竪穴住居・掘立柱建物（１／60）　　井戸・土壙（１／30）

遺物

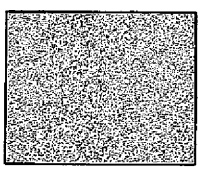
土器（１／４）　　土製品（１／２・１／４）　　金属製品（１／２）
玉類（１／１）　　石器・石製品（１／２）

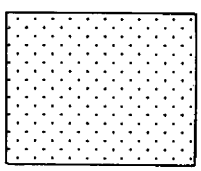
4．本報告書に掲載した遺物番号は、土器、土製品、石器・石製品、金属製品、にわけて通し番号をつけ、土器以外については、下記の記号を番号の前に付している。

土製品：C　　石器・石製品：S　　金属製品：M

5．本報告書における土層および土器の色調については、『標準土色帖（1998年版）』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

6．各調査区土層断面および平面図にスクリーントーンで示した内容については、以下の通りである。


弥生時代前期水田層


古墳時代後期水田範囲

7．本報告書掲載各調査区の土層断面中に付した●印、および土層断面写真に見られる赤丸印は、土壌分析試料の採集地点を示す。

8．本報告書掲載の各調査区平面図に記した遺構名の内、住居は竪穴住居を、また建物は掘立柱建物を略したものである。

9．本報告書にもちいた遺構・遺物の時期については、弥生時代から古墳時代前期については津寺遺跡における編年に準拠し、それ以降は各執筆担当の意向に沿っている。

本　文　目　次

序

例言

凡例

目次

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯 …… 1

第１節　発掘調査の契機 …… 1

第２節　発掘調査の経過 …… 11

第３節　ボーリング調査の概要 …… 13

第４節　発掘調査の体制 …… 16

第５節　日誌抄 …… 17

第６節　津島遺跡検討委員会の審議とその他の経緯 …… 18

第７節　報告書の作成 …… 24

第２章　地理的・歴史的環境 …… 25

第３章　平成９年(1997年)度発掘調査の概要 …… 28

第１節　調査区の概要 …… 28

第２節　Ｔ１ …… 28

1　概要 …… 28

2　遺構・遺物 …… 28

第３節　Ｔ２ …… 30

1　概要 …… 30

2　遺構・遺物 …… 30

第４節　Ｔ３ …… 32

1　概要 …… 32

第５節　Ｔ４ …… 33

1　概要 …… 33

第６節　Ｔ５ …… 34

1　概要 …… 34

第７節　Ｔ６ …… 35

1　概要 …… 35

2　遺構・遺物 …… 36

第８節　Ｔ７ …… 38

1　概要 …… 38

2　遺構・遺物 …… 39

第９節　Ｔ８ …… 48

1　概要 …… 48

第10節　Ｔ９ …… 49
1　概要 …… 49
第11節　Ｔ10 …… 54
1　概要 …… 54
第４章　平成10年(1998年)度発掘調査の概要 …… 59
第１節　調査区の概要 …… 59
第２節　Ｔ11 …… 59
1　概要 …… 59
2　遺構・遺物 …… 59
第３節　Ｔ12 …… 62
1　概要 …… 62
第４節　Ｔ13 …… 64
1　概要 …… 64
2　遺構・遺物 …… 65
第５節　Ｔ14 …… 68
1　概要 …… 68
2　遺構・遺物 …… 70
第５章　まとめ …… 71
付載
付載１　津島遺跡ボーリングＦ・Ｇ地点採取土壌の花粉分析 …… 73
付載２　津島遺跡埋没水田層の花粉分析結果 …… 76
付載３　津島遺跡の古環境復元 …… 77

挿　図　目　次

第１図　津島遺跡の周辺地形図(1/10,000) …… 2
第２図　調査区(Ｔ１～Ｔ14)およびボーリング地点(Ａ～Ｉ)配置図(1/3,000) …… 11
第３図　ボーリング・データによる地層対比図(高さ＝1/250) …… 14
第４図　ボーリング・データ土層柱状模式図(高さ＝1/60) …… 15
第５図　調査区周辺主要遺跡分布図(1/25,000) …… 26
第６図　柱穴列１(1/60) …… 28
第７図　遺構配置図および東壁土層断面図(1/100) …… 29
第８図　遺構配置図および西壁土層断面図(1/100) …… 30
第９図　溝１(1/60) …… 31
第10図　調査区および西壁土層断面図(1/100) …… 32
第11図　調査区および北壁土層断面図(1/100) …… 33
第12図　調査区および北壁土層断面図(1/100) …… 34
第13図　遺構配置図および南壁土層断面図(1/100) …… 35
第14図　竪穴住居１(1/60)・出土遺物(1/4) …… 36
第15図　井戸１(1/30)・出土遺物(1/4) …… 37
第16図　土壙１(1/30)・出土遺物(1/4) …… 37
第17図　遺構配置図および西壁土層断面図(1/100) …… 38
第18図　竪穴住居２(1/60)・出土遺物(1/4) …… 39
第19図　土壙２(1/30)・出土遺物(１)(1/3) …… 40

第20図　土壙２出土遺物(２)(1/4) …… 41
第21図　土壙２出土遺物(３)(1/4) …… 42
第22図　土壙２出土遺物(４)(1/4) …… 43
第23図　土壙３(1/30)・出土遺物(1/4) …… 44
第24図　土壙４(1/30) …… 44
第25図　土壙４出土遺物(1/4) …… 45
第26図　柱穴１出土遺物(1/4) …… 45
第27図　竪穴住居３(1/60)・カマド(1/30) …… 45
第28図　竪穴住居３出土遺物(1/4・1/1・1/2) …… 46
第29図　竪穴住居４(1/60) …… 47
第30図　調査区および西壁土層断面図(1/100) …… 48
第31図　遺構配置図および北壁土層断面図(1/120) …… 49
第32図　溝３(1/60) …… 50
第33図　河道出土遺物(１)(1/4) …… 51
第34図　河道出土遺物(２)(1/4) …… 52
第35図　土壙５(1/30) …… 52
第36図　土壙６(1/30) …… 53
第37図　土壙７(1/30) …… 53
第38図　水田出土遺物(1/4) …… 53
第39図　たわみ状遺構(1/60) …… 53
第40図　その他の出土遺物(1/4) …… 53
第41図　遺構配置図および西壁土層断面図(1/120) …… 55
第42図　溝4・5(1/60)・溝５出土遺物(1/4) …… 56
第43図　土壙８(1/30) …… 56
第44図　土壙９(1/30) …… 56
第45図　土壙９出土遺物(1/4) …… 57
第46図　土壙10(1/30)・出土遺物(1/4・1/3) …… 57
第47図　溝６(1/60)・出土遺物(1/4) …… 57
第48図　溝７出土遺物(1/4) …… 57
第49図　溝8・9(1/60)・溝８出土遺物(1/4) …… 58
第50図　溝９出土遺物(1/4・1/3) …… 58
第51図　その他の出土遺物(1/3・1/4) …… 58
第52図　溝11出土遺物(1/4) …… 59
第53図　遺構配置図および西壁土層断面図(1/100) …… 60
第54図　東壁南端部土層断面図(1/60) …… 61
第55図　水田面出土遺物(1/2) …… 61
第56図　溝12(1/60)・出土遺物(1/4) …… 61
第57図　遺構配置図および南壁土層断面図(1/100) …… 62
第58図　その他の出土遺物(1/4) …… 63
第59図　遺構配置図および東壁土層断面図(1/100) …… 64
第60図　土壙11・12(1/30)・土壙11出土遺物(1/4・1/2) …… 66
第61図　土壙12出土遺物(１)(1/4・1/2) …… 66
第62図　土壙12出土遺物(２)(1/4) …… 67
第63図　溝13出土遺物(1/4) …… 67
第64図　その他の出土遺物(1/4・1/2・2/3・1/3) …… 67
第65図　遺構配置図および北壁土層断面図(1/120) …… 68
第66図　南壁土層断面図(1/60) …… 69
第67図　水田出土遺物(1/4) …… 70
第68図　その他の出土遺物(1/4・1/2・1/3) …… 70
第69図　津島遺跡周辺の地形想定図(1/3,500) …… 71

表　目　次

表１　調査区一覧 …… 11
表２　本調査地の地盤構成 …… 14
表３　遺構・遺物の消長 …… 72

図　版　目　次

巻頭図版１－１　津島遺跡(南西上空から)
　　２　Ｔ５北壁(南西から)
巻頭図版２－１　Ｔ10西壁(南東から)
　　２　Ｔ13東壁(北西から)
巻頭図版３－１　Ｔ14北壁(南東から)
　　２　竪穴住居３カマド(南から)
巻頭図版４－１　弥生時代後期の土器(Ｔ７土壙２)
　　２　古墳時代後期の土器(Ｔ６竪穴住居１)

巻頭図版４－３　古墳時代後期の土器（Ｔ７竪穴住居３）
図版１－１　Ｔ１作業風景（北から）
2　Ｔ２水田全景（南から）
3　Ｔ３全景（北から）
図版２－１　Ｔ４全景（南西から）
2　Ｔ６全景（南東から）
3　Ｔ６竪穴住居１（東から）
図版３－１　Ｔ６井戸１（北から）
2　Ｔ７弥生時代全景（南から）
3　Ｔ７土壙２（南西から）
図版４－１　Ｔ７土壙４（南東から）
2　Ｔ７古墳時代全景（南から）
3　Ｔ７竪穴住居３カマド（南から）
図版５－１　Ｔ８全景（南東から）
2　Ｔ９中～近世全景（東から）
3　Ｔ10溝4・5（北東から）
図版６－１　Ｔ10水田全景（北から）
2　Ｔ10北半部中～近世全景（南東から）
3　Ｔ10土壙９（東から）
図版７－１　Ｔ11溝10～12（北東から）
2　Ｔ11溝10・11（西から）
3　Ｔ11溝12（東から）
図版８－１　Ｔ12作業風景（南西から）
2　Ｔ13弥生時代全景（上空から）
3　Ｔ13土壙11遺物出土状況（北東から）
図版９－１　Ｔ13土壙12遺物出土状況（北東から）
2　Ｔ14溝14（北から）
3　Ｔ14古墳時代水田全景（東から）
図版10　縄文時代～弥生時代前期の遺物
図版11　Ｔ７土壙２出土遺物
図版12　弥生時代～古墳時代の遺物
図版13　古代以降の遺物

写　真　目　次

写真１　検討委員会の様子（Ｔ14にて）
写真２　東壁上半部（北西から）
写真３　東壁深掘り部（北西から）
写真４　西壁北端部（東から）
写真５　西壁溝１部分（東から）
写真６　水田北端部（北西から）
写真７　西壁第13～22層（東から）
写真８　西壁深掘り部（東から）
写真９　北壁（南から）
写真10　北壁上半部（南から）
写真11　北壁深掘り部（南から）
写真12　南壁（西から）
写真13　南壁中央部（南西から）
写真14　カマド検出状況（南から）
写真15　西壁（南東から）
写真16　西壁中央部（東から）
写真17　土壙２遺物出土状況（南西から）
写真18　土壙４遺物出土状況（南東から）
写真19　Ｓ１・２（原寸）
写真20　竪穴住居３床面遺物出土状況（西から）
写真21　東壁（西から）
写真22　北壁東半部（南から）
写真23　溝３断面（南から）
写真24　西壁（北東から）
写真25　西壁北端部（東から）
写真26　西壁中央部（東から）
写真27　西壁（北東から）
写真28　西壁北側深掘り部（南西から）
写真29　東壁畦畔部（西から）
写真30　水田検出状況（南から）
写真31　南壁（北東から）
写真32　南壁中央部（北から）
写真33　第20層上面遺構検出状況（東半部、北西から）
写真34　南壁中央深掘り部（北から）
写真35　東壁（西から）
写真36　溝13（北西から）
写真37　溝13内遺物出土状況（北から）
写真38　北壁（南西から）
写真39　北壁中央部（南から）
写真40　溝14検出状況（南から）
写真41　南壁溝14部分（北から）

１．津島遺跡（南西上空から）

２．Ｔ５　北壁（南西から）

巻頭図版２

１．Ｔ10　西壁（南東から）

２．Ｔ13　東壁（北西から）

１．Ｔ14　北壁（南東から）

２．Ｔ７　竪穴住居３カマド（南から）

巻頭図版４

１．弥生時代後期の土器
（Ｔ７　土壙２）

２．古墳時代後期の土器
（Ｔ６　竪穴住居１）

３．古墳時代後期の土器（Ｔ７　竪穴住居３）

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯

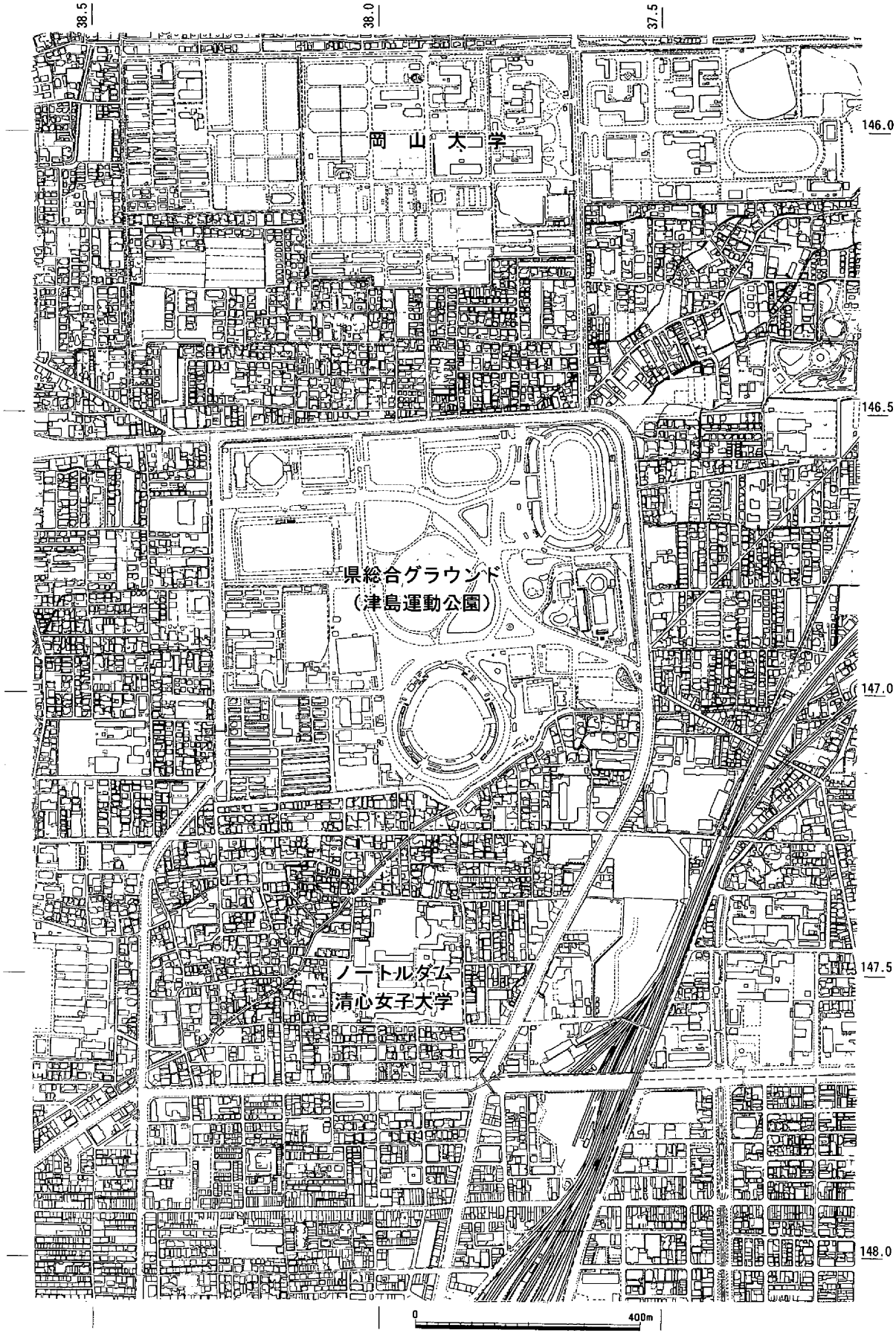
第１節　発掘調査の契機

岡山県は、来る平成17年、第60回国民体育大会の開催地として決定しており、この秋季大会の総合開会式ならびに閉会式を執りおこなう主会場（陸上競技場等）をどこに新設するか、県内外の有識者21名で構成された「第60回岡山国体開催準備懇談会」の議を経て、最終的には４候補地に絞り込み検討を続けてきた。そして平成７年９月、岡山市から要望のあった市街地東部にあたる古都南方・下地区の山地部に、岡山市との共同事業で新設する方針を決め、現地の測量や地質調査に着手した。

その後、県・市ともに財政状況がきわめて厳しいものとなり、また両者による造成工事にかかる経費区分の調整もつかず、秋の国体主会場整備のための具体的な協議に入れない状況が約２年間続いた。

国体主会場の選定にあたっては、岡山市いずみ町にある岡山県総合グラウンド（津島運動公園）も候補地の１つにあがっていた。現施設はＪＲ岡山駅に近いだけでなく、整備された道路網に近接した交通至便の地にあり、また県内で唯一の第一種公認陸上競技場であるため、公の競技大会はもとより個々人の練習の利用度も高い。しかしながら、この施設は昭和37年開催の前・岡山国体の主会場として整備されたもので、既に36年も経過し老朽化が著しい。第60回岡山国体開催準備懇談会では、「津島の総合グラウンドは、施設の老朽化に加え、駐車場も極めて狭く全体に狭隘である。現状のままで二巡目国体の主会場とすることは、機能的、スペース的に極めて困難である」とした。また、総合グラウンドは広大な津島遺跡の範囲に含まれていることから、「敷地は、遺跡地であることから、当面主会場として改修することは困難」であり、平成17年の主会場は新たな場所に整備する必要があるとしていた。

岡山県津島遺跡においては、かつて昭和43年４月26日から始まって昭和46年１月５日に津島遺跡のうち約5.6haが国の史跡に指定されて決着をみた、いわゆる「武道館事件」があった。岡山県は昭和43年4月26日、この年が明治百年に当たる節目であるのを記念して、県立武道館の建設に着手したが、その際この地が周知の遺跡であるにもかかわらず、県教委から文化庁（当時は文化財保護委員会事務局）へ提出すべき届出を怠り、文化庁からの工事中断の指導も無視したまま10日間、工事を続行した。工事中断後、数次に亘った発掘調査によって、津島遺跡は弥生前期前半から歴史時代に至る複合遺跡で、特に弥生前期前半の生活面と水田面が有機的にとらえられ、また弥生前期前半の住居・高床式倉庫を知ることのできた最初の遺跡として、評価されるようになった。さらに、土壌構造学の研究成果を入れて乾田に特有のFe層・Mn層の検出につとめ、弥生後期の水田が乾田であったことを究明したほか、今日では常識となった花粉分析の試みや、水田雑草の析出をおこなうなど、当時としては画期的な研究方法が次々と導入されて、これらの成果に注目が集まった。こうした中で、県内の文化・教育・芸術14団体による保存請願や、保存要望の署名10数万を越えるなどの保存運動が全国に先駆けて展開され、折からの開発と文化財保存の関係を視座に据えた現実的課題についてどのような決着を見せるのか、多くの国民的関心を集め、ついに当時の知事が参議院文教委員会で説明するまでに発展した。そ



第１図　津島遺跡の周辺地形図（1/10,000）

の結果、武道館建設予定地は別の場所へ移され、当初の予定地を含む一帯約 5.6haが国史跡となり、現在のように岡山県総合グラウンドの中心部分が史跡地となったのである。以上のような経緯から津島遺跡一帯は保存運動の原点の地とされてきた。

平成９年８月５日、岡山県行財政改革懇談会に、専門委員会から中間報告が提出された。それは、国の財政構造改革などの影響で 370億円程度の大幅な収支不足額が見込まれ財政再建団体への転落も念頭に置かざるをえないという、逼迫した県財政を背景に、①契約済み事業以外のものは原則凍結、②大規模事業は既存施設の有効利用も念頭に置いて見直し、などという内容で、こうした方針のもとに平成17年開催予定の国体主会場についても見直しが急浮上してきたのである。当初、津島遺跡の重要性に鑑み対象外としていた県総合グラウンドが再検討の対象に挙がってきた。

翌日の８月６日、知事の定例の記者会見において、行財政改革の一環として国体主会場問題についても、知事の意向表明がなされた。その骨子を記すと、

① 岡山市古都南方・下地区で総合運動公園を整備した場合、周辺整備を含めると約700億円が必要であり、国体主会場として必要な最小限の施設に絞り、計画を再検討する。

② 一方では、国体主会場地については「国体開催準備懇談会」での選定経緯はあるものの、２巡目国体の意義、その後の財政状況などから、岡山市いずみ町の県総合グラウンドの活用も検討せざるを得ない状況となった。

③ 県総合グラウンドは、津島遺跡としてよく知られている範囲にふくまれていることから、文化財保護に十分留意し、文化財関係者と協議のうえ、国体開催が可能な最小限の施設の改修について、調査・研究を始めたい。

という内容であった。

この問題は県政にとって最重要課題であるだけに、翌日の各新聞紙上に大きく報じられ、反響著しいものがあった。

県下の考古学研究者で組織される「岡山県遺跡保護調査団」からは、西川宏委員長、稲田孝司・小林博昭両副委員長が県教育長に直接面談して、また同時に秘書課を介して県知事に、それぞれ「保存要望書」が提出された。全文を以下に掲げよう。

１９９７年８月１１日

岡山県教育委員会
教育長　黒　瀬　定　生　様

岡山県遺跡保護調査団
委員長　　西　川　宏

津島遺跡の保存に関する要望

新聞等の報道によりますと、県知事は８月６日の記者会見で「平成17年の国体の主会場」は「県総合グラウンドの活用も検討せざるを得ない」と言明されました。

岡山県総合グラウンドの一帯は、弥生時代の集落・水田・墓地を中心とする津島遺跡とし

て戦前から周知の場所であり、1969年にはその一部が国の史跡に指定されております。

1968年５月、岡山県当局はこの遺跡の一角に無届けで武道館建設工事を行い、そのため遺物包含層や遺構の破壊が進行しました。このことを知った岡山県遺跡保護調査団は直ちに破壊の中止を求めましたが、10日間にわたる工事の続行で、建設予定地内の古墳時代と弥生時代の包含層・遺構の一部は破壊されてしまいました。

岡山県教育委員会は改めて届け出による発掘調査なるものを１カ月も実施しましたが、それは新聞が「潮干狩」と評したように、素人の県教委職員と多数の小中学生をたった一人の専門職員が監督したものでした。

県内考古学研究者の自主的な団体である岡山県遺跡保護調査団は、結成以来、県に協力して埋蔵文化財の保護のための活動を行なっておりますので、このような県当局の度重なる無謀な行為に抗議し、工事計画を変更して遺跡保存に万全を期するよう求めました。この段階で文化庁もようやく動きだし、遺跡の性格を明らかにする目的で改めて発掘調査を行なうよう指示したため、県下14団体で結成した津島遺跡を守る会が了承できないとする中を、保護調査団はあえて県教委の要請を受け入れ、工事部分を中心に調査を実施し、その報告書を県教委に提出しました。ところが県教委は遺跡の価値を低めるように歪曲した別の書類を作成して正本とし、報告書はそれに添付して文化庁に提出しました。それが問題化したため文化庁は遺跡の重要度はまだ分からないとして、文化庁とその付属機関の研究者に再度調査をさせました。

この間、県当局は武道館工事強行の姿勢をいっそう強めましたが、津島遺跡を守る会は県内諸団体の支援をうけて遺跡保存を訴え続け、全国的な学術団体42学会も共同声明を発表して支援し、またこの問題は国会でもたびたび取り上げられました。

以上のような曲折を経て、1969年８月、文化庁は武道館予定地一帯を国の史跡に指定し、津島遺跡の保存はようやく実現しました。こうして県政史上に一大汚点を残して、津島遺跡は今日に至っております。県教育委員会におかれては、再び過ちを繰り返さないようにされることを切望するものです。

岡山県遺跡保護調査団はこのたびの事態を重視して臨時総会を開き、次のことを岡山県教育委員会に訴えることを決議しました。

１、岡山県遺跡保護調査団は岡山県教育委員会の埋蔵文化財保存事業に協力し、恒常的に情報交換を行ってきているにもかかわらず、津島遺跡を国体主会場として検討の対象にし、遺跡の調査を行なうなどという重要な決定を、いまだ通告されないことは甚だ遺憾であり抗議します。

２、津島遺跡内での国体主会場ならびに各種競技場等の改修構想、埋蔵文化財の状況の確認調査の方法、調査のための委員会の選出方法など、関係事項を岡山県遺跡保護調査団に知らせていただきたい。

１９９７年8月１１日

岡山県知事　石　井　正　弘　様

岡山県遺跡保護調査団
委員長　　西　川　宏

津島遺跡の保存と活用についての要望

新聞等の報道によりますと、知事は８月６日、来るべき岡山国体の主会場として県総合グラウンドも検討の対象に加え、「文化財保護に十分留意しながら、 最小限の施設改修の調査・研究を始めたい」と言明されました。

県総合グラウンドの一帯は、その一部が国の史跡に指定されている著名な津島遺跡であります。1968年、この一角で岡山県当局が武道館建設工事を無届けで始めたことに端を発した遺跡保存運動は、岡山県遺跡保護調査団をはじめ県下14団体で構成される津島遺跡を守る会と、それを支援する全国的な学術団体42学会が、県当局とはげしく対立するという不幸な事態を招きました。さらに県教育委員会の要請で行なった遺跡保護調査団の調査の報告書を県教委が不当に歪曲したため、国会でも問題になるという、文化財保護行政にもとる行為が、当事者によって繰り返されたのであります。１年半に近い日子を費やして、遺跡の発掘部分が国史跡に指定され、武道館が別地点に建設されるという形で事件は終結しました。

結成以来、県の埋蔵文化財保護行政に一貫して協力してきた遺跡保護調査団としましては、このような不祥事が２度と繰り返されないよう、切に念願するものです。そして、津島遺跡をこれ以上破壊することなく保存し、県総合グラウンドをスポーツと史跡の公園として、県民により一層親しまれるものにするよう要望いたします。

埋蔵文化財の保護行政を所掌する県文化課としては、平成９年８月26日、県生涯学習センターで開かれた、平成９年度第２回岡山県文化財保護審議会において、高田朋香文化課長から県総合グラウンドが国体主会場候補地となったことを知事の記者会見での発言を引用しながら説明した。そして県教育委員会では、津島遺跡の確認調査を実施することとしたこと、調査にあたっては、専門家による津島遺跡のための検討委員会を発足させ、意見を聞きながら発掘調査を行う予定であること、文化財保護審議委員会においては担当の第２部会で、検討委員会から出された調査の結果や今後の取り扱いについて報告していきたいことを述べるとともに、今後は水内昌康第２部会長および谷口澄夫会長に適宜ご相談、ご報告することとしたい旨、説明し、了承された。

一方、月例会として定着してきた岡山県遺跡保護調査団との連絡会議において、この問題について報告・協議する準備を進めていた。知事の意向表明があったのちの、直近の連絡会議は９月２日に開かれ、その連絡会議は、通常と異なり県庁９階の大ホールで公開としたため、多数の報道陣の見守る中で進められた。

まず高田朋香文化課長から、平成７年に秋季大会主会場が一旦決定するまでの経過、主会場決定後の経緯、危機的状況にある県の財政問題などを要約的に報告し、そうした中で去る８月５日、「県行財政改革懇談会専門委員会」の中間報告が出され、大規模事業の凍結や見直し、既存施設の有効利用などの徹底した行財政改革が求められ、その関連で、国体主会場整備の在り方も検討せざるを得なくなったことから古都南方・下地区での計画の絞り込みを行いながら、岡山市いずみ町の総合グラウンドでの国体開催の可能性を研究するとの知事の意向を説明した。次いで、日本陸連から示されている基準は、①国体秋季大会の開・閉会式は第一種公認陸上競技場で行うこと。②主会場には陸上競技場、補助競技場、投擲練習場の３施設がセットで必要なこと。③メーン会場となる陸上競技場の観客収容人員は３万人程度を希望すること（現状は15000人ほど）。④陸上競技場は９レーンが望ましいこと（現状は８レーン）。⑤補助競技場は400m周回とすること、などであることを紹介し、仮に県総合グラウンドを国体主会場として想定するなら必然的に一定のリニューアル化が要請されることを説明した。

ひき続き、県教育委員会としては埋蔵文化財の保護保存の観点から、津島遺跡全体についての調査を行う必要があると考えており、直ちに「津島遺跡検討委員会」（仮称）を設置して、県内研究者の意見を十分伺っていくこととしたい、として後日、公文書で正式に依頼する旨を断った上で、協力と人選を願った。委員の数は８名程度を考えており、さらに県外の研究者若干名を「顧問」としてお願いする予定にしている点についても、付言した。

その後、平成９年９月４日付、教文埋第 705号で、岡山県教育委員会教育長黒瀬定生名をもって、岡山県遺跡調査団委員長西川宏あてに、「津島遺跡検討委員会委員候補者の推薦について」依頼する。

教文埋第７０５号
平成９年９月４日

岡山県遺跡保護調査団委員長
西　川　宏　殿

岡山県教育委員会教育長
黒　瀬　定　生

津島遺跡検討委員会委員候補の推薦について（依頼）

埋蔵文化財の保護・保存につきましては、常々ご高配を賜り、深く感謝いたしております。

さて、岡山県教育委員会では、「津島遺跡検討委員会」を下記のとおり設置する予定です。

つきましては、ご多忙のこととは存じますが、貴調査団から同委員会委員候補者の推薦をお願い申し上げます。

なお、事業の緊急性もあり、９月中の委員会発足を考えておりますので、別紙様式により、できる限り早く推薦を頂きますようお願いします。

記

１、委員会名：　津島遺跡検討委員会
２、目　　的：　津島遺跡全体の性格を明らかにするため、調査方法及び遺跡評価などを審議する。
３、構　　成：　岡山県遺跡保護調査団の推薦による委員　　８名
　　なお、県外の考古学研究者若干名に顧問を委嘱する予定です。
４、任　　期：　委嘱の日から津島遺跡調査事業が終了する日まで

これをうけて、遺跡調査団から次のような回答が寄せられる。

１９９７年9月１９日

岡山県教育委員会教育長
　　黒　瀬　定　生　様

岡山県遺跡保護調査団委員長
西　　川　　宏

津島遺跡検討委員会委員推薦について

この事につきましては、ご依頼を受諾することに決め目下人選中でありますが、受諾にあたり次の５項目の条件を付けさせていただきますので、ご承諾願います。

記

１、津島遺跡は国指定の史跡であることを十分にふまえて対処すること。
２、津島遺跡検討委員会の検討結果を尊重すること。
３、試掘や発掘等の実施にあたっては、最初の段階から委員会の検討事項とすること。
４、調査は公開とし、委員の調査地点への立ち入りを随時認めること。
５、調査の経過は遺跡保護調査団との連絡会議においても報告すること。

上掲の申し入れがあったのち、県教育委員会は再度、次のような公文書で、委員の依頼を行った。

教文埋第７６４号
平成９年９月19日

岡山県遺跡保護調査団委員長
西　川　宏　殿

岡山県教育委員会教育長
黒　瀬　定　生

津島遺跡検討委員会委員候補の推薦について

埋蔵文化財の保護・保存につきましては、常々ご高配を賜り、深く感謝いたしております。
さて、平成９年９月19日付けをもって申し入れのありました事項については承諾いたしましたので、よろしくお願い申しあげます。

こうして、県教委の用意した別紙様式にもとづき、平成９年９月24日付で、岡山県遺跡保護調査団委員長西川宏から岡山県教育委員会教育長に対して、「津島遺跡検討委員会委員候補者の推薦について」回答が寄せられたのである。そこに記された氏名は８氏、すなわち、

稲田孝司（岡山大学文学部教授）
亀田修一（岡山理科大学助教授）
小林博昭（岡山理科大学教授）
新納　泉（岡山大学文学部助教授）
西川　宏（岡山理科大学非常勤講師）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
松木武彦（岡山大学文学部助教授）
山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手）

である。

他方、検討委員会の委員の推薦をうける作業と平行して取り組んでいた顧問については、

坪井清足（大阪府文化財調査研究センター理事長）
田中　琢（奈良国立文化財研究所所長）
佐原　眞（国立歴史民俗博物館館長）

の３氏が多忙も顧みず快諾して下さった。

このような経過をたどって、平成９年９月29日、第１回津島遺跡検討委員会が県庁３階共同会議室で開かれた。冒頭において、事務局から「津島遺跡検討委員会設置要綱」について説明した。

津島遺跡検討委員会設置要綱

〔名　称〕
第１条　この会は、津島遺跡検討委員会（以下『委員会』という。）と称する。

〔目　的〕
第２条　委員会は、文化財保護法（昭和25年法律第 214号）第57条の２第１項に定める周知の埋蔵文化財包蔵地である津島遺跡について、発掘調査の方法、今後の整備の在り方などに関しその保

護保存の観点から調査審議するものとする。

〔組　織〕

第３条　委員会は、委員５人以上８人以内をもって組織する。

２　委員は、考古学に関し識見を有する者のうちから、教育長が委嘱する。

３　委員の任期は、委員会設置存続の期間とし、委員に欠員を生じた場合は、教育長が後任者を委嘱する。

〔顧　問〕

第４条　委員会に顧問を置くことができる。

２　顧問は、教育長が委嘱する。

３　顧問は、委員会に出席し、意見を述べることができる。

４　顧問の任期等については、第３条第３項の規定を準用する。

〔会　議〕

第５条　議長は委員の互選により選出する。

２　委員会の会議（以下「会議」という。）は、議長が招集する。ただし、議長が不在の場合は教育長が招集する。

３　委員は、会議に付議すべき事件を示して、会議の招集を議長に請求することができる。

４　会議は、委員の過半数の出席がなければ開くことができない。

５　会議の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

６　会議の議事は非公開とする。

〔意見の聴取等〕

第６条　委員会は、必要があると認めたときは、関係行政機関の職員その他の者に対して、出席を求めて意見若しくは説明を聞き、又は資料の提出を求めることができる。

〔幹　事〕

第７条　委員会に、幹事若干名を置く。

２　幹事は、岡山県教育庁職員のうちから教育長が任命する。

３　幹事は、会議に出席し、資料を説明し、又は意見を述べることができる。

〔庶　務〕

第８条　委員会の庶務は、岡山県教育庁文化課において処理する。

〔解　散〕

第９条　委員会は、第２条の目的を達成した後解散する。

〔その他〕

第10条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附　則

この要綱は、平成９年９月25日から施行する。

こうして、津島遺跡検討委員会が発足したが、各会議の抄録は第１章第６節に記した。
平成10年１月には考古学研究会から「要望書」が提出された。

1998年1月16日

岡山県教育長　様

考古学研究会
代表委員　春成　秀爾

津島遺跡の保存に関する要望書

このたび岡山県におかれましては、2005年の国民体育大会の主会場として、岡山市いずみ町にある岡山県総合グラウンドを改修できるかどうか検討されていると聞き及びました。それに関連して岡山県遺跡保護調査団から、グラウンド内に所在する津島遺跡の保存と活用の要望が県知事あてにだされ、県教育委員会では「津島遺跡検討委員会」を設置し、整備および国史跡への追加指定を含め、遺跡の取り扱いについて協議が進んでいるとも聞いております。

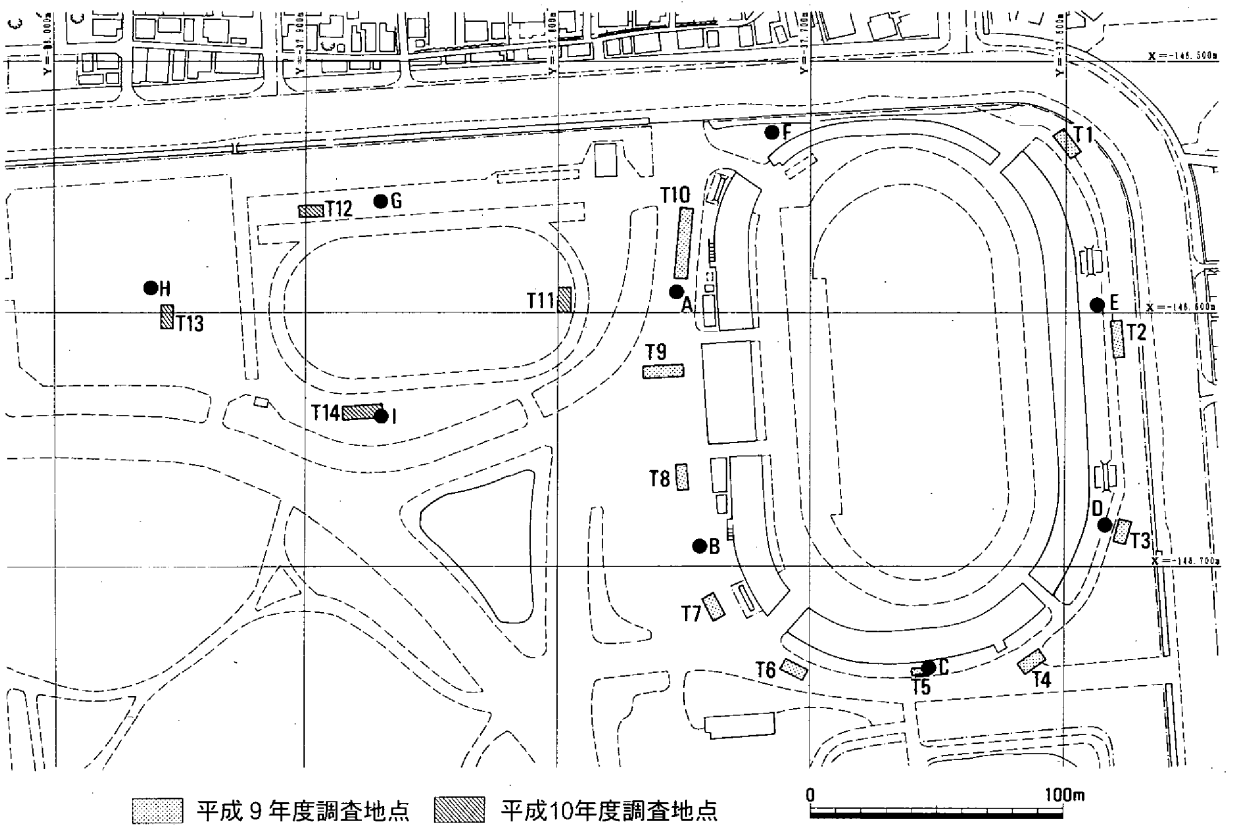
津島遺跡は、弥生時代を中心とした遺跡として全国的にも著名で、一部は国史跡として指定されています。特にその名が広く知られることとなったのは、1968年に当時の県知事がこの遺跡に明治百年記念の武道館を建てる計画をたて、文化財保護委員会（現文化庁）に無届けで工事を行い、遺跡の一部を破壊したことを契機とする「津島事件」の１件以来です。当時は国会でも取り上げられるなど、全国的に注目を集めました。その時は、地元の津島遺跡保存の会が中心となって、広く県民や全国の研究者に訴え、遺跡の保存が実現しました。本研究会も、他団体と協力して運動を積極的に支援しました。

津島遺跡の取り扱いについては、上記のような経緯で全国の研究者が関心をもっているところです。今後も岡山県遺跡保護調査団をはじめとする地元保存団体と十分に協議したうえで、その結果を尊重して慎重に対処されるよう希望します。

というものである。

第２節　発掘調査の経過

岡山県総合グラウンド内の遺跡の拡がりと性格を把握するための調査を行うことになり、第一次調査として、県総合グラウンドの北東部に位置する陸上競技場、補助競技場、軟式野球場について実施した。トレンチ調査の前段階として、大まかに地下の状況をつかむためにボーリング調査を行うことにした。



第２図　調査区（Ｔ１～Ｔ14）およびボーリング地点（Ａ～Ｉ）配置図（1/3,000）

調査区名	調　査　期　間	面積㎡	担　　当　　者
Ｔ１	1998.1.19～1998.2. 9	60	島崎東・金田善敬・岡本泰典
Ｔ２	1998.2.16～1998.3. 6	60	同上
Ｔ３	1998.3.10～1998.3.19	45	同上
Ｔ４	1998.3.10～1998.3.19	50	同上
Ｔ５	1998.2.27～1998.3.10	21	同上
Ｔ６	1998.2.18～1998.3.19	50	同上
Ｔ７	1998.1.19～1998.3.23	50	同上
Ｔ８	1998.1.19～1998.2.12	50	同上
Ｔ９	1998.1.27～1998.2.23	80	同上
Ｔ10	1998.1.26～1998.3.13	134	同上
Ｔ11	1998.4.24～1998.6. 5	50	高畑知功・島崎東・渡邉恵里子・氏平昭則・佐藤寛介・重根弘和
Ｔ12	1998.4.23～1998.5.25	50	同上
Ｔ13	1998.4.22～1998.5.21	50	同上
Ｔ14	1998.4.27～1998.6. 5	80	同上

表１．調査区一覧

ボーリングによって採取した土壌については、岡山県古代吉備文化財センターで考古学的な調査を行い、津島遺跡(以下略)検討委員会へ報告した。トレンチは、ボーリング調査結果などを参考にして、陸上競技場周辺に10ヵ所設定することにした。トレンチの設定については、文化庁および検討委員会の指導を受けて、陸上競技場の西側(Ｔ９)を東西方向とし、同北西側(T10)を北へ長く延ばすことにした。

ボーリングの調査結果をもとに、弥生時代前期の水田と推定した黒褐色土よりも深く、縄文時代に対応する層まで調査する必要があり、深さは３～４ｍまでを対象とする。そのためには上幅を５ｍとし、途中に段をつけながら掘り下げることにした。トレンチの設定場所については、地下に埋設されている電線、ガス管、水道管などと重ならないようにするため、若干移動させた。陸上競技場周辺に設定した10ヵ所のトレンチ調査は、平成10年１月19日から開始し、３月23日に現地調査を終了した。調査面積は600㎡である。

トレンチ調査に先だって、調査地はアスファルト舗装されているため、専門業者に依頼してカッターによる切断作業、アスファルトや造成土などの撤去作業を１月13日から開始した。１月19日からは作業員を入れてトレンチによる発掘調査を始めた。陸上競技場の北東部(Ｔ１)から調査を開始したが、下層から畦畔を伴う水田を検出し、周辺の調査成果と比較して弥生時代前期のものと判断された。同西側(Ｔ８)は４ｍ程掘り下げても砂と粘質土の堆積層であることから、河道の存在が確認された。同南西部(Ｔ７)では、古墳時代のカマド付き竪穴住居が検出され、勾玉や須恵器など多数の遺物を出土した。また、重複する状況で多量の土器を伴う弥生時代後期の竪穴住居・土壙なども確認した。古墳時代の竪穴住居は、Ｔ７の東に設定したＴ６まで拡がっており、下層ではいずれも弥生時代前期の水田を検出した。

南東部(Ｔ４)では、弥生時代前期の水田層は検出されなかったが、東側、北西部には同時期の水田の拡がりを確認した。西側のトレンチ(Ｔ９)では、西端部に後の河道で削られた弥生時代前期の水田層が存在した。上層では、中・近世の溝が認められたトレンチもある。

トレンチ調査実施中に、第５回(２月６日)、第６回(３月17日)の検討委員会を現地で開催した。第５回検討委員会には、佐原眞・坪井清足両顧問にも出席していただいた。検討委員会委員の方には、委員会の開催日以外にも随時現地視察をいただき、ご指導を受けた。また、岡山県文化財保護審議会委員近藤義郎・水内昌康両先生からは３月19日に現地指導をいただいた。

平成10年度には、補助競技場へ３ヵ所、軟式野球場へ１ヵ所のトレンチを設定し、４月22日から表土除去を開始し、６月９日に現地調査を終了した。調査面積は230㎡である。軟式野球場のトレンチ(T13)の南端部で微高地を検出し、弥生時代前期の土器を伴う土壙２基を確認した。補助競技場の東部(T11)では、弥生時代前期の水田が確認された。同北部(T12)と南部(T14)では、微高地は検出されず、低湿地の土層を呈し、弥生時代前期の土器を含む水平堆積層、さらにその直下には縄文時代晩期の土器を含む層を確認した。なお、T11とT13では、東西方向に延びる中世からの大きな溝を検出した。

トレンチ調査中の５月14日には、第７回検討委員会を現地で開催した。委員には検討委員会開催日以外にも現地指導をしていただいた。また、５月19日には岡山県文化財審議会委員近藤義郎・水内昌康両先生から現地指導をいただいた。

土壌のサンプリングは随時行い、プラント・オパール分析をパリノ・サーヴェイ社へ依頼した。

(正岡)

第３節　ボーリング調査の概要

遺跡の拡がりと性格を把握するための調査を行うにあたって、トレンチ調査の前に正確な地層分布を確認し、調査計画に必要な基礎資料を得る目的で、ボーリング調査を実施することにした。平成９年10月23日に開催された第２回津島遺跡検討委員会で、現地視察のうえ、ボーリング調査地点と調査方法について審議された。

ボーリング調査は、陸上競技場外周へＡ～Ｆの６ヵ所、補助競技場内へＧ・Ｉの２ヵ所、軟式野球場内へＨの１ヵ所、合計９ヵ所について実施することにした。調査深度は砂礫層に達するまでの６ｍを基準とし、さらに下層の洪積層や火山灰などのデータを得る必要があるとの検討委員会の意見に基づき、陸上競技場の北西部(Ａ)と南東部(Ｄ)については、10ｍまでの土壌サンプルを採取することにした。

ボーリング調査は、岡山県開発公社が川崎地質㈱岡山事務所へ発注し、監督は、岡山県教育庁文化課が行い、岡山県開発公社が立会・検査を実施した。調査地点については、国土座標交点を目安に岡山県教育庁文化課で測量した位置とした。ボーリングは、直径86～116㎜の機械ボーリングを行い、随時サンプラーの打込みを行って、すべてのボーリングコアを採取し、サランラップ等で被覆した後、保管箱に収納した。採取された試料は、岡山県古代吉備文化財センターへ搬入した。試料の考古学的な調査は、検討委員会委員の実地指導をいただきながら、文化財センターで行った。なお、岡山県文化財保護審議会委員近藤義郎・水内昌康両先生からのご指導をいただいた。ボーリング作業は、平成９年11月10日から11月27日に実施した。

陸上競技場周辺の６本(Ａ～Ｆ)については、11月21日までに文化財センターへ搬入された。柱状に採取されたコアについて、表面の一部を削り取り、土層柱状図の作成、遺物の検出、土壌の分類、土色調査などを行った。以上の結果は、11月28日に開催された第３回検討委員会へ報告し、検討をしていただいた。

１．土器を出土したボーリング　　Ａの第６層下部から1.5㎝大の細片２片。そのうち１片は弥生時代後期末の甕形土器。Ｆの第５層から焼土・炭などに混じって極小破片が確認されるにとどまった。

２．微高地上に堆積する黒色土層を確認したボーリング　　Ｂの第５層および第７層、Ｃの第７層および第９層、Ｅの第３層、Ｆの第10層、以上、いずれのボーリングからも遺物は確認されず、これらが繋がっているとは即断できないが、黒色土層下部の堆積土のあり方は、津島遺跡周辺で確認される微高地のやや低い部分の状況を呈しているものと推定される。

３．微高地を確認できなかったボーリング　　Ａは河道が予想される。ＤはＣ・Ｅなどの海抜１ｍ以下と堆積状況が似ており、この付近においては、微高地が所在しないのではなく、黒色土層およびその下層の褐色粘質土が後世に削平を受けるほど基盤が高かったのではないかと推定される。

４．弥生時代以前の砂礫層　　Ｂ・Ｆを除き確認。Ａ・Ｅは約－３ｍから確認。Ｃ・Ｄは約－２ｍから確認。

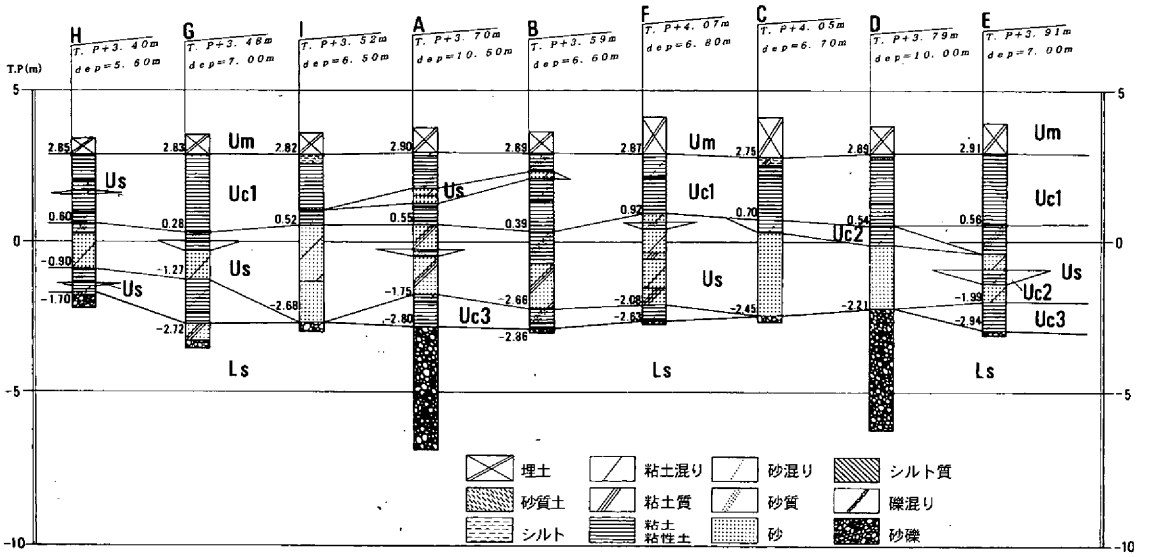
以上、ボーリングの結果から微高地の基盤層は北東に高く、(Ｂ・Ｆ)、南西に僅かに下がりながら(Ｂ・Ｃ)延びる。一方、その北西部分は微高地に沿って河道(Ａ)が流走するように思われる。

また、ボーリングの土の中には、極少量の遺物と水田層の可能性を示す黒色土層などを確認した。

補助競技場と軟式野球場のボーリングコアが、11月27日までに搬入された。調査結果については、平成９年12月19日開催された第４回検討委員会へ報告し、検討された。柱状コアの調査から補助競技場の北(Ｇ)と軟式野球場(Ｈ)に弥生時代の水田層を推定し、補助競技場の南(Ｉ)を微高地と推定した。

ボーリングコアからの推定については、トレンチ調査の結果と照合すると、陸上競技場周辺は、ほぼ推定どおりであったが、補助競技場と軟式野球場については、かなり判断が違っていた。ボーリングによる調査には、限界があることが明らかになった。

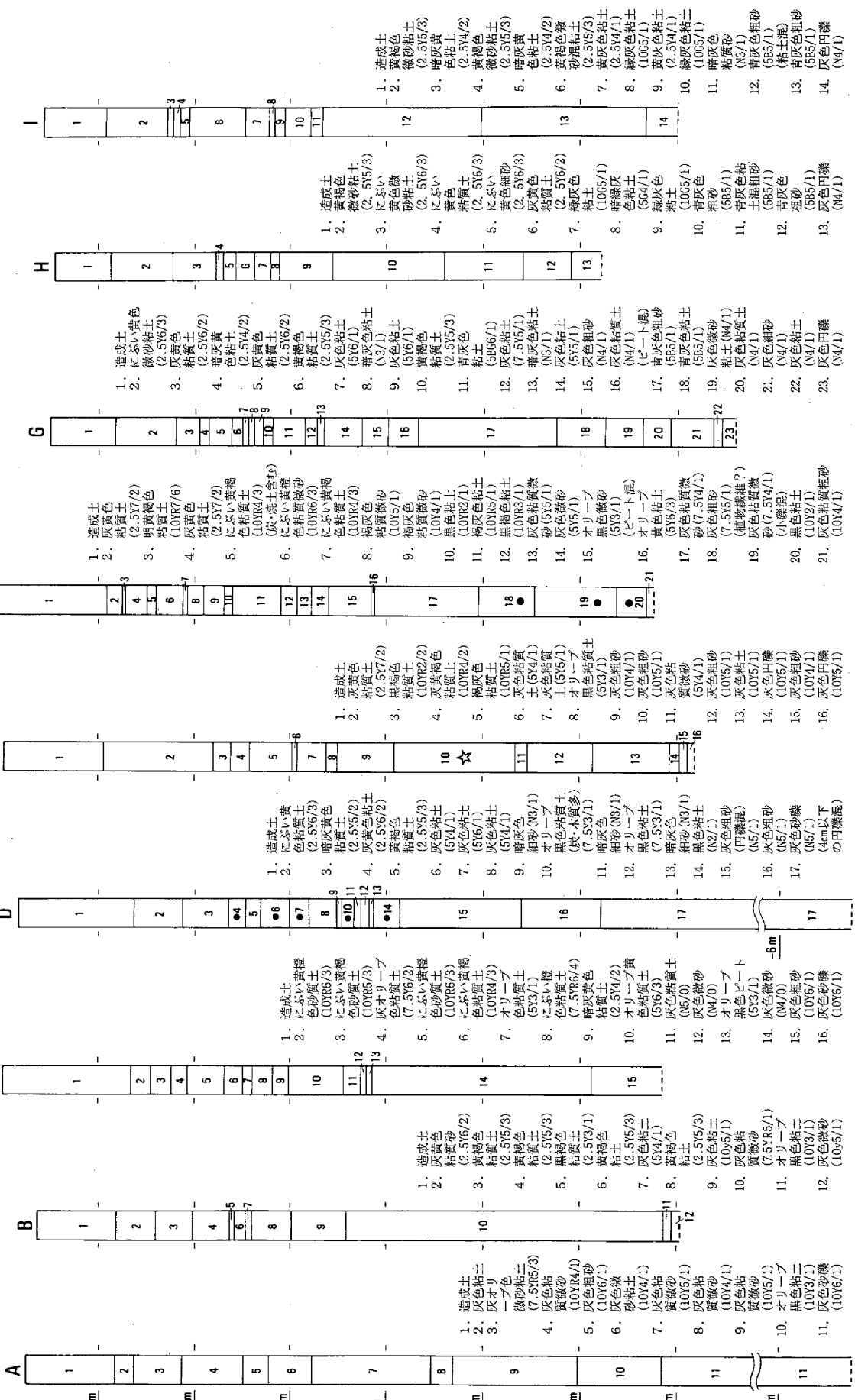
検討委員会からの下部の堆積状況についても調査するように提案があり、陸上競技場の北西部(Ｆ)のボーリングコアの下部について、珪藻分析をパリノ・サーヴェイ社へ依頼した。試料としては、標高－1.40m、－2.19m、－2.52mの地点のものを分析した。　(正岡)



第３図　ボーリング・データによる地層対比図（高さ＝1/250）

地層区分		記号	色調	構成土質	備考
沖積層	最上部層	Um	褐～黄褐、褐灰、黒褐	アスファルト、埋土（マサ土、礫質土、砂質土、炭ガラ等）	人工地盤
	上部粘土第１層	Uc1	褐～褐灰、暗灰、暗緑灰	粘土、粘性土、砂混り～砂質粘土	旧耕作土、潟湖末期堆積物
	上部砂層	Us	褐灰、黒灰～暗灰	細～粗砂、粘土混り砂、中間土（粘土質砂～砂質粘土）	河川性
	上部粘土第２層	Uc2	黒灰、暗灰	有機質土、砂との互層	湿地性
	上部粘土第３層	Uc3	暗灰、黒灰	粘土～砂質粘土	沿海性
洪積層	下部砂礫層	Ls	灰、暗灰	砂礫、礫混り砂、粘土混り砂質土	河川性

表２．本調査地の地盤構成



第４図　ボーリング・データ土層柱状模式図（高さ＝1/60）

第４節　発掘調査の体制

津島遺跡確認調査は、岡山県総合グランド内に所在し、一部を国指定史跡とされている津島遺跡の拡がりおよび性格の把握のため、岡山県古代吉備文化財センターが平成10年１月19日から実施している。

今回報告する第一次確認調査は、陸上競技場周辺に設定した調査区であるＴ１～10を平成10年１月19日から３月23日までの期間で、また補助競技場および軟式野球場の内外に設定したＴ11～14を平成10年度の４月22日から６月９日までの期間で行ったものである。

平成９年(1997年)度発掘調査

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長	平岩　武

文化課

課長	髙田朋香
課長代理	西山　猛
参事	葛原克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井　勝
主事	三宅美博

岡山県古代吉備文化財センター

所長	籔本克之
次長	正岡睦夫

(総務課)

課長	小倉　昇
課長補佐(総務係長)	井戸丈二
主査	木山伸一

(調査第一課)

課長	高畑知功
課長補佐(第一係長)	江見正己
文化財保護主査	島崎　東 (調査担当)
文化財保護主事	金田善敬 (調査担当)
文化財保護主事	岡本泰典 (調査担当)

平成10年(1998年)度発掘調査

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長	平岩　武

文化課

課長	髙田朋香
課長代理	西山　猛
参事	正岡睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本和男

岡山県古代吉備文化財センター

所長	葛原克人
次長	大村俊臣

(総務課)

課長	小倉　昇
課長補佐(総務係長)	安西正則
主査	山本恭輔

(調査第一課)

課長	高畑知功 (調査担当９月まで)
課長補佐(第一係長)	中野雅美
文化財保護主査	島崎　東 (調査担当)
文化財保護主事	渡邉恵里子 (調査担当)
文化財保護主事	氏平昭則 (調査担当)
文化財保護主事	佐藤寛介 (調査担当９月まで)
主事	重根弘和 (調査担当９月まで)

第５節　日誌抄

平成９年(1997年)度

平成10年

１月19日(月)　現場作業開始
　　Ｔ１・7・８調査開始
１月26日(月)　Ｔ10調査開始
１月27日(火)　Ｔ９調査開始
２月６日(金)　第５回検討委員会開催
２月９日(月)　Ｔ１調査終了
２月12日(木)　Ｔ８調査終了
２月16日(月)　Ｔ２調査開始
２月18日(水)　Ｔ６調査開始
２月23日(月)　Ｔ９調査終了
２月27日(金)　Ｔ５調査開始
３月６日(金)　Ｔ２調査終了
３月10日(火)　Ｔ３・４調査開始
　　Ｔ５調査終了
３月13日(金)　Ｔ10調査終了
３月17日(火)　第６回検討委員会開催
３月19日(木)　Ｔ３・４・６調査終了
３月23日(月)　Ｔ７調査終了

平成10年(1998年)度

平成10年

４月22日(水)　現場作業開始
　　Ｔ13調査開始
４月23日(木)　Ｔ12調査開始
４月24日(金)　Ｔ11調査開始
４月27日(月)　Ｔ14調査開始
５月14日(月)　第７回検討委員会開催
５月21日(木)　Ｔ13調査終了
５月25日(月)　Ｔ12調査終了
６月５日(金)　Ｔ11・14調査終了
６月８日(月)　第８回検討委員会開催
６月９日(火)　調査機材等撤収

第６節　津島遺跡検討委員会の審議とその他の経緯

第一次調査に関する津島遺跡検討委員会の審議の内容は下記のとおりである。

第１回　平成９年９月29日　　16：00～18：00（岡山県庁）

議長：西川委員

［委員委嘱式］

委嘱状の公布後、津島遺跡検討委員会設置要綱及び委員会の運営について事務局から説明した。

［議長選出］

議長は会議ごとに座席順時計回りで交代することとなった。

１．陸上競技場改修計画等について

２．津島遺跡の概要について

３．ボーリング調査の実施及び埋蔵文化財確認調査方法等について

４．平成９年度審議計画（案）について

第２回　平成９年10月23日　　16：00～17：10現地視察（県総合グラウンド）

17：30～19：30委員会審議（岡山カルチャーホテル）

議長：間壁委員

１．ボーリング調査場所について

陸上競技場周辺６ヵ所、補助競技場周辺３ヵ所の計９ヵ所に直径約12cm、深さ約６から10mのボーリングを入れることとした。

第３回　平成９年11月28日　　16：00～18：20（岡山県生涯学習センター）

議長：松木委員

１．陸上競技場周辺のボーリング調査結果について

２．確認調査の位置・方法について

陸上競技場周辺10ヵ所、補助競技場、軟式野球場周辺４ヵ所にトレンチを入れることとし、位置については事務局案を一部修正した。

第４回　平成９年12月19日　　15：00～16：30（岡山県生涯学習センター）

議長：山本委員

１．補助競技場周辺のボーリング調査結果について

陸上競技場および補助競技場周辺の微高地復原などを検討した。

２．確認調査の位置・方法について

事務局修正案を了承した。

第５回　平成10年２月６日　　14：00～16：00（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：新納委員

１．調査状況の視察

２．陸上競技場周辺確認調査の調査状況について

陸上競技場周辺のＴ１、Ｔ７～Ｔ10での確認調査について検討した。

３．平成10年度津島遺跡に係わる当初予算について

第６回　平成10年３月17日　　14：00～16：20（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：小林委員

１．調査状況の視察

２．陸上競技場周辺の確認調査の調査状況について

Ｔ１～Ｔ10の共通認識に至るための審議をした。

３．補助競技場確認調査の調査計画について

４～５月に補助競技場、軟式野球場周辺４ヵ所にトレンチを入れることとした。

第７回　平成10年５月14日　　14：00～16：20（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：亀田委員

１．調査状況の視察

２．陸上競技場周辺確認調査の調査結果について

３．補助競技場確認調査の調査状況について

４．今後の審議計画について

第８回　平成10年６月８日　　15：00～17：10（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：稲田委員

１．補助競技場確認調査の調査結果について

２．第１回総合審議

Ｔ12・Ｔ14の下層に堆積した黒色土について、旧武道館予定地で検出した水田とされる黒色土との関係を検討した。

第９回　平成10年６月29日　　15：00～17：20（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：西川委員

１．土壌分析の結果について

黒色土中の植物珪酸体分析で、イネ属のものがほとんど検出されなかったことについて検討し、花粉分析の必要性を指摘された。

２．第２回総合審議

第一次調査コメント案の検討に入り、「確認調査の結果について」を中心に審議した。河道の時期は弥生時代中期以後であること、縄文時代晩期

の水田の可能性についても記述する必要性などを指摘された。

また、「津島遺跡の保護・保存について」の審議も若干行った。

第10回　平成10年７月14日　　15：00～17：20（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：間壁委員

１．土壌分析の結果について

T12・T14の灰色粘土層と黒色土を対象に実施したイネ属珪酸体分析の結果を報告した。

２．第３回総合審議

第一次調査コメント案の検討

「津島遺跡の保護・保存について」を中心に審議し、津島遺跡には弥生時代前期前半以外の遺構も拡がっていること、国指定史跡である津島遺跡の公開活用に努め、指定地と関連した埋蔵文化財の意義についても周知していくことの必要性などを審議した。

第11回　平成10年8月17日　　15：00～16：30（津島遺跡発掘調査事務所）

議長：松木委員

１．土壌分析結果の補足説明

２．第４回総合審議

第一次調査コメント案の検討

全体の文言について詰めの審議を行い加除訂正した。

第12回　平成10年8月20日　　14：00～15：30（岡山県生涯学習センター）

議長：山本委員

１．第５回総合審議

第一次調査コメント案の検討

最終の検討を行い、「津島遺跡第一次調査コメント」を決定した。

２．今後の調査計画について

今年度中に第二次調査、広報用パンフレットの作成、過去の調査記録の整理を行うこととした。

第８回から第12回の検討委員会では、第一次調査結果の総合審議を行い、確認調査結果と津島遺跡の保護について、学術的な検討を行った。その結果は、平成10年８月20日付けで、「津島遺跡第一次調査コメント」として公表された。検討委員会は記者会見をして、詳細な説明を行った。これらの内容は新聞・テレビを通して広く報道された。

津島遺跡第一次調査コメント

平成10年8月20日
津島遺跡検討委員会

【確認調査の結果について】

津島遺跡は旭川の右岸に形成された沖積地にある。今回は岡山県総合グラウンド内の北東部分にある陸上競技場、補助競技場、軟式野球場を中心に調査用の溝（トレンチ）を設けて発掘し、次のような成果を確認した。

１．弥生時代前期では、周辺よりわずかに高い部分（微高地）を軟式野球場の南寄りで確認した。この微高地は南にある国指定史跡の弥生時代前期の集落跡の微高地につながるものと考えられる。微高地の東側には、低い部分が南北に延び、土層から弥生時代前期の水田と推定した。なお、この下の土層は縄文時代晩期（弥生時代早期）の水田の可能性がある。

２．陸上競技場とその周辺に弥生時代前期の水田が拡がっていること、陸上競技場の北から南西にかけて弥生時代中期から中世に川が流れていたことを確認した。
なお、陸上競技場の東では、弥生時代前期より前の時期の水田が存在する可能性を推測することができた。

３．弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡を陸上競技場の南西部で確認した。
また、古墳時代後期の水田を補助競技場の南寄りで確認した。

４．中世から近世の条里制の水田に伴う溝を陸上競技場の北西部、補助競技場の東寄り、軟式野球場の南寄りで確認した。

【津島遺跡の保護について】

県総合グラウンド内には、稲作の歴史を解明することが可能な遺構が存在するなど、各時代にわたる複合的な遺跡が拡がっている。また将来、学術的な発掘調査を実施するにあたって広域に調査することが可能な全国的に見ても残り少ない場所である。さらに、公有地であることから、遺跡の保護をしやすいところである。

今後、県総合グラウンド全体について、遺構の拡がりや性格を具体的に把握するための確認調査を進める必要があるが、現在のところ津島遺跡の保護については、以下のように考える。

１．軟式野球場の南寄りで確認された弥生時代前期の微高地とそれに隣接した低い部分は、国指定史跡地につながるものと判断されることから、保護に努める必要がある。また、これらの東でも各時代にわたる遺構の存在が確認されたことに配慮し、その保護に極力努めるべきである。

２．国指定史跡の積極的な公開活用を進め、史跡地と関連した埋蔵文化財の意義の周知に努める必要がある。

県教育委員会では、遺跡保護の趣旨を踏まえて、ただちに石井知事をはじめ各関係機関に伝えた。知事部局では教育委員会等関係機関と協議を重ね、慎重な検討が行われた。その結果を踏まえ、石井知事は、平成10年９月８日の定例県議会開催にあたり、提案説明の中で次のような意向を表明した。

懸案となっておりました岡山国体の秋季大会主会場についてでありますが、先の津島遺跡検討委員会による埋蔵文化財調査結果や古都南方・下地区の計画の絞り込みにおいても大幅な事業費の削減が困難であることなどから、現在の危機的な財政状況を踏まえ、関係機関と協議し慎重に検討した結果、現在の県総合グラウンド陸上競技場を改修して主会場とする結論に達したところであり、関係者皆様の御理解を賜りたいと存じます。なお、改修にあたっては、津島遺跡検討委員会の調査結果を尊重し、埋蔵文化財の保護・保存に十分配慮のうえ、スポーツ施設と文化財が共存する施設設備に向けて、今後、関係者と協議を重ねてまいりたいと考えております。

石井知事が国体の主会場として、県総合グラウンドの陸上競技場を改修して使用する決定をしたことに対し、岡山県遺跡保護調査団は、周辺に拡がる津島遺跡の保護に万全を期すように求める要望書を石井知事に提出した。

1998年９月14日

岡山県知事　石井　正弘　様

岡山県遺跡保護調査団
委員長　　西川　宏

津島遺跡の保存についての要望

このたび国体の秋季大会主会場に、県総合グラウンドの陸上競技場を改修してあてるとの決定をされました。

このことは保存運動の歴史からみましても、また遺跡のひろがりから考えましても誠に残念であり、津島遺跡の保護にとりまして種々危惧の念を抱かざるをえません。

つきましては、津島遺跡検討委員会の中間コメントにもとづき、陸上競技場一帯の遺跡の保護に万全を期されますよう重ねて要望いたします。

石井知事は、９月県議会での国体主会場整備に関する各党の質問に答えて次のような考え方を明確にした。

（１）整備にあたっての基本的な考え方

・津島遺跡は貴重な遺跡であると十分認識しており、今後、改修にあたっては、整備手法について、文化財関係者等と十分協議を重ね、埋蔵文化財の保護・保存に努めてまいりたい。

・改修にあたっては、可能な限り既存施設を活用することとしている。

・遺跡への影響を最小限にとどめるような改修工法について、文化財関係者と十分協議を重ねてまいりたい。

・補助競技場については、今後、津島遺跡検討委員会の調査結果を踏まえ、整備位置も含めて検討してまいりたい。

（２）日本陸連の主会場整備基準

・第１種陸上競技場の公認基準は、今年９月より、観客席数が３万人から１万５千人以上になった。

（３）今後のスケジュール

・今後、文化財関係者やスポーツ関係者等のご意見をいただきながら、規模や工法などを内容とする基本計画を今年度末までに策定することとしている。

・改修期間は２年程度と見込んでおり、平成15年度末までに完了する予定である。

（４）今後の県総合グラウンドの在り方

・県総合グラウンドは将来とも遺跡とスポーツ施設が共存する公園として整備したいと考えており、今後県教育委員会が行う、県総合グラウンド全体の埋蔵文化財調査の結果を待って、整備構想を検討する。

津島遺跡については、遺跡の保護の観点に立って、津島遺跡検討委員会に諮りながら、県総合グラウンド内の遺跡の拡がりや性格を調査するため引き続き第２次調査を実施していく方針が示されている。

写真１．検討委員会の様子（Ｔ14にて）

第７節　報告書の作成

報告書の作成は、Ｔ11～14の調査終了後の1998年(平成10年)６月10日から、平成９年度と平成10年度に調査を行ったＴ１～10とＴ11～14を対象に実施した。担当は、平成９・10年度調査担当であった島崎東と平成10年度調査担当であった渡邉恵里子・氏平昭則の３名が主に分担して行った。

整理作業は、遺物の洗浄・注記については発掘調査に平行して実施してきたが、整理期間に入ってからは発掘調査期間内に終了しなかった注記作業の一部を保留した状態で、先ずは遺物の復元から開始した。対象となる遺物量はコンテナ70箱相当を数え、復元作業は３名の整理作業員が行った。そして復元の終了したものから順次実測作業に取りかかった。

実測は、主に土器が対象で１名の整理作業員が各調査区毎にそして遺構単位に実施した。結果、土器154点とその他石器12点、土製品９点を掲載することができた。

遺構トレースは、個々の遺構について担当者が直接検討し、その結果を下図としてまとめ、作成した後、１名の整理作業員が全体地形図と各調査区全体平・断面図も含め専従で行った。

遺物トレースについては、石器を除いては調査員が分担しておこなった。

編集作業は、遺物復元・実測・トレースなど一連の作業が終了した後、Ｔ１からＴ14まで順次まとめた。なお、本文中には特に土層断面について分かり易いようにカラー写真を出来るだけ多く掲載するように努めた。

報告書作成体制

岡山県教育委員会	
教育長	黒瀬定生
岡山県教育庁	
教育次長	平岩　武
文化課	
課長	髙田朋香
課長代理	西山　猛
参事	正岡睦夫
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本和男
主事	三宅美博
岡山県古代吉備文化財センター	
所長	葛原克人
次長	大村俊臣
(総務課)	
課長	小倉　昇
課長補佐(総務係長)	安西正則
主査	山本恭輔
(調査第一課)	
課長	高畑知功
課長補佐(第一係長)	中野雅美
文化財保護主査	島崎　東
文化財保護主事	渡邉恵里子
文化財保護主事	氏平昭則
文化財保護主事	佐藤寛介
主事	重根弘和

報告書作成協力者

松尾和子　三垣慶子

第２章　地理的・歴史的環境

津島遺跡は、旭川西岸の岡山平野北部に位置する。北側に半田山山塊、西に京山があり、南へ開けている。この平野は旭川とその分流の堆積作用によりできたものである。現在では一見平坦な景観を呈するが、発掘調査によって北東から南西方向にいくつもの微高地が埋没していることがわかっている。現在の遺跡周辺地形を調べると、三野から京山のふもとへ向かい東から西へと下がっている。(1)

この平野への人々の進出は、半田山の山裾に近い部分から始まることが朝寝鼻貝塚(2)で知られている。津島岡大遺跡(3)では縄文後期の貯蔵穴が確認された。縄文晩期の水田として注目を集めた津島江道遺跡(4)など、この時期の遺構は総合グラウンドの北側で多く見られる。

弥生時代前期に入ると、微高地と低位部の間を中心として広大な水田が出現する。この水田は黒褐色粘質土上に設けられ、用・排水路と畦畔を持つ整った姿であることが知られている。津島遺跡(5)で最初に確認されたが、以後津島岡大(6)・北方下沼～地蔵遺跡(7)でも確認されている。

弥生時代中期では水田は継続されるが、明瞭に検出できた例が少ない。ただ集落の規模はより拡大していったのではないだろうか。その証拠として、南方(済生会)遺跡(8)では中期中葉～末の河道中から大量の木器・土器、猪の頭部を連ねた祭祀の跡や墓が見つかっている。

弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては、伊福定国前遺跡(9)、鹿田遺跡(10)などで確認されたように、微高地上に集落が近接して見られる。また低位部は水田として、後期後葉～末の北方地蔵遺跡のように利用される。農耕で得られた余剰生産力の一部は半田山山塊に都月坂２号墓(11)、都月坂１号墳(12)や七つ坑墳墓群(13)などの墳墓・古墳の築造に注ぎ込まれた。

最近の調査で、古墳時代中期以降の集落が確認されている。北方下沼遺跡では鍛冶に関わった竪穴住居が検出された。また中溝遺跡(14)や津島岡大遺跡の水田から、この時期に旭川西岸では正方位方格地割水田が出現し、他地域に先駆けて地域内で部分的な再編が生じたという意見もある。(15)

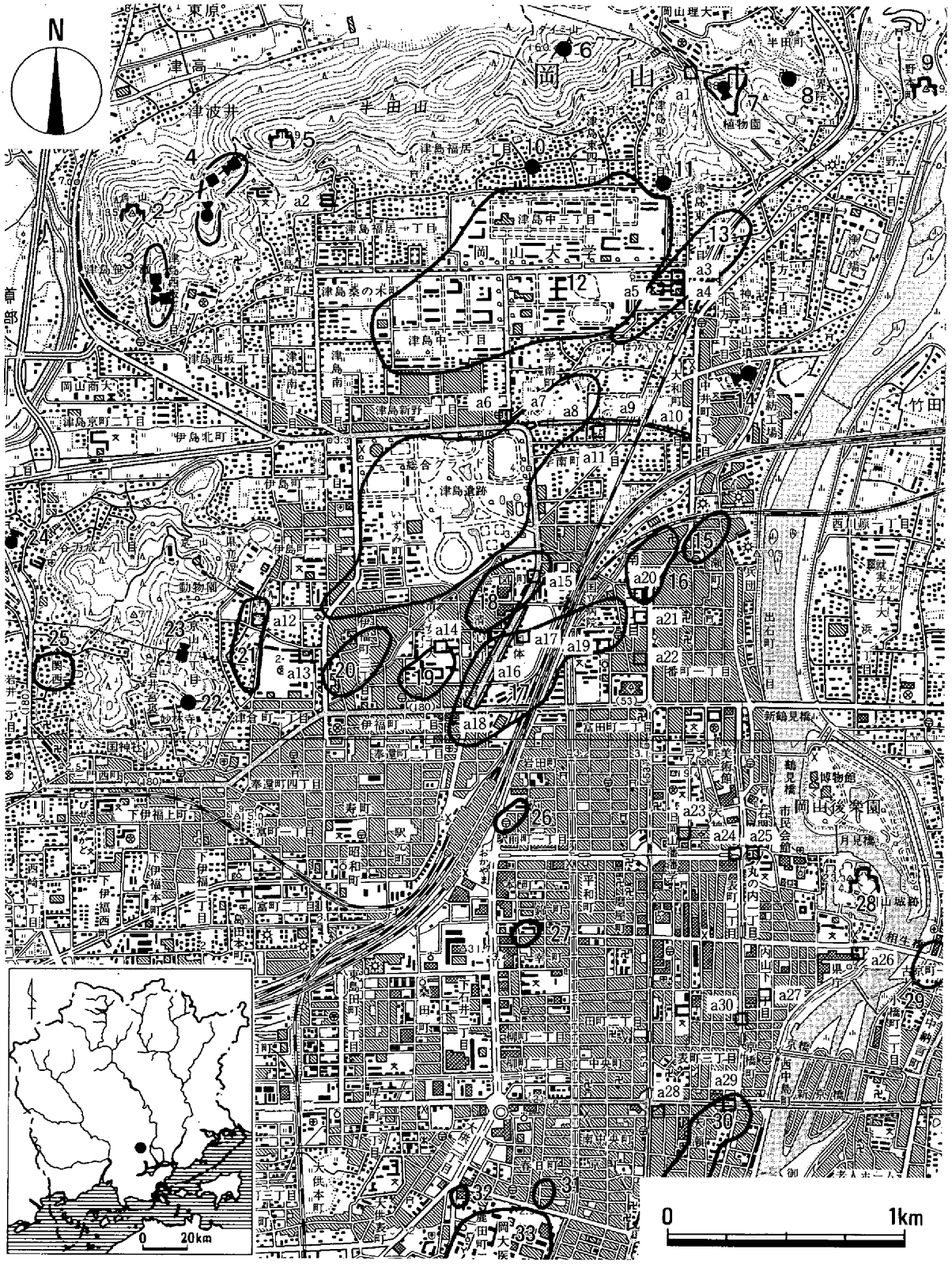
古代では溝の掘削や微高地の削平といった大規模な土木工事が実施された。津島岡大遺跡(16)や北方下沼～地蔵遺跡では条里制関連の大溝が検出されている。集落の実体はまだ不明瞭だが、津島江道遺跡(17)では公的建物をうかがわせる掘立柱建物群があり、御野郡衙関連の可能性が指摘されている。

中世ではさらに開墾が進み、結果として現在の景観にほど近い、水田が一面に広がる様子となる。その中で伊福定国前遺跡では14世紀中～後葉の溝と建物が、鹿田遺跡(18)では平安時代末から鎌倉時代に集落が形成され、岡山城二の丸下層(19)でも13世紀の溝、14世紀前半の墳墓が確認されている。このころ半田山城(20)などの山城が築かれる。しかし本格的な近世城郭と城下町は、戦国大名宇喜多秀家による岡山城(21)の築城まで待たなければならない。

近世になると、幕藩体制の中で城下町の整理・拡張が起こる。しかし津島遺跡周辺は開発が行われることもなく明治維新を迎える。そして1908(明治41)年、岡山に陸軍の第17師団が置かれ、その練兵場として造成されて以降は宅地化が進み現在に至っている。　(氏平)

註

(１) 鳥越義親「第Ⅱ部　Ⅰ岡山圏　１位置・圏域・歴史」『岡山県の地理』　福武書店　1978
(２) 鎌木義昌・亀田修一「朝寝鼻貝塚」『岡山県史』考古資料　岡山県　1986
(３)『津島岡大遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



1．津島遺跡　2．烏山(笹ヶ迫)城跡　3．七つ坑墳墓群　4．都月坂墳墓群　5．半田山城跡　6．ダイミ山古墳
7．一本松古墳群　8．不動堂古墳　9．妙見山城跡　10．おつか様古墳　11．朝寝鼻貝塚　12．津島岡大遺跡
13．津島江道遺跡　14．神宮寺山古墳　15．広瀬遺跡　16．南方遺跡　17．南方遺跡　18．絵図町遺跡　19．上伊福九坪遺跡　20．上伊福遺跡　21．上伊福西遺跡　22．妙林寺遺跡　23．津倉古墳　24．青陵古墳　25．石井廃寺
26．散布地　27．散布地　28．岡山城跡　29．古京遺跡　30．天瀬遺跡　31．散布地　32．散布地　33．鹿田遺跡

第５図　調査区周辺主要遺跡分布図（1/25,000）

1994、『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1998など。
（４）「津島江道遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』日本考古学協会静岡大会実行委員会、静岡県考古学会　1988
（５）近藤義郎「津島遺跡」『岡山県史』考古資料　岡山県　1986、岡山県津島遺跡調査団『津島遺跡発掘調査概報』岡山県教育委員会　1970
（６）『津島岡大遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1992
（７）『北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126　岡山県教育委員会　1998
（８）扇崎　由・安川　満「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）Ⅰ・Ⅱ」『岡山市埋蔵文化財調査の概要　1994（平成６）年度』　岡山市教育委員会　1996
（９）『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125　岡山県教育委員会　1998
（10）『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988など。
（11）近藤義郎「都月坂２号弥生墳丘墓」『岡山県史』考古資料　岡山県　1986
（12）近藤義郎「都月坂１号墳」『岡山県史』考古資料　岡山県　1986
（13）『岡山市七つ坑古墳群』　七つ坑古墳群調査団　1987
（14）「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開－資料集－』（前掲書）
（15）野崎貴博「岡山平野における正方位方格地割水田の出現」『津島岡大遺跡10』（前掲書）
（16）『津島岡大遺跡６』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第９冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1995
（17）高畑知功「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告18』　岡山県教育委員会　1988
（18）『鹿田遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1997
（19）神谷正義・河田健司「岡山城二ノ丸（中電変電所）跡（中電２次）」『岡山市埋蔵文化財調査の概要　1996（平成８）年度』　岡山市教育委員会　1998、『岡山城二の丸』中国電力岡山変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　同委員会　1998
（20）土井基司「半田山城測量後記」『岡山大学構内遺跡調査研究年報７』1989年度　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1990
（21）『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1997など。

試掘・全面調査が実施された主な遺跡とその位置（調査区周辺主要遺跡分布図中に□で示す）

a１　津島東３丁目遺跡第１地点　『津島東３丁目遺跡第１地点・清水谷遺跡』　加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書１　加計学園埋蔵文化財調査室　1995
a２　津島福居（市道）遺跡　市概要1995
a３　津島江道遺跡　埋文報告18
a４　津島江道（岡北中）遺跡　市概要1996
a５　津島江道遺跡　考協
a６　津島新野（下水立壙）遺跡　市概要1995
a７　北方下沼遺跡　県報告126
a８　北方横田遺跡　県報告126
a９　北方中溝遺跡　県報告126
a10　北方地蔵遺跡　県報告126
a11　中溝遺跡　考協
a12　尾針神社南遺跡　市概要1995
a13　伊福定国前遺跡　県報告125
a14　上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡　埋文報告14
a15　絵図・本徳寺遺跡　埋文報告24
a16　絵図遺跡・南方遺跡　県報告110
a16　南方遺跡（電線地中化工事）　埋文報告25
a16　津島遺跡・絵図遺跡（電線地中化工事）　埋文報告26
a16　南方（中電）遺跡　市概要1995
a17　上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区Ⅰ・Ⅱ）　市概要1994・1995
a18　上伊福・南方（済生会）遺跡（上伊福立花調査区Ⅱ・Ⅲ）　市概要1994・1996
a19　南方（国立病院）遺跡　『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1981、『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40　岡山県教育委員会　1981
a20　南方鎌田遺跡　考協
a21　南方遺跡（南方派出所）　埋文報告26
a22　南方（岡山牛乳）遺跡　市概要1995
a23　岡山城関連遺跡　埋文報告27
a24　岡山城中堀　埋文報告19
a25　石関町内堀跡　『岡山城内堀』　岡山市教育委員会　1998
a26　岡山城二の丸　県報告78
a27　岡山城二ノ丸（中電変電所）跡（中電１次・２次）同報告1998、市概要1996
a28　天瀬遺跡（岡南共同溝）　埋文報告26
a28　天瀬遺跡（岡南共同溝）　埋文報告27
a29　天瀬遺跡　埋文報告23
a30　岡山城二の丸跡（岡山吉井線キャブ工事）　埋文報告26

出典書名

県報告78　・・・『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告78　岡山県教育委員会　1991
県報告110・・・『絵図遺跡・南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110　岡山県教育委員会　1996
県報告125・・・『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125　岡山県教育委員会　1997
県報告126・・・『北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126　岡山県教育委員会　1998
埋文報告14、18、19、20、23、24、25、26、27・・『岡山県埋蔵文化財報告』14、18、19、20、23、24、25、26、27　岡山県教育委員会　1984、1988、1989、1990、1993、1994、1995、1996、1997
考協　・・・・・『日本における稲作農耕の起源と展開』資料集　日本考古学協会静岡大会実行委員会、静岡県考古学会　1988
市概要1994・・『岡山市埋蔵文化財調査の概要1994（平成６）年度』　岡山市教育委員会　1996
市概要1995・・『岡山市埋蔵文化財調査の概要1995（平成７）年度』　岡山市教育委員会　1997
市概要1996・・『岡山市埋蔵文化財調査の概要1996（平成８）年度』　岡山市教育委員会　1998

第３章　平成９年(1997年)度発掘調査の概要

第１節　調査区の概要

平成９年度は、陸上競技場の周辺を中心に幅５ｍ×長さ10～28ｍを測る調査区を合計10ヵ所設定し、微高地・旧河道など旧地形の把握を目的とした確認調査を実施した。調査区は、北東隅から時計回りにＴ１からＴ10を設定し、基本的には陸上競技場東側のＴ１から順次調査に入った。しかし、調査は、陸上競技場の西側と東側の道路幅事情の違いもあって、道幅の狭いＴ１からＴ３までは調査と埋め戻しを終了させながら順次移動し、一方道幅の広い陸上競技場西側のＴ７・８・９・10の調査区についてはたえず１～２ヵ所の調査区を実施しながら、東側とも同時進行を図った。

各調査区は、調査の対象を弥生時代前期段階に設定していたため、地表面からの深度が２～３ｍと深く、調査区幅５ｍでは掘り下げには安全面で限界が存在した。したがって、掘り下げは前期の土層の確認と部分的な抜き掘りに留めた。なお、Ｔ８の場合、調査区が旧河道の中に存在したため、壁を鉄板で補強しながら進めたものの、河床の確認が出来ないまま地表下3.5ｍで中断した。　（島崎）

第２節　Ｔ１

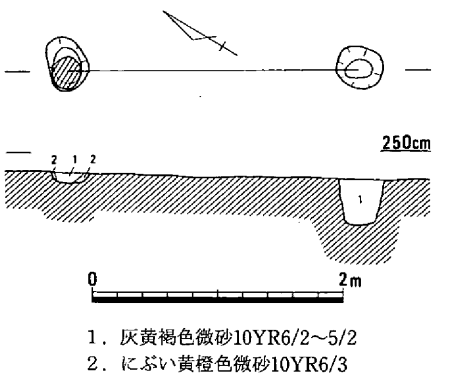
１．概要

Ｔ１は陸上競技場の北東部に設定したトレンチである。層序は、第７図の第１～３層が造成土、第４・５層が近代の洪水砂層、第６～31層が弥生時代から近世にかけての堆積層、第32層が弥生時代前期の水田層、33層以下は自然堆積層となる。第７～24層の間では中近世の水田と推定される灰色～灰黄褐色の粘質土層が数枚認められ、該期にはほぼ一貫して水田が営まれていたことが窺われる。遺構検出は第25・32層上面で行い、それぞれ中世の柱穴群と弥生時代前期の水田畦畔を検出している。

２．遺構・遺物

柱穴列１（第６図）

第25層上面で柱穴が３本検出された。ほぼ同時期と考えられるものの、相互の関係については判然としない。ここでは埋土の類似から、東側の２本に柱穴列の可能性を指摘するにとどめておく。北側の柱穴には柱痕が認められる。遺物は土器小片が出土したのみであるが、検出層位等からみて古墳時代初頭頃の遺構と判断される。



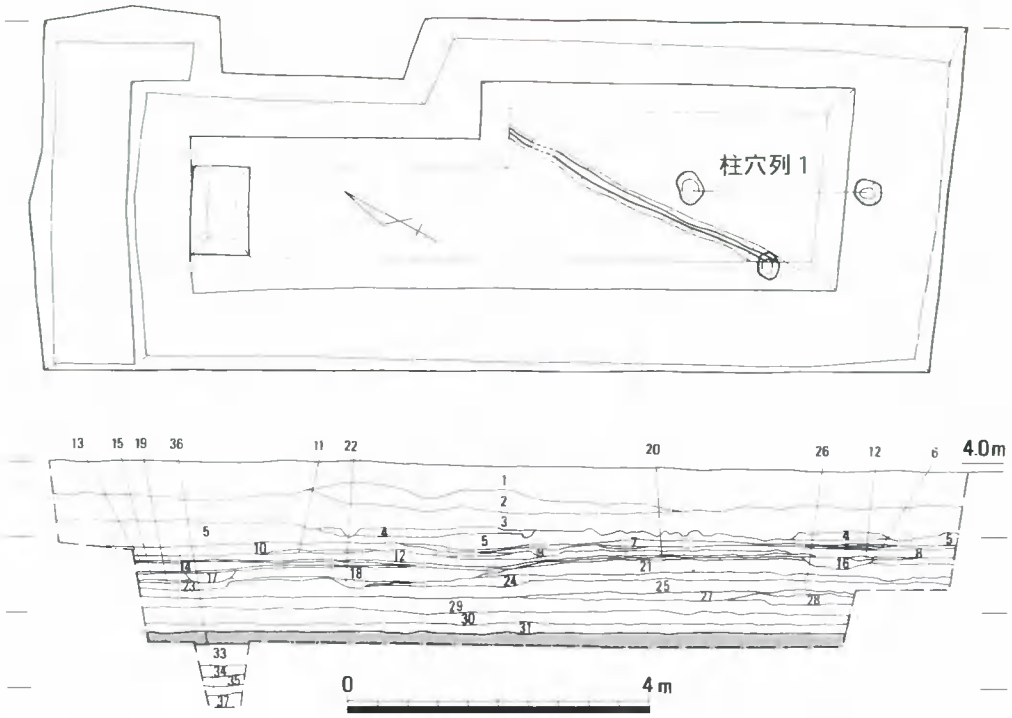
1．灰黄褐色微砂10YR6/2～5/2
2．にぶい黄橙色微砂10YR6/3

第６図　柱穴列１（1/60）

水田（第７図）

海抜約1.8ｍで検出した弥生時代前期の水田である。田面

は南側に向かってわずかに傾斜する。畦畔は、南北方向のもの１条が明瞭に認められたが、東西方向のものは検出できなかった。田面直上で弥生時代前期の土器細片が出土している。　（岡本）



1～3．造成土
4．にぶい黄褐色微砂10YR5/4
5．にぶい黄橙色微砂10YR6/3
6．にぶい黄橙色微砂10YR7/2
7．褐灰色粘質土10YR6/1
8．明黄褐色微砂10YR6/6
9．黄褐色粘質土(Fe沈着)10YR5/6
10．灰色粘質土5Y6/1
11．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
12．にぶい黄橙色粘質土10YR6/4
13．黄褐色粘質土(Fe沈着)10YR5/6
14．灰黄褐色粘質土 10YR6/2
15．黄褐色粘質土(Fe沈着)10YR5/6
16．褐灰色粘質土(Mn沈着)10YR6/1
17．灰黄色粘質土2.5Y7/2
18．灰黄褐色粘質土10YR6/2
19．黄褐色粘質土(Fe沈着)10YR5/6
20．褐灰色粘質土(Mn沈着)10YR5/1
21．褐灰色粘質土10YR6/1
22．にぶい黄橙色微砂10YR6/4
23．灰白色微砂2.5YR7/1
24．褐色微砂7.5YR4/4
25．褐色微砂7.5YR4/6
26．黄褐色粘質土2.5Y5/4
27．灰黄色粘質土2.5Y6/21
28．灰黄褐色粘質土10YR6/2
29．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
30．にぶい黄色粘質土2.5Y6/3
31．黄褐色粘質土2.5Y5/3
32．黒褐色粘質土5YR2/1
33．黄褐色粘質土10Y5/6
34．灰色粘質土N5/
35．灰色粘土(明黄褐色粘質土ブロック含む)N4/
36．灰色粘土N4/
37．明青灰色粘土5B7/1

第７図　遺構配置図および東壁土層断面図（1/100）

写真２．東壁上半部（北西から）

写真３．東壁深掘り部（北西から）
※赤丸は土壌採取地点

第３節　Ｔ２

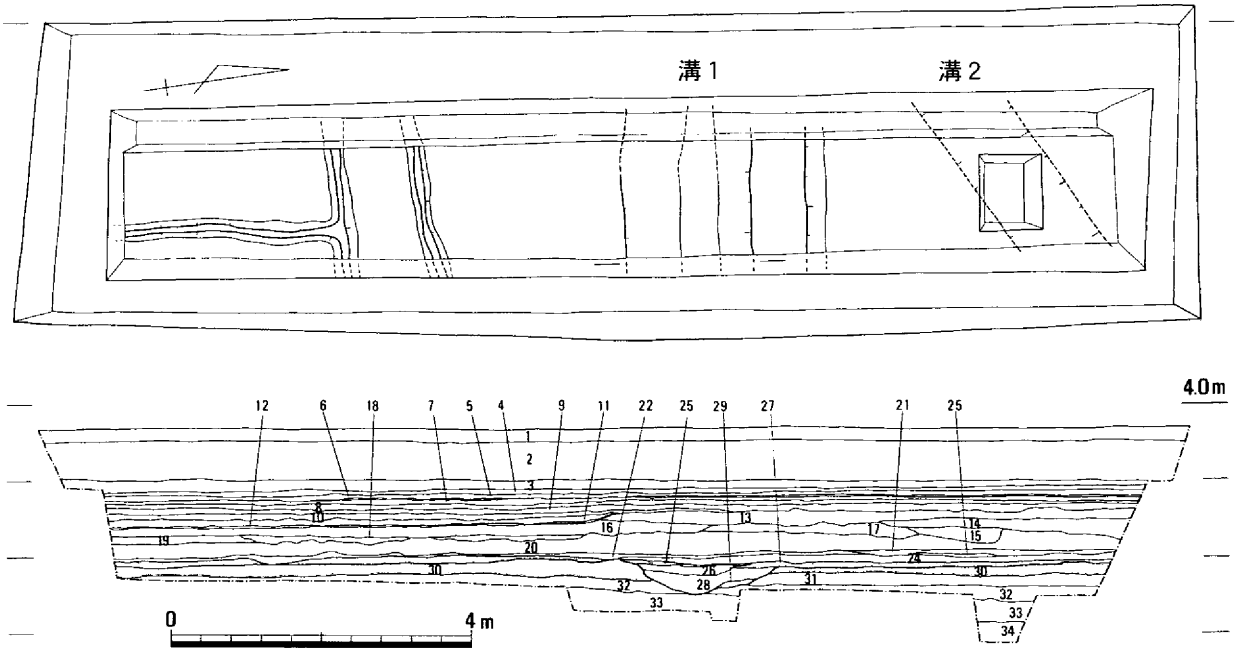
１．概要

Ｔ２では水田および溝を検出した。Ｔ１等でみられた黒褐色土層(第30層)が検出され、弥生時代前期の水田層が確認された。溝１は東西に走る溝で、検出レベル等から弥生時代前期の水田に関連する遺構と考えられ、水路として機能していた可能性が高い。また、溝２は中世頃の溝と考えられる。以上の結果から、Ｔ２では弥生時代前期および中世の遺構の存在が明らかになった。

２．遺構・遺物

溝１（第８・９図、写真５）

調査区のほぼ中央に位置し、東西に走る溝である。溝の幅は約1.7m、深さは約１mを測る。溝の北岸には土手状に高まりがみられ、南岸にも土層断面観察等から若干の高まりがみられた。溝内からの出土遺物がないため、詳細な時期は不明であるが、後述する水田との関連から弥生時代前期頃と推測でき、溝１は水田に伴う水路の可能性が考えられる。

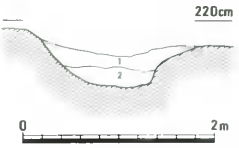


1．アスファルト・砕石
2．造成土
3．オリーブ灰色粘質土5GY5/1
4．にぶい黄橙色粘性砂質土
(上面Mn沈着)10YR7/3
5．灰黄色粘性砂質土
(上面Fe・Mn沈着)2.5Y6/2
6．にぶい橙色粗砂～細砂(Fe沈着)
7．にぶい褐色砂質土7.5YR6/3
8．褐灰色粘質土7.5YR6/1
9．にぶい橙色粘性砂質土7.5YR6/4
10．にぶい黄橙色粘性砂質土10YR6/3
11．灰褐色粘性砂質土7.5YR6/2
12．にぶい褐色粘性砂質土7.5YR6/3
13．褐灰色粘性砂質土5YR5/1
14．褐灰色粘質土10YR5/1
15．灰黄褐色粘性砂質土10YR6/2
16．灰褐色粘質土10YR5/
17．にぶい黄橙色粘性砂質土10YR6/3
18．灰黄褐色粘性砂質土10YR5/2
19．明褐色粘性砂質土7.5YR5/0
20．黄橙色粘性砂質土7.5YR7/8
21．暗灰黄色粘性砂質土2.5Y5/2
22．褐灰色粘性砂質土7.5YR4/1
23．浅黄色粘性砂質土2.5Y7/3
24．褐灰色粘性砂質土10YR5/1
25．褐灰色粘性砂質土10YR4/1
26．灰黄色粘性砂質土2.5Y6/2
27．褐灰色粘性砂質土10YR4/1
28．黄灰色粘質土2.5Y6/1
29．にぶい黄橙色粘性砂質土
10YR6/3(溝1)
30．黒褐色粘性砂質土10YR3/1
31．褐灰色粘性砂質土10YR4/1
32．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3
33．灰黄色粘質土2.5Y6/2
34．灰色粘質土5Y5/1

第８図　遺構配置図および西壁土層断面図（1/100）

水田（第８図、写真６、図版１－２）

調査区内でほぼ全面にわたり、弥生時代水田層が検出された。水田層は黒褐色土を呈し、Ｔ１等でもみられた弥生時代前期水田層に相当するものと考えられる。調査区の南半部では南西方向および東西方向に畦畔が検出された。これらの畦畔の様相から小区画水田の存在が推測できる。また、部分的ではあるが、調査区南半部では微高地を削平した造成土を思わせる土層上に水田面と考えられる層が堆積していることから、この付近では幾度かの水田面の改修が行われた可能性が推測できる。



1．灰黄色粘性砂質土
2．黄灰色粘質土2.5Y6/1

第９図　溝１（1/60）

溝２（第８図）

溝２は海抜2.4m付近で検出された溝である。溝はトレンチの土層断面観察から北東から南西方向に走ることが判明した。出土遺物がないため、時期は不明であるが、中世頃の遺構と考えられる。（金田）

写真４．西壁北端部（東から）
※赤丸は土壌採取地点

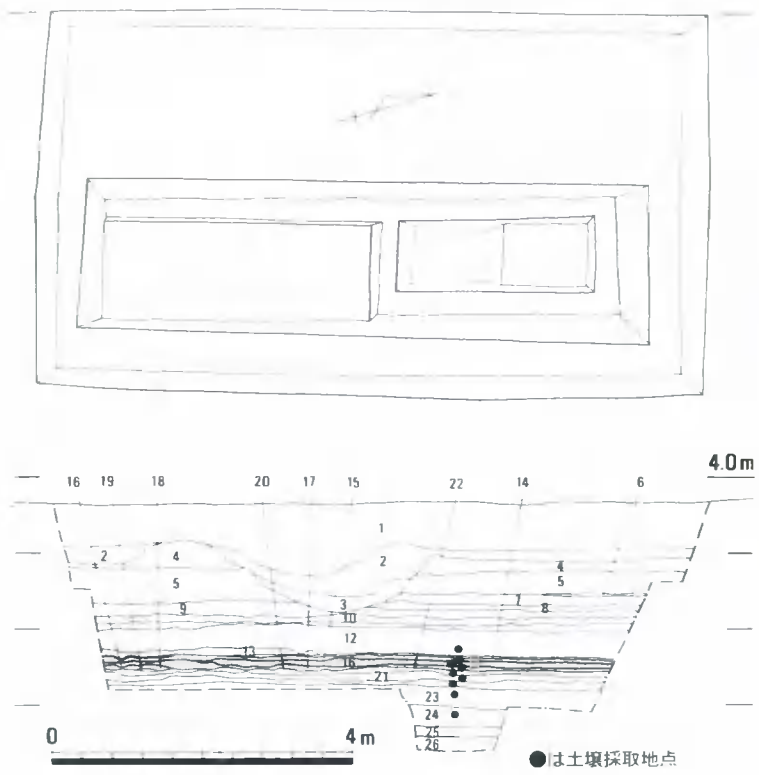
写真５．西壁溝１部分（東から）

写真６．水田北端部（北西から）

第４節　Ｔ３

１．概要

トレンチの上半部は幾分攪乱を受けていたが、下半部は良好な状態で遺存していた。海抜1.5m付近で黒褐色を基調とする粘質土が検出され、Ｔ１およびＴ２等で検出された弥生時代前期水田層に相当すると考えられる。水田面から畦畔は検出されなかったが、調査範囲が限られているため、検出できなかった可能性がある。水田層は幾層かに分層することが可能であり、その結果、弥生時代前期以前の水田層の存在する可能性が考えられた。そのため、これらの水田層に加え上層および下層を含め、土壌サンプルを採取し分析を依頼した。その結果、弥生時代前期の水田層のみならず、弥生時代前期以前と考えられる水田層(第17層)からもイネ属のプラントオパールが検出された。この結果よりＴ３付近では弥生時代以前の水田層の可能性を推測することができた。　（金田）



第10図　調査区および西壁土層断面図（1/100）

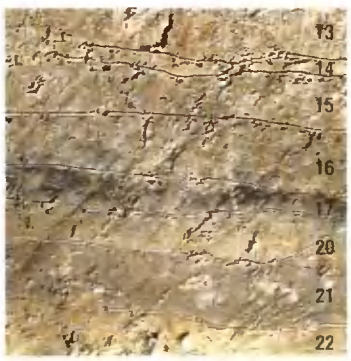


写真７．西壁第13～22層
（東から）

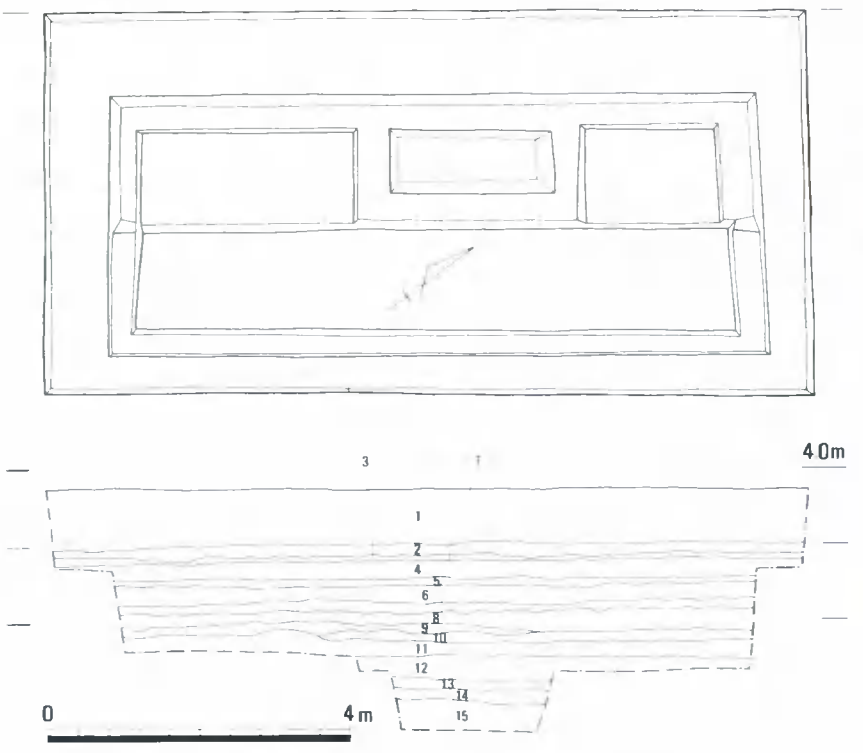
写真８．西壁深掘り部
（東から）

第５節　Ｔ４

１．概要

Ｔ４は、陸上競技場の南東部に設定した５×10mの調査区である。調査の結果、Ｔ４からは遺構の存在は確認できなかったが、周辺の調査区の在り方とは異なった知見を得ることができた。即ち、上層の第３層から第８層までは、灰色の粘質土を基調とする厚さ10～20cmの粘土層の水平な堆積が重層的に見られ、中世～近世の水田の継続的な存在が窺われ、周辺の状況と共通する。ところが海抜2,00mにある第９層以下では状況が異なり、周辺の調査区では同レベル付近に黒色粘土層の水平堆積が弥生時代前期水田の存在を示し、さらにその立地が安定した微高地にあることが知られた。しかし、Ｔ４においては黒色粘土層は確認されなく、かわって第９層の砂の堆積と第10層の粘土層が、さらに下層には還元された土層の存在が認められた。第９層と第10層は、出土した土器が弥生時代末～古墳時代初頭を示し、堆積状況も百間川遺跡群における水田と洪水堆積砂の関係に酷似するものであった。

以上の状況からＴ４は、弥生時代前期には河道もしくは沼沢地であったものと推測された。（島崎）



1．アスファルト・造成土
2．暗灰黄色微砂(Fe沈着)2.5Y5/2
3．青灰色粘質土5B5/1
4．灰オリーブ色粘質土7.5Y5/2
5．灰色粘質土7.5Y5/1
6．オリーブ灰色粘質土10Y5/2
7．灰色粘質土5Y4/1
8．灰色粘質土5Y5/1
9．灰黄色微砂2.5Y6/2
10．黄灰色粘質土2.5Y4/1
11．暗灰黄色粘質土2.5Y4/2
12．灰色粘質土N5/
13．緑灰色粘土7.5G6/1
14．青灰色粘土10B6/1
15．暗灰色粘土N3/

第11図　調査区および北壁土層断面図（1/100）

写真９．北壁（南から）

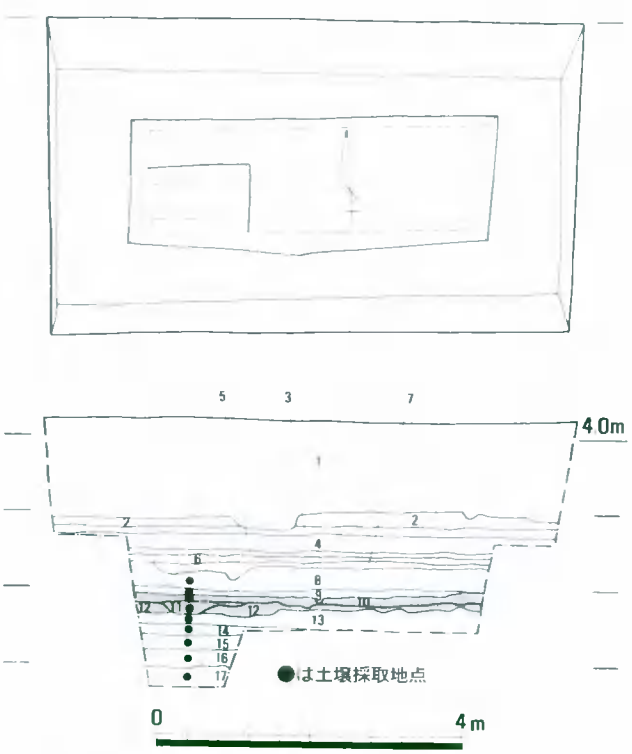
第６節　　Ｔ５

１．概要

Ｔ５は陸上競技場の南側に設定した小規模なトレンチである。調査は、面積的な制約のため北壁での断面観察に主眼を置いて実施した。層序は、第１層が造成土、第２層が近代の耕作土、第３～９層が弥生時代から近世に至るまでの堆積層で、第10～12層が弥生時代前期の水田層である。第４～７層にかけては鉄分・マンガンの沈着が顕著で、中近世の水田層と考えられる。第８層以下についてプラント・オパール分析を依頼し、弥生前期水田の第10・12層、およびその下位の第13層ではイネ属の産出をみている。

弥生前期の水田面は海抜約1.9mで検出された。伴う畦畔は確認されず、第12図で第11層とした溝状の落ち込みも面的には認められなかった。水田層の厚さは20cm前後を測り、色調的には10・12の上下２層に細分可能である。

本トレンチの出土遺物は少なく、中近世の包含層から須恵器・土師器等の小片が得られた程度である。　　(岡本)



1．造成土
2．灰色微砂質土5Y5/1
3．明黄褐色粘質土10YR6/6
4．灰色粘質土5Y6/1
5．灰黄褐色粘質土(Fe・Mn沈着)10YR5/2
6．褐灰色粘質土(Fe・Mn沈着)10YR5/1
7．褐灰色粘質土(Fe・Mn沈着)10YR6/1
8．灰黄色粘質土(Fe・Mn沈着)2.5Y6/2
9．暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
10．黒褐色粘質土7.5Y3/1
11．黒褐色粘質土10YR3/1
12．褐灰色粘質土10YR4/1
13．にぶい黄色粘質土2.5Y6/3
14．明黄褐色粘質土2.5Y6/6
15．灰色粘土5Y4/1
16．緑灰色粘土10GY6/1
17．暗灰色粘土N3/

第12図　調査区および北壁土層断面図（1/100）

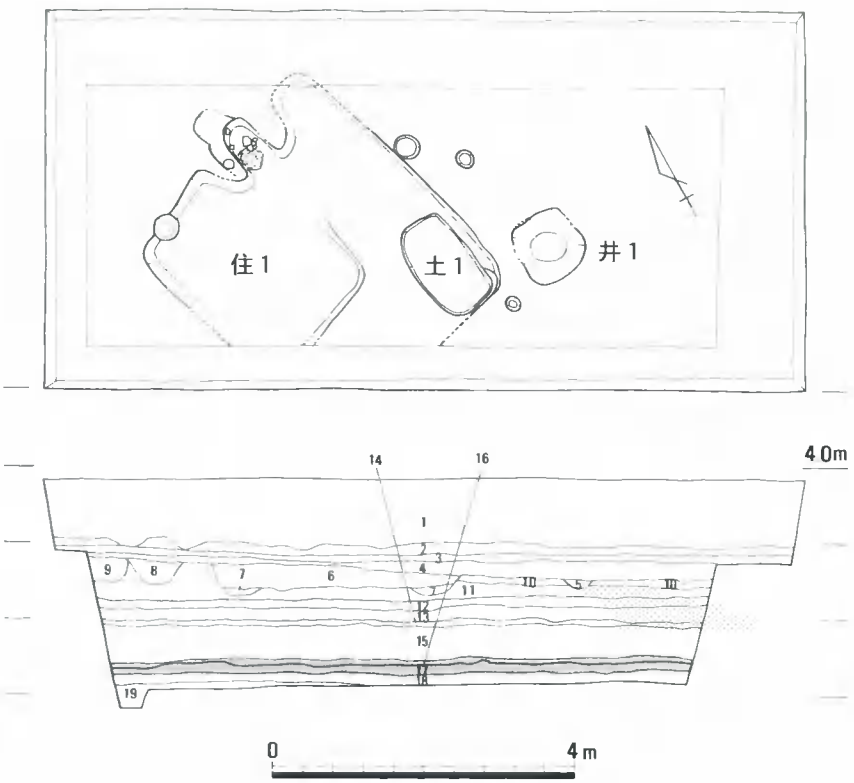
写真10．北壁上半部（南から）

写真11．北壁深掘り部（南から）

第７節　Ｔ６

１．概要

陸上競技場の南西部に設定した５×10mの調査区である。造成土及び明治の水田層除去後の海抜2.80mで包含層が確認され、この面で竪穴住居をはじめとする井戸・土壙などの確認もなされた。ただし、



1．アスファルト・造成土
2．オリーブ灰色微砂5GY5/1
3．緑灰色粘質土10GY5/1
4．灰オリーブ色粘質土7.5Y6/2
5．灰オリーブ色粘質土5Y6/2
6．灰色粘質土(Mn沈着)5Y4/1
7．暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
8．褐灰色粘質土10YR4/1
9．黄灰色粘質土2.5Y4/1
10．黄灰色粘性砂質土2.5Y5/1
11．灰黄色粘質土2.5Y6/2
12．暗灰黄色粘質土2.5Y4/2
13．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
14．黄灰色粘質土2.5Y5/1
15．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3
16．黒褐色粘質土10YR3/2
17．黒褐色粘質土10YR3/1
18．灰色粘質土 5Y4/1
19．灰オリーブ色粘質土5Y5/3

第13図　遺構配置図および南壁土層断面図（1/100）

写真12．南壁（西から）

写真13．南壁中央部（南西から）

この検出面では後世の削平により既に消失している遺構も数多いことも認められた。

この他にも時代は不明ながら海抜２ｍ前後において水田の可能性をもった厚さ５～10cmでほぼ水平堆積をした第12層と第14層の粘質土が２層、さらに第14層から50cm下層の海抜1.40mにおいても一連の弥生時代前期と考えられる黒褐色粘質土の水田層(第16層と第17層)が確認できた。ただし、これより下層の状況については掘り下げが実施できなく、不明である。

２、遺構・遺物

水田

平面的に精査を試みたが、調査区が狭いこともあって畦畔など水田遺構の確認には至らなかった。水田は、周辺の調査区が比較的高い海抜２ｍ前後での検出であったのに対してＴ６は海抜1.40mと最も深い位置で検出された。また、掘り下げ途中においても土器の存在は認められなかった。

竪穴住居１（第13・14図、写真14、図版２－３）

調査区の北よりに一部調査区外にかかって海抜2.40mで検出された東西3.4m、南北約3.8mを測る住居である。後世の微高地面の削平により上面がほとんど削平を受けていたため、検出面から床面ま

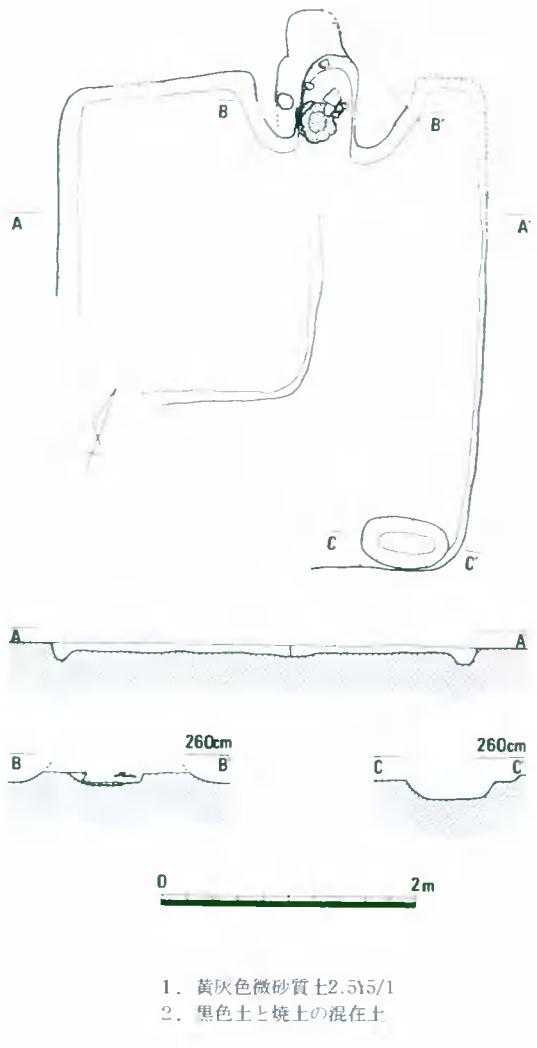
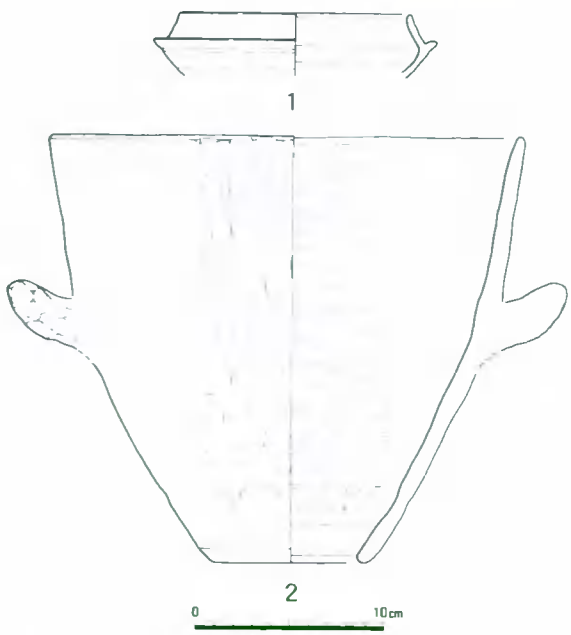


写真14．カマド検出状況（南から）



第14図　竪穴住居１（1/60）・出土遺物（1/4）

での深さはわずかに10cm程度と浅く、住居の遺存状態は良くない。平面形態は、長方形で北側一辺中央部に造り付けのカマドを持つ。カマドは、被熱痕跡を有する壁の一部と付近に点在する遺存土器の集中がその存在を推測させるが、上部構造のほとんどは後世の削平により存在しなかった。カマドの床面中央部には被熱痕跡が明瞭に認められた。

住居は洪水によると考えられる砂で埋没しており、この除去後床面が検出できた。床面は、検出面からおよそマイナス５cmの位置にあり、さらに住居内北西側にはその床面よりおよそ３cmほど低い低位面が一辺2.0～2.5mの方形に認められた。また、住居床面南東隅には、長軸70cm、幅40cm、深さ15cm程の土壙が検出できた。ただし、柱穴については、床面および床面掘り下げ後さらに精査を行ったが検出できなかった。

出土遺物は、須恵器杯身１点・土師器甑１点の２点で、ほとんどがカマド周辺部において出土したものである。時期は、それらの特徴から６世紀前半頃と考える。

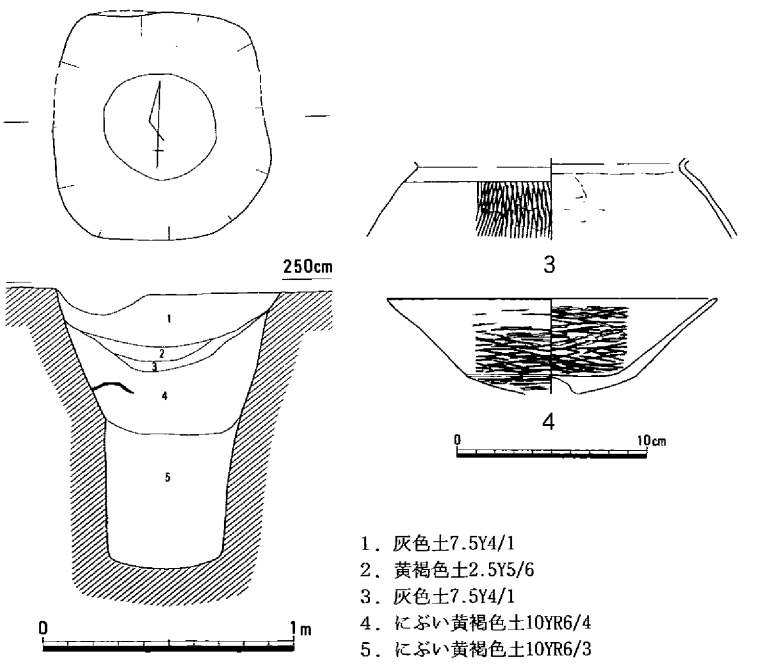
井戸１（第13・15図、図版３－１）

調査区中央やや東寄り、海抜2.45mにおいて検出した平面隅丸方形を呈するもので、南北90cm、東西85cm、検出面からの深さ1.09mを測る。状況から井戸と考えられる。埋積状況は、第１～３層までは灰色土壌の堆積で、第４・５層は高杯１点を含むものの灰・炭・焼土塊などはまったく含まれなかった。遺物は、土師器の甕と高杯のみで他には存在しなかった。

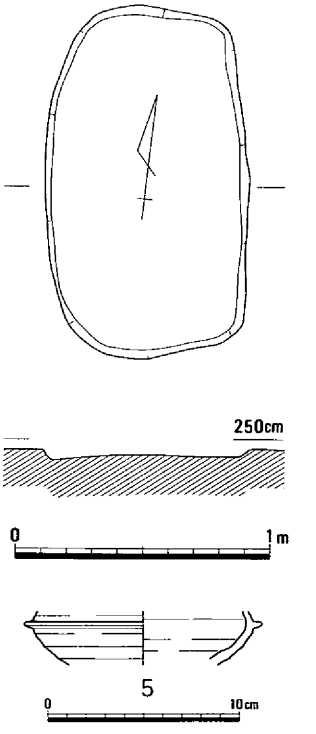
時期は、土師器の高杯・甕などの存在から古墳時代初頭へ位置づけられる。

土壙１（第13・16図）

竪穴住居１の検出途中において検出された土壙で、長軸1.40m・幅80cm、検出面からの深さ約３cmと浅いものである。出土遺物には、須恵器杯身片が１点あるが、本来伴うものではない。住居との切り合いから、６世紀中葉以降のものと考える。（島崎）



第15図　井戸1（1/30）・出土遺物（1/4）

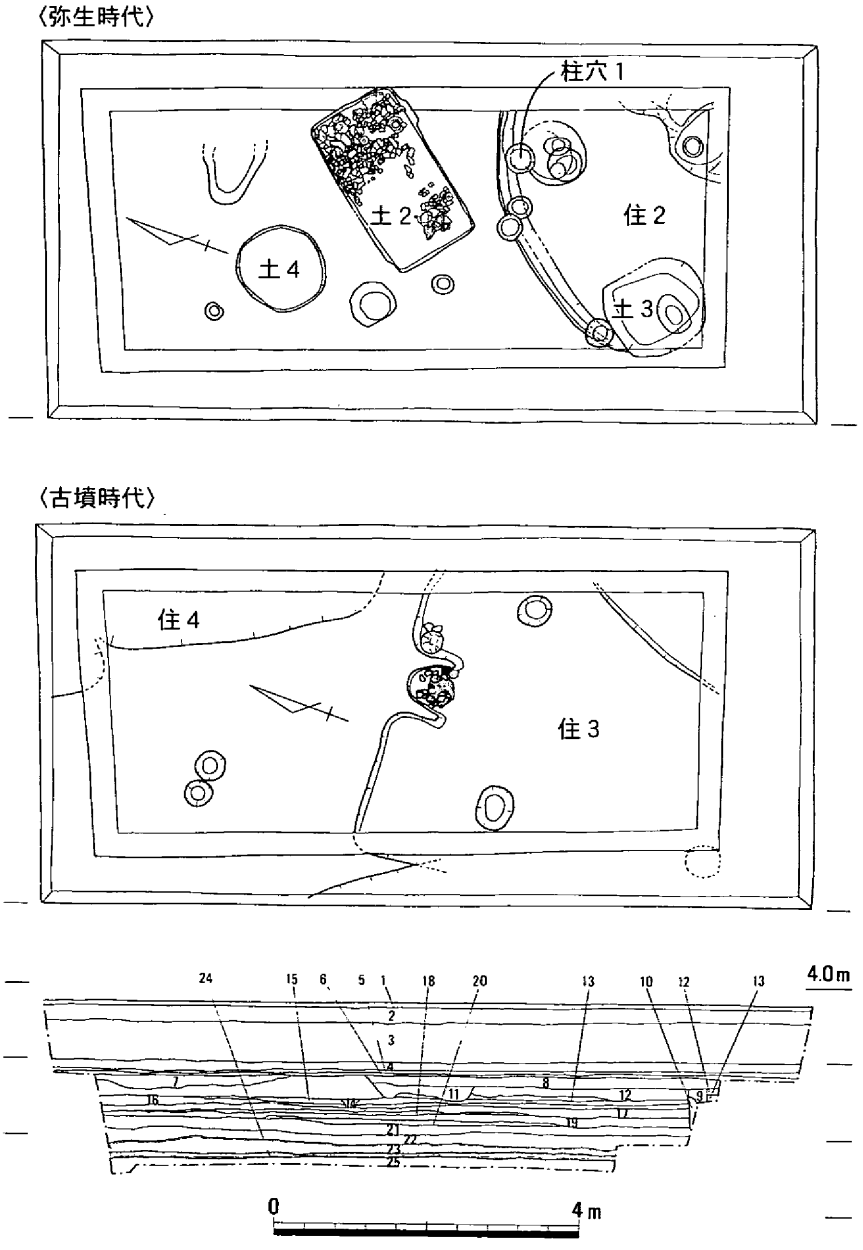


第16図　土壙1（1/30）・出土遺物（1/4）

第８節　Ｔ７

１．概要

陸上競技場の西側、Ｔ６の北西に設定した５×10ｍの調査区である。明治の水田層直下の海抜2.80ｍにおいて弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構をほぼ同一面で検出した。これは、古墳時代以前の微高地面が本来もう少し高い位置にあり、それが後世削平された結果と推測された。なお、遺構検出面の下層第15層以下は、比較的水平な堆積状況を呈する。その中にあって弥生時代前期の水田は、海抜1.80ｍ前後の第23層および第24層で確認できた。



1．アスファルト舗装面
2．アスファルト下砕石
3．造成土
4．オリーブ灰色微砂
5．灰黄色粘質土（Fe・Mn沈着）
6．灰黄色粘質土
7．灰黄褐色粘性砂質土
(Fe沈着)10YR5/2
8．褐灰色粘質土10YR4/1
9．黄灰色粘質土2.5Y4/1
10．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
11．黄褐灰色粘質土2.5Y4/1
12．明黄褐色粘質土10YR6/6
(9を斑状に含む)
13．にぶい黄褐色粘性砂質土
10YR5/3
14．黄褐色粘質土10YR5/6
(褐灰色粘質土を含む)
15．明黄褐色粘質土10YR6/6
16．灰黄褐色粘質土
(Mn沈着)10YR6/2
17．にぶい黄橙色粘性砂質土
10YR6/4
18．にぶい黄橙色粘性砂質土
10YR6/3
19．灰黄褐色粘質土
(Mn沈着)10YR6/2
20．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
21．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4
22．灰黄色粘質土
(Mn沈着)2.5Y6/2
23．黄灰色粘質土2.5Y4/1
24．黒褐色粘質土10YR3/1
25．黒色粘質土2.5Y2/1

第17図　遺構配置図および西壁土層断面図（1/100）

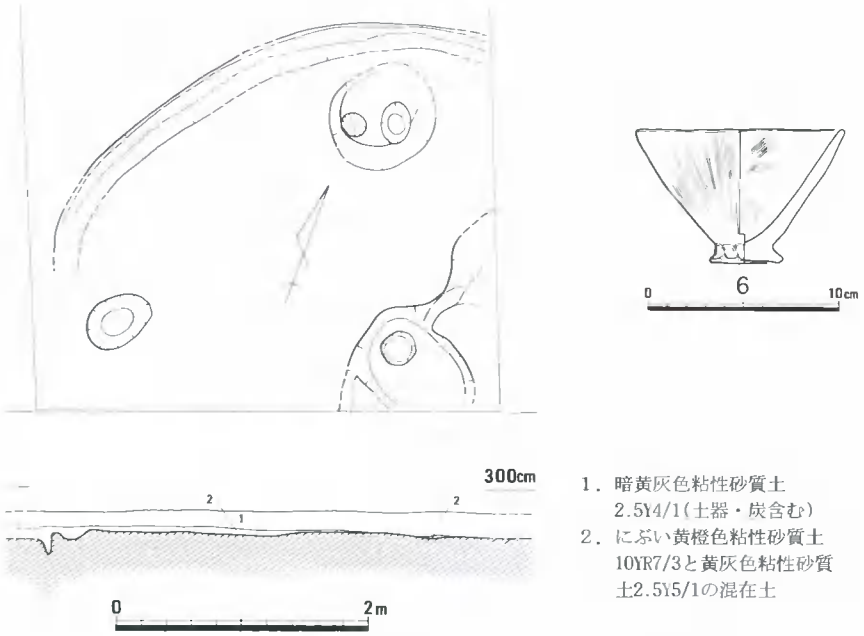
なお、調査区内であっても今回調査の対象とならなかった側溝およびその肩口にもわずか一部ではあるが数軒の竪穴住居をはじめとする遺構の存在が認められている。

２、遺構・遺物

竪穴住居２（第17・18図）

調査区南側、竪穴住居３の下層の海抜2.55mにおいて検出した。ただし、平面的には、上層の竪穴住居３による造成掘削によってほとんど消滅しており、わずかに壁体溝と柱穴の一部が検出できたにすぎない。柱穴は、合計３本が確認できたが最も遺存状況の良好なものは北側のもの１本である。規模は、90×70cm・深さ60cmを測り、底には長さ33cm・幅23cmほどの礎板痕跡が一段深く、住居中央部に平行する状況に検出できた。一方東側に検出したものは、長軸1.0m前後の楕円形および検出面からの深さ60cmと前者に類似するが、住居に伴うものかどうか、その性格については明確にはできなかった。壁体溝は、灰黄色の粘質土で埋没しており比較的明瞭に検出できた。壁体溝の状況から推測される竪穴住居２の規模は、径５ｍ前後であろう。

出土遺物は、南側柱穴



第18図　壁穴住居２（1/60）・出土遺物（1/4）

写真15．西壁（南東から）

写真16．西壁中央部（東から）

内に包含されていた小型の鉢が１点確認されたにすぎない。

時期は、出土遺物が少なかったことで明確にできないが、およそ弥生時代後期の範疇に位置づけられよう。

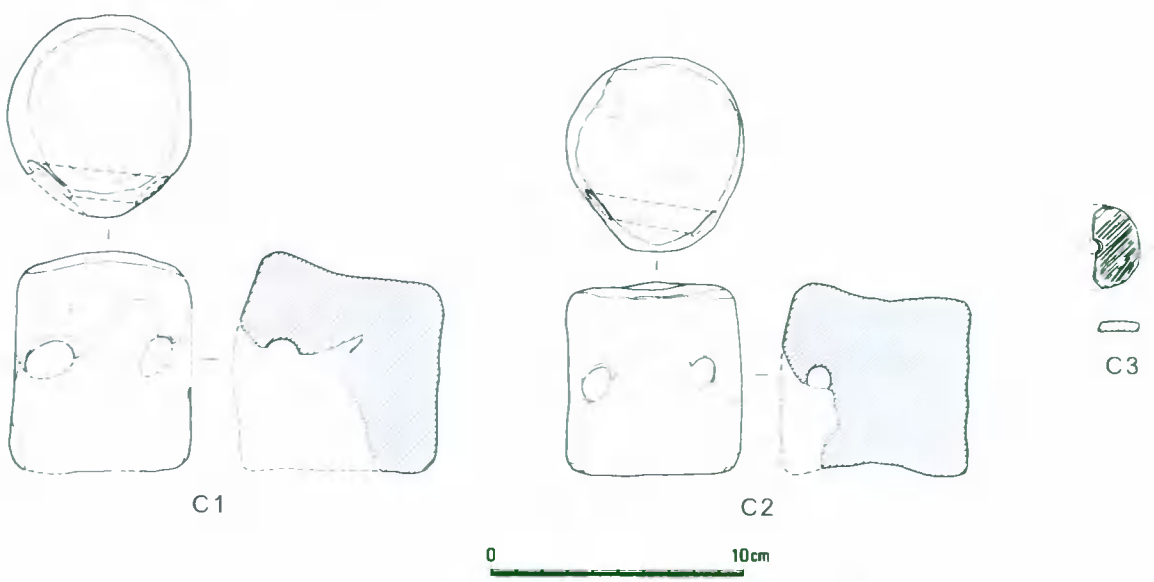
土壙２（第17・19～22図、写真17、図版３－３）

調査区の中央部において海抜2.75mで検出した。後述の竪穴住居３に切られるものの遺存状況は比較的良好であった。

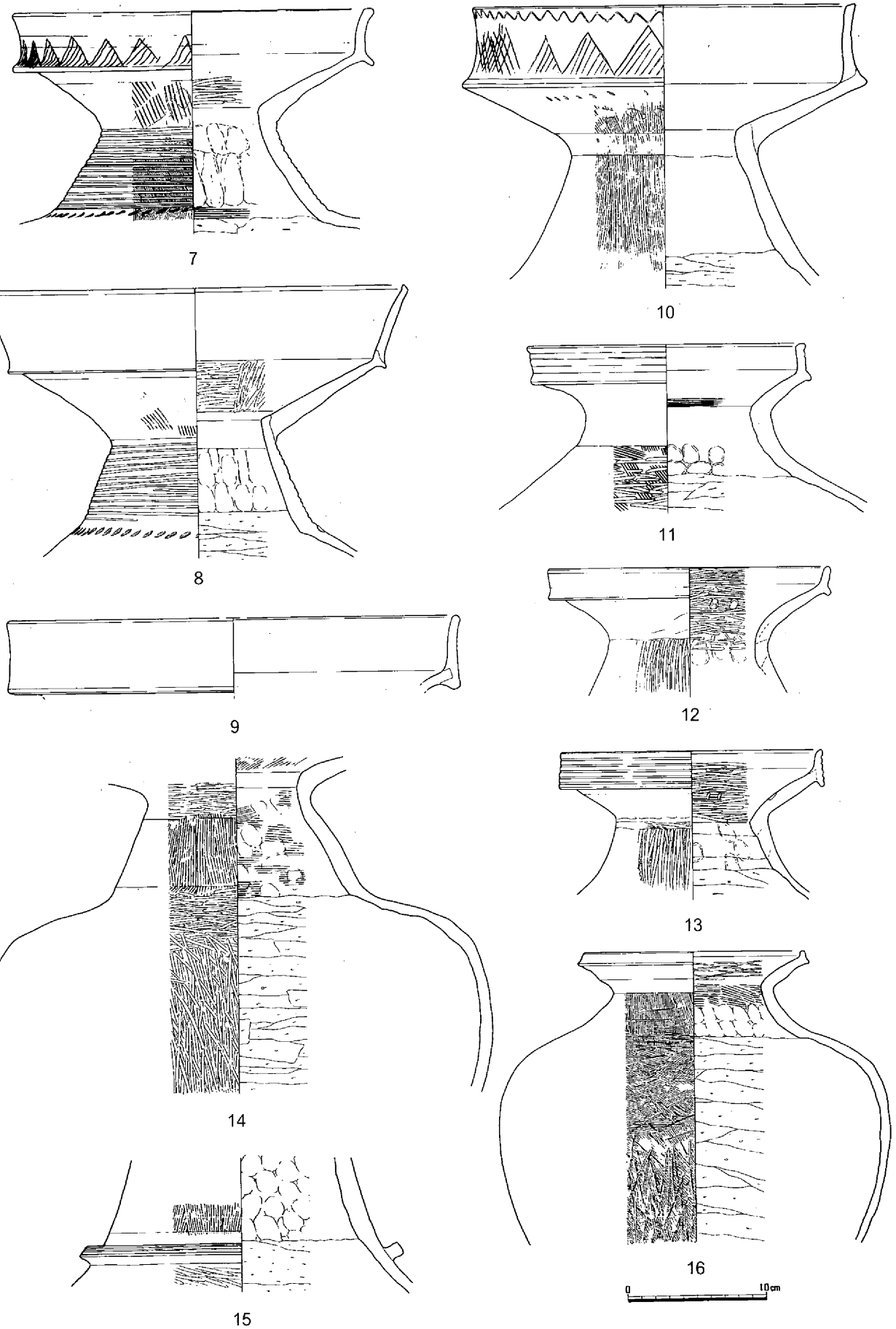
土壙は、平面形2.30m×1.30mの長方形を呈する。

写真17. 土壙２遺物出土状況（南西から）

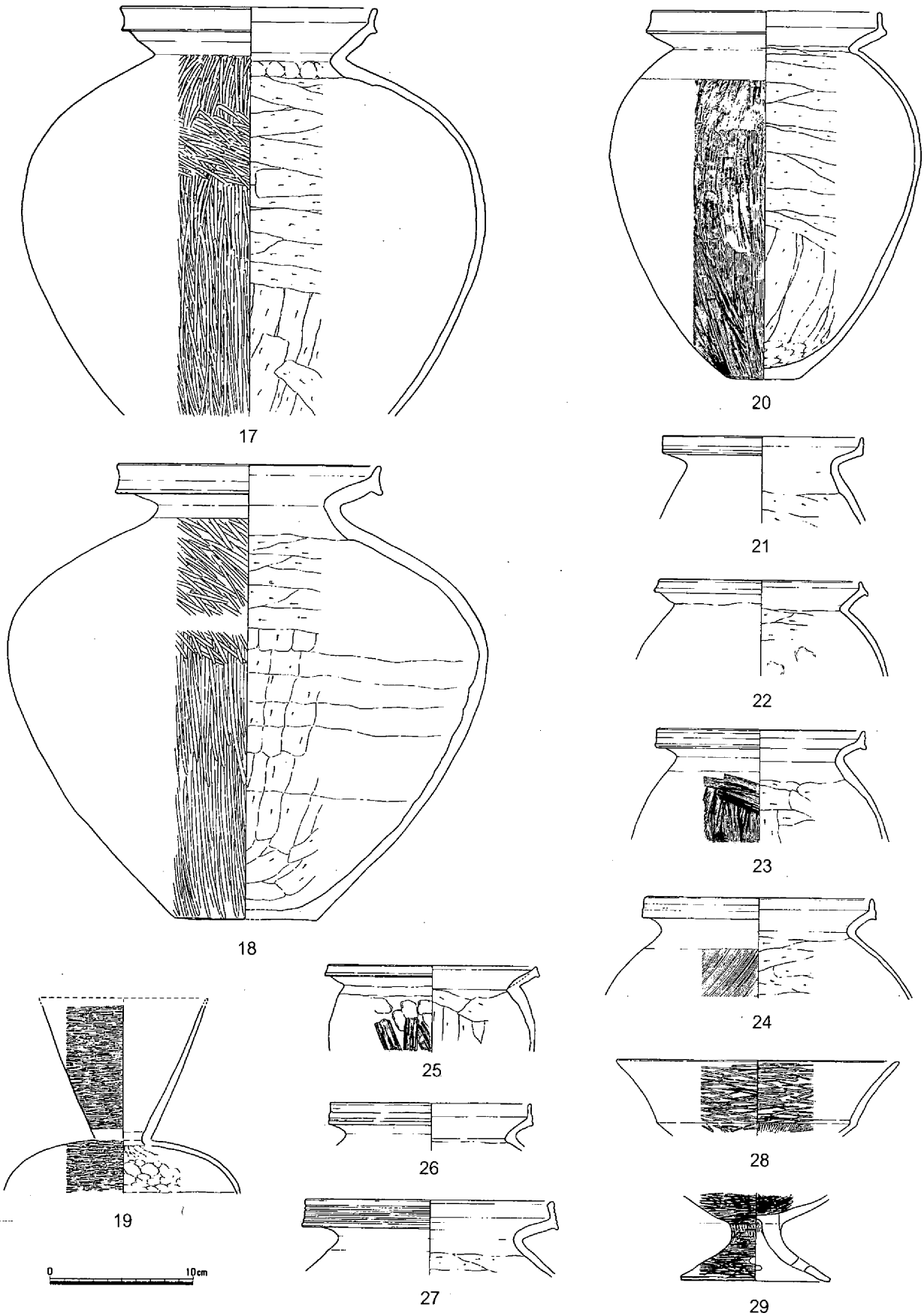
1．褐灰色粘性砂質土10YR4/1
2．にぶい黄色粘性砂質土2.5Y6/3
3．明黄褐色粘性砂質土2.5Y6/6



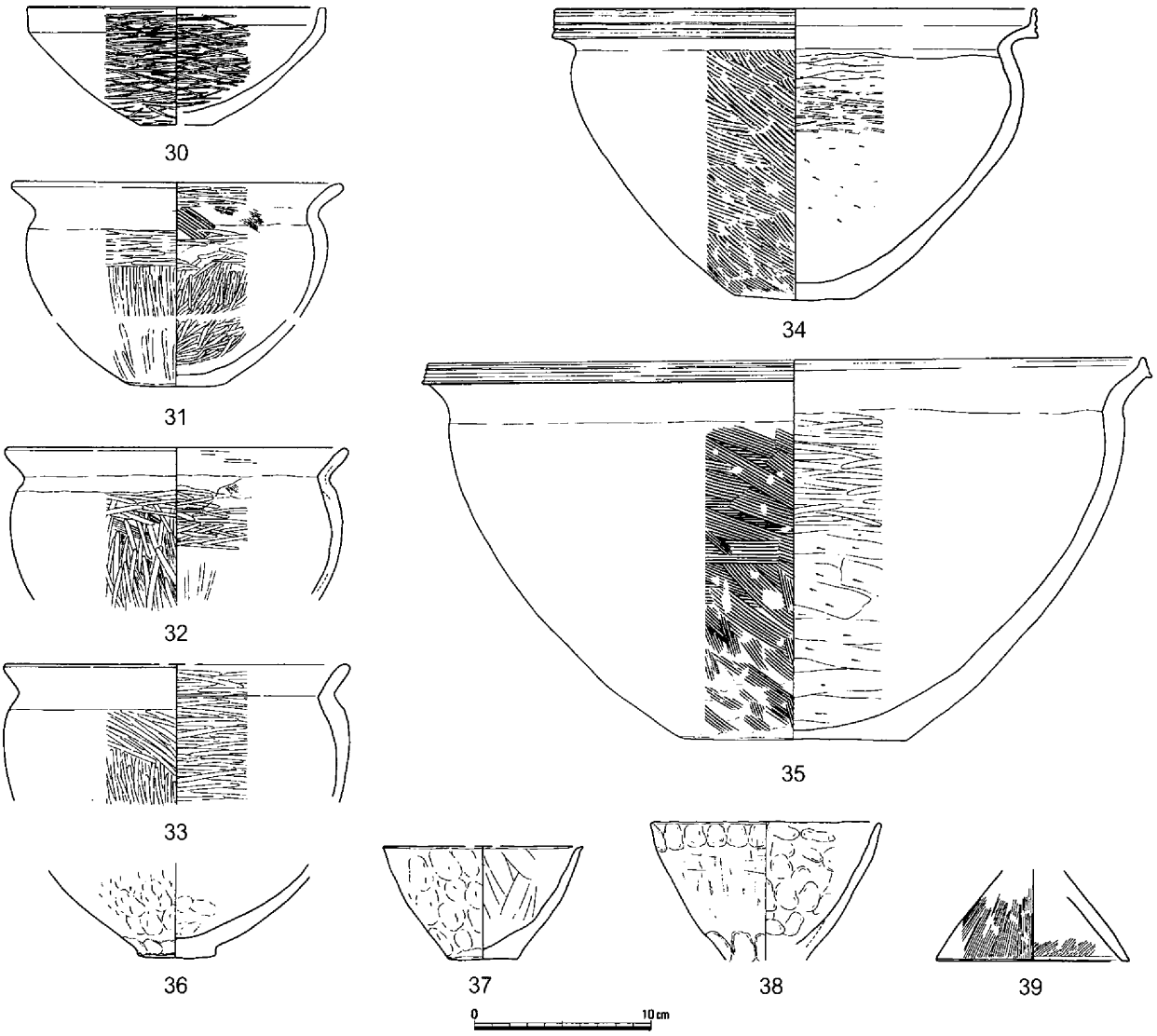
第19図　土壙２（1/30）・出土遺物(1)（1/3）



第20図　土壙２出土遺物(2)（1/4）



第21図　土壙２出土遺物(3)（1/4）



第22図　土壙２出土遺物(4)（1/4）

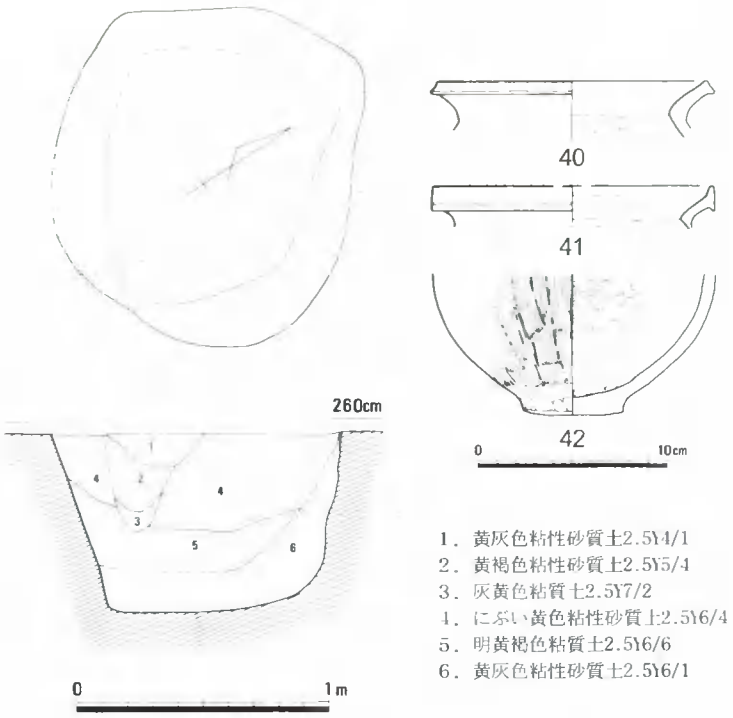
遺物は、土層断面中第２層および第３層においてのみ包含され、面的には北側半分のほとんどと、南側１ヵ所に集中している状況で検出できた。ほとんどが土器であるが、中には完全な状態のものではないが大型の土錘**Ｃ１・２**が破片を含め約３個体ほど確認されている。第３層は、床面から約40cm程一時に堆積したと考えられる砂質土であるが、土器をはじめとする遺物の包含はまったく確認されなかった。

土器は、壺・甕・高杯・鉢などの器種が確認されたが、復元の過程においてほとんどの土器が部分のみの復元で終了せざるを得ない状況で、完全な状態には復元できなかった。

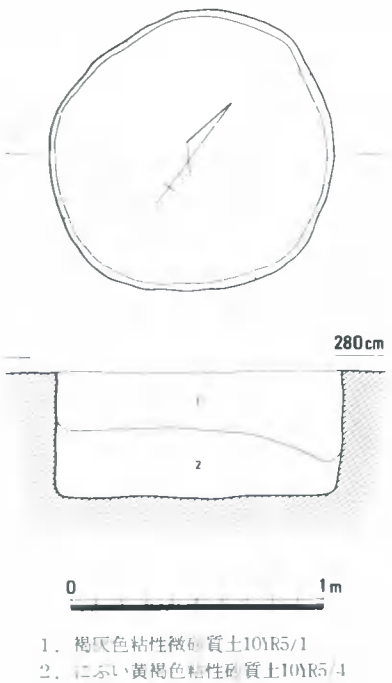
時期は、土器の特徴から弥生時代後期後半と考えられる。

土壙３（第17・23図）

竪穴住居２と重複した位置において、海抜2.55ｍで検出できた土壙である。土壙２の南２ｍの地点に所在する。およそ1.40ｍ×1.20ｍの楕円形を呈するが、北および北西部には直角気味にコーナーをもった部分が見られ、本来方形を基調とした平面形にあった可能性が高く、土壙２に直交した在り方が窺われた。深さは、検出面から床面まで70cmを測り、床面は平坦であった。壁は、床面まで比較



第23図　土壙３（1/30）・出土遺物（1/4）



第24図　土壙４（1/30）

的垂直気味に掘られていた。

出土遺物は、小片ながら３点が確認された。ただし、時期的には甕**41・42**が土壙３に伴う土器と言えよう。

時期は、弥生時代後期後半である。

土壙４（第17・24・25図、写真18、図版４－１）

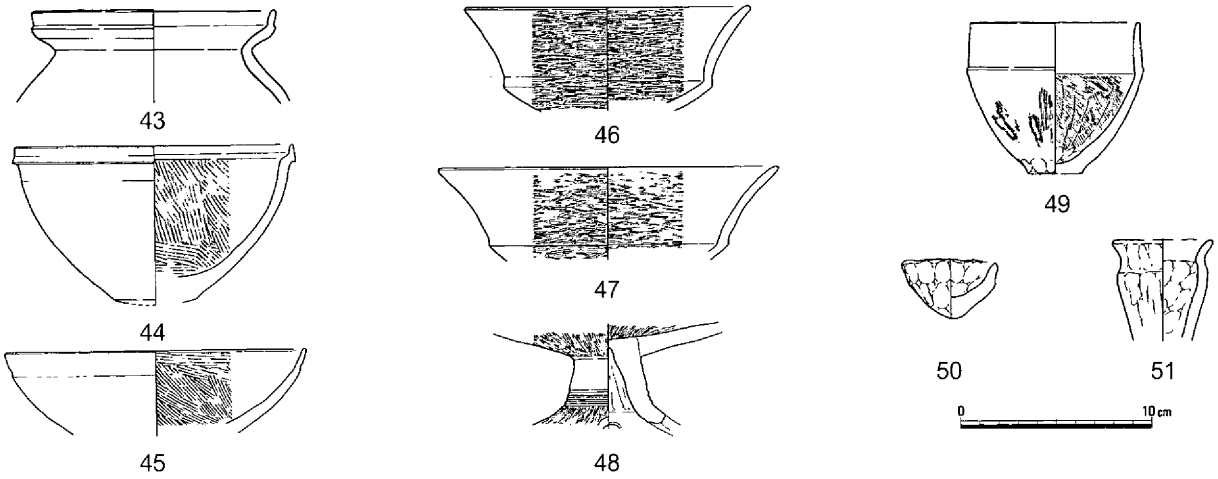
土壙２の西側60cmの地点に位置する。明治の水田層除去後の海抜2.75mで後述の古墳時代の竪穴住居３と同一面で検出したものである。

平面形態は、南北1.20m、東西1.10mの円形を呈する。壙底は、検出面から50cmのところにあり、平坦面を呈する。断面は、壁が検出面から壙底までほとんど垂直に掘られており、箱形を呈する。土壙内は、上下２層に分層される。下層は基盤の土質とあまり変わらない砂質土で埋没していたが、上層は暗灰色気味の砂質土で中には細片ながら多くの土器が投げ込まれた状況で埋積していた。これに対して、下層は炭・焼土・土器などまったく含まない層であった。

写真18．土壙４遺物出土状況（南東から）

遺物には、大型品はまったく含まれず比較的小型品である鉢・高杯・手捏ね土器が確認されている。

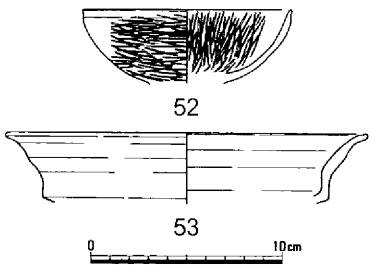
時期は、弥生時代後期後半である。



第25図　土壙４出土遺物（１/４）

柱穴１（第17・26図）

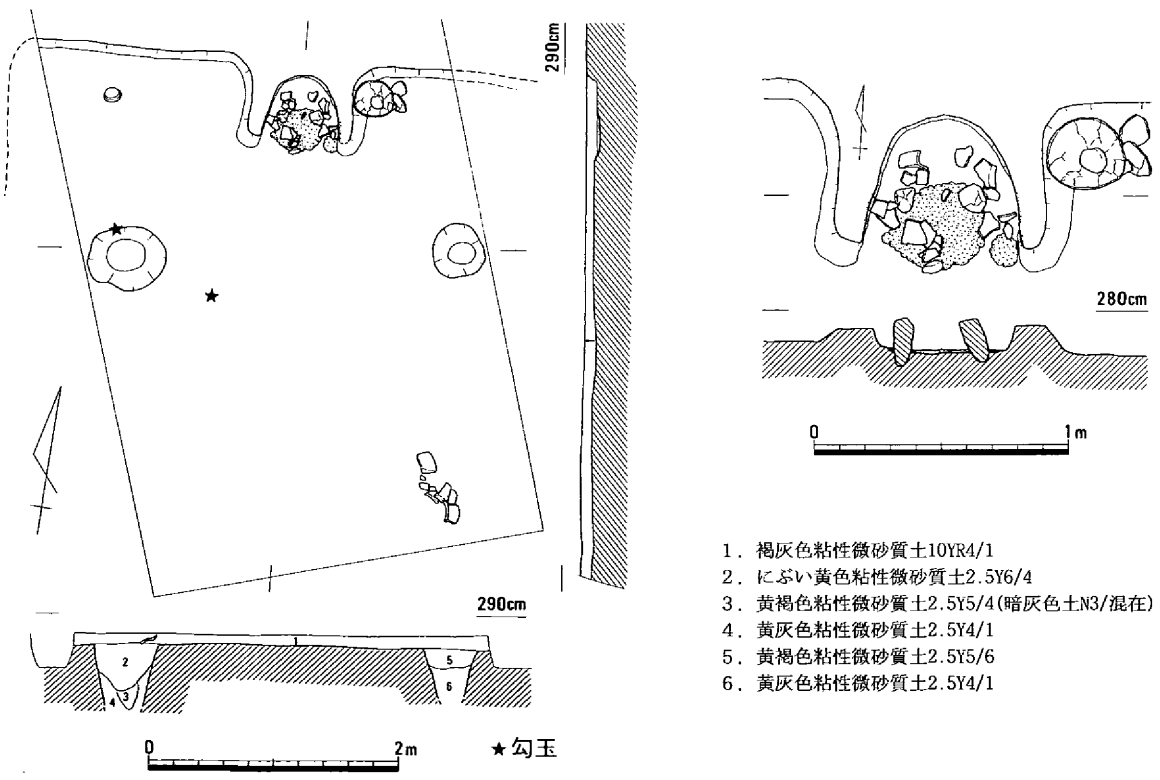
竪穴住居２埋没後、これを切って掘られたものである。土器は、高杯２点のうち**53**が弥生時代後期、**52**が古墳時代初頭である。柱穴の時期は古墳時代初頭への位置づけが考えられる。



第26図　柱穴１出土遺物（1/4）

竪穴住居３（第17・27・28図、写真19・20、巻頭図版３－２、図版４－３）

調査区の南半、明治の水田層直下の海抜2.82mにおいて確認された住居である。北側一辺には造り付けのカマドがあり、カマドの中心から西側2.30mには調査区外ではあるがこの住居のコーナ



第27図　竪穴住居３（1/60）・カマド（1/30）

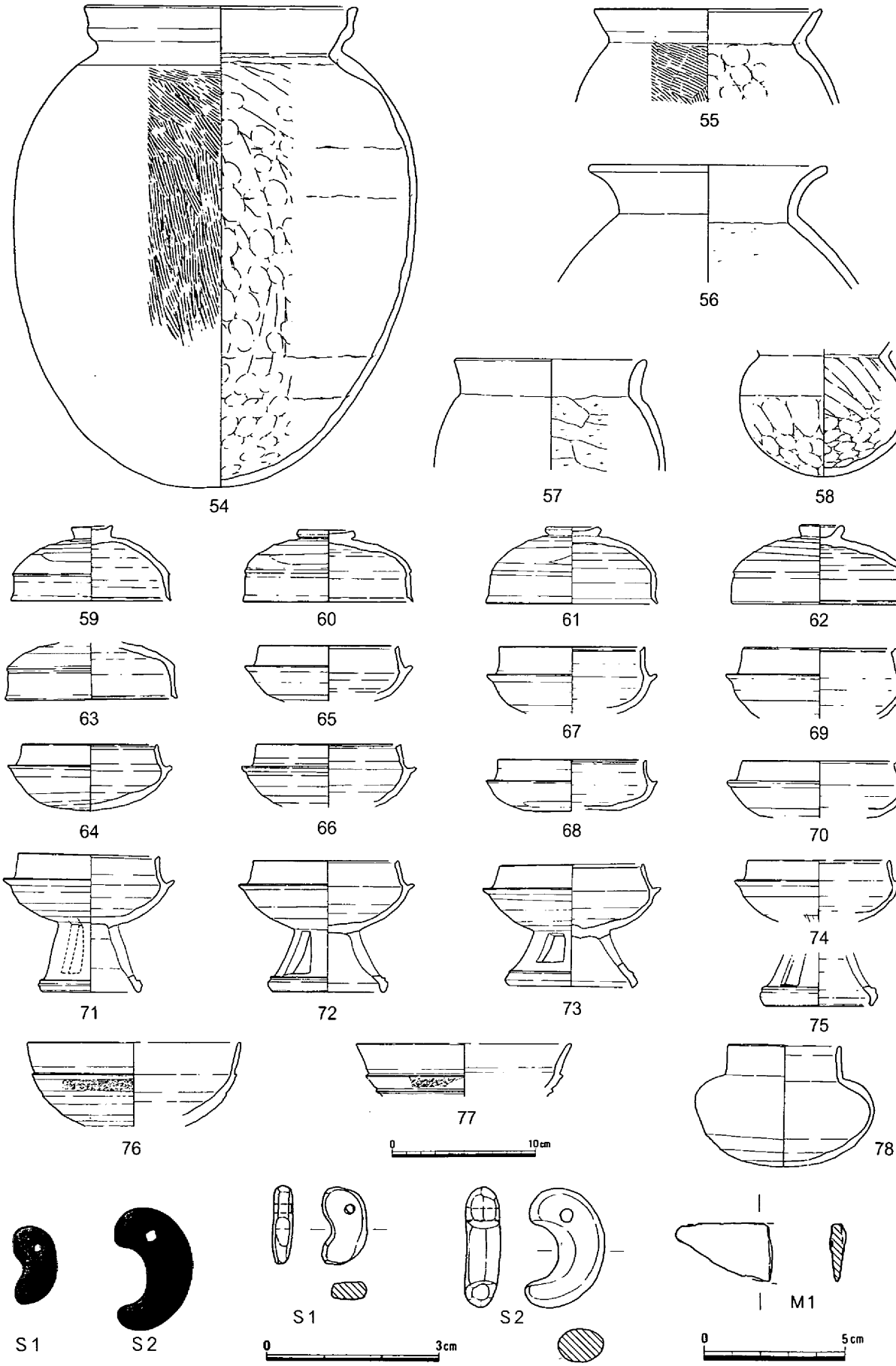


写真19.　Ｓ１・２（原寸）　　第28図　竪穴住居３出土遺物（1/4・1/1・1/2）

一を確認した。カマドの位置が北側一辺中央部と仮定した場合この住居の規模は、およそ4.60ｍが想定される。床面は、検出面から約10cmと浅い所にあり、既に上部のほとんどは消滅しており、後世において相当の削平があったことが窺われた。

カマドは、北壁一辺から長さ70cm程の袖状の張り出しが２本馬蹄形に見られ、それぞれその内側の壁には被熱痕跡が面的に確認された。平面的には、火処部分の中央付近には長さ18cmと20cmの石材を５～８cm地中に埋め、さらに約20cmの間隔をおいて頂部を内側に斜傾させた状態で倒立させ、頂部のレベルを揃えて配置していた。その前側におよそ径35cmの火処が存在していた。

カマド周辺には、土師器・須恵器の存在が確認されたが、本来の位置を保ったものはほとんど存在しなく、２次的に移動したものが大部分であった。その中でただ１点カマドの東側に検出された土師器の甕**54**は、胴部下半が床面に着いた状態で、また内面底部には小型の甕**58**が口縁部を下にした状態で置かれるなど意図的な状況が窺われた。

床面は、住居の平面検出面から約５cm前後のところに確認された。床面には直接着いているのは少ないが須恵器・土師器の破片が遺存しており、中には覆土中から小型の滑石製勾玉が２点と鉄滓の遺存が確認された。

写真20. 竪穴住居３床面遺物出土状況（西から）

柱穴は、面的には住居のコーナー付近に２本がそれぞれ位置しているのが確認された。また調査区境の南西隅に土層断面第９・10層に見るとおり柱穴が１本確認されており、それらに対応する柱穴と考える。これらによると柱穴掘り方は、径20～60cmで、中には検出面からの深さ90cmに達するものも確認された。

遺物は、須恵器が大半をしめる。内容的には、杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・直口壺など

第29図　竪穴住居４（1/60）

で概して小型品が多く、壺・甕など大型品は見られなかった。

時期は、須恵器・土師器から５世紀末～６世紀初頭と考える。

竪穴住居４（第17・29図）

竪穴住居３および土壙３などと同じく明治の水田層直下の海抜2.82ｍで竪穴住居３、土壙４などと同一面で検出した住居である。北東のコーナーにわずかに検出できたが、大半は調査区外に存在したことと、平面は既に相当削平されていたようで、わずかに住居造成段階での掘り方の一部がが確認できたにすぎない。したがって、平面的な広がりについては明確にできなかった。

遺物は、須恵器の甕片が１点検出できたにすぎず本来住居に伴っていたものかどうかは判然としなかった。

時期は、以上の状況から明言できないが須恵器の甕片からおよそ６世紀前半～後半への位置づけが考えられよう。　（島崎）

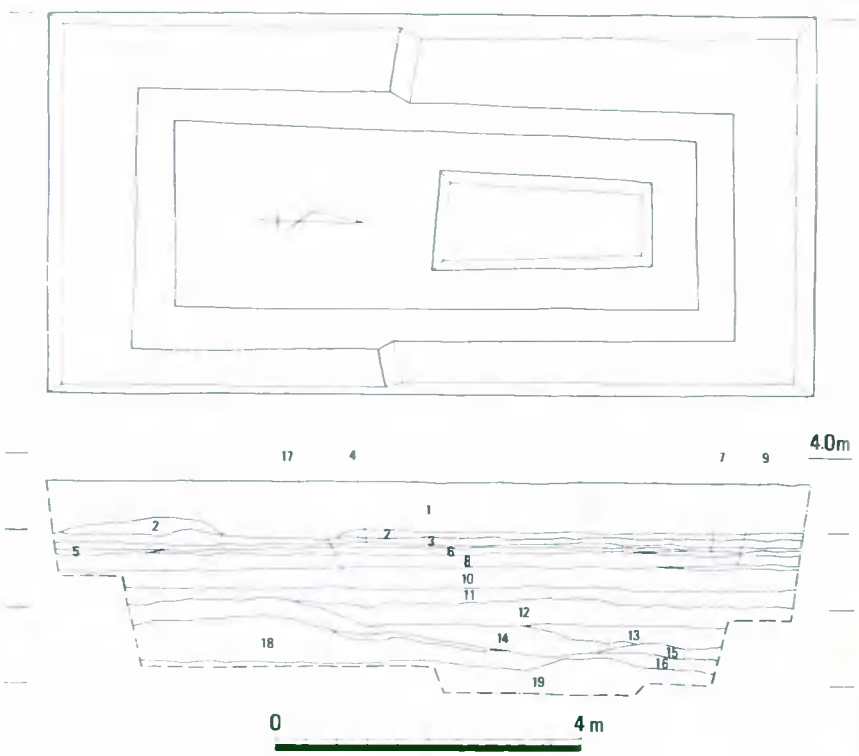
第９節　Ｔ８

１．概要

陸上競技場の西側に設定した、東西５ｍ×南北10ｍの長方形を呈する調査区である。

調査の結果、この調査区においては微高地は存在せず、海抜２ｍ前後より上層は比較的水平堆積による粘土層の重層的な堆積を、それ以下では全体にグライ化した粘土層の斜面堆積が確認できた。

前者の堆積は周辺の調査区の状況から中世以降の水田層の堆積を窺わせ、後者は旧河道内の堆積状況を示すものといえる。特に、後者については、第12層以下北側に向かって斜傾する層とこれに直交した北側土層断面の調査区北西隅に向かって斜傾する土層の状況から、河道の方向としては北東方向から南西方向に向けての流路の存在が推測された。ただし、河道の底については、危険回避のため海抜１ｍ付近で掘り下げを断念したため確認出来なかった。また、時期についても古代以降の須恵器・土師器片の出土をみたものの、資料不足の感は否めず明言できない。　（島崎）



1．アスファルト・造成土
2．青灰色粘性微砂10BG5/1
3．青灰色粘質土10BG5/1
4．オリーブ色粘質土5Y5/4
5．黄褐色粘質土2.5Y5/6
6．黄褐色粘質土(Mn化着)2.5Y5/4
7．にぶい黄色粘質土(Mn化着)2.5Y6/4
8．暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
9．灰黄色粘質土2.5Y6/2
10．褐灰色粘質土10YR5/1
11．褐灰色粘質土(Fe・Mn化着)10YR5/1
12．にぶい黄褐色微砂(Fe多く化着)10YR5/4
13．灰色微砂7.5Y5/1
14．灰色粘土(微砂含む)7.5Y4/1
15．灰色粘土10Y5/1
16．灰色粘土10Y4/1
17．暗青灰色粘土5PB4/1
18．灰色粘土(上面Fe化着)5Y4/1
19．オリーブ灰色細砂2.5GY5/1

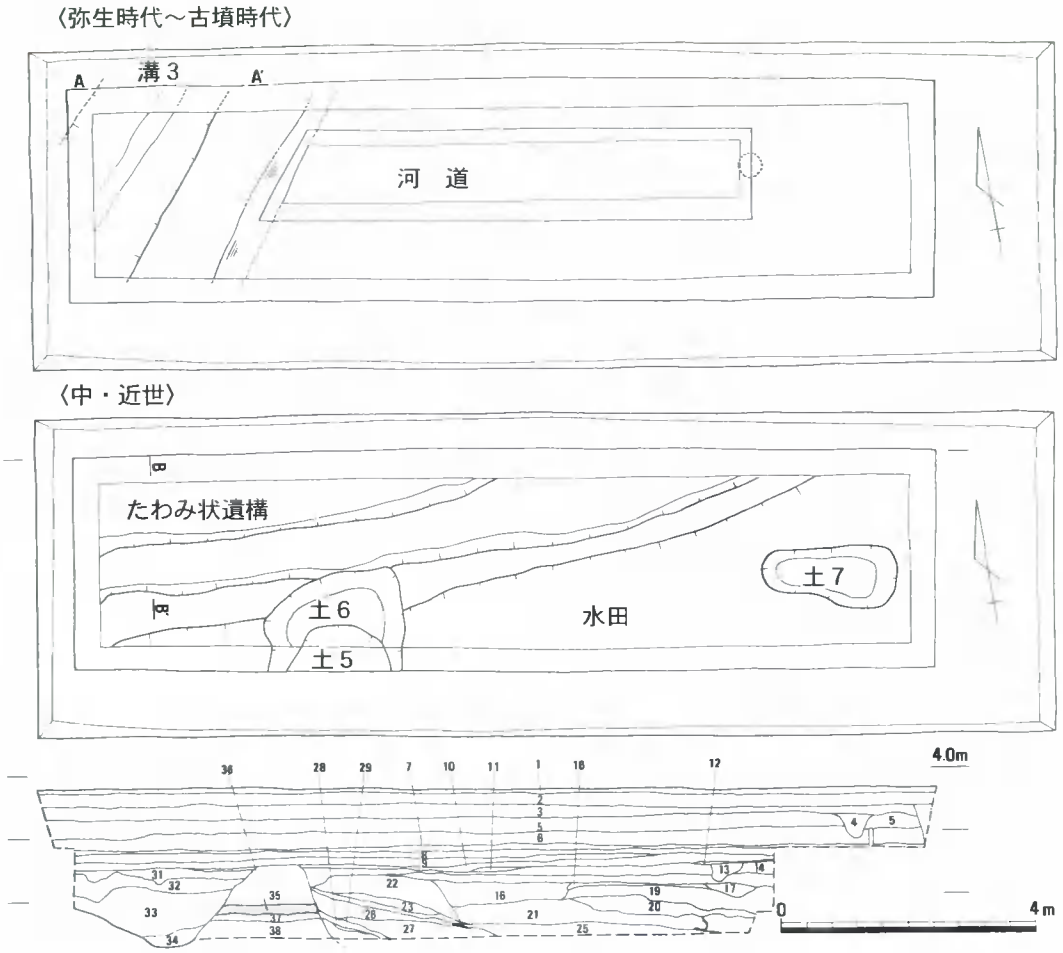
第30図　調査区および西壁土層断面図（１/100）

写真21．東壁（西から）

第10節　T９

１．概要

T９では上下２面の遺構面を確認した。下面の遺構検出レベルは海抜2.1m付近で、河道および溝を



1．アスファルト　　2．砕石
3．造成土　4．攪乱　5．真砂土
6．緑灰色粘性微砂7.5GY5/1
7．灰オリーブ色粘性砂質土5Y6/2
8．灰黄色砂質土(Mn沈着)2.5Y6/2
9．黄灰色粘性砂質土(Fe・Mn沈着)2.5Y6/1
10．褐灰色砂質土(Fe・Mn沈着)10YR6/1
11．黄灰色砂質土(Fe・Mn沈着)2.5Y6/1
12．明黄褐色砂質土10YR6/6
13．褐灰色粘性砂質土(Mn沈着)10YR6/1
14．にぶい黄橙色粘性砂質土10YR6/4
15．灰黄褐色粘性砂質土(Mn沈着)10YR6/2
16．黄褐色微砂10YR5/6(褐灰色粘質土を斑状に含む)
17．黒褐色粘性砂質土7.5YR3/2
18．にぶい赤褐色砂質土5YR4/4
19．黒褐色粘性砂質土5YR3/1
20．にぶい黄褐色微砂10YR5/4
(褐灰色粘質土を斑状に含む)
21．黄褐色粘性微砂2.5Y5/3
22．黄褐色微砂2.5Y5/3
23．黄灰色微砂2.5Y6/1
24．黄灰色粘性微砂2.5Y5/1
25．オリーブ灰色粘性微砂2.5GY5/1
26．にぶい黄褐色微砂10YR5/2
27．灰黄褐色微砂10YR5/2
28．黄褐色粘性微砂2.5Y5/1
29．褐灰色微砂10YR5/1
30．にぶい黄橙色微砂10Yk6/4
31．褐灰色粘質土10YR4/1
32．暗灰黄色微砂2.5Y5/2
33．黄褐色微砂2.5Y5/3
34．灰色粘土N4/
35．灰黄色粘質土2.5Y6/2
36．黒褐色粘質土10YR3/1
37．灰黄褐色粘質土10YR4/2
38．褐灰色粘質土10YR4/1

第31図　遺構配置図および北壁土層断面図（1/120）

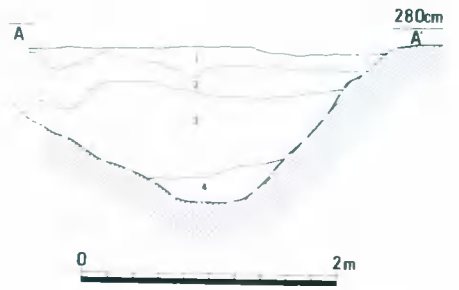
写真22．北壁東半部（南から）

検出した。河道からは弥生土器および土師器が多く出土し、弥生時代後期後半から古墳時代前期前葉にかけて存続したものと考えられる。溝３は出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、河道とほぼ同じ時期に営まれたものと推測できる。河道と溝３の間には土手状の高まりがみられた。土手状高まりは幅約2.3m、高さ約80cmを測り、盛り土ではなく自然の沖積作用により形成された土が河道や溝による削平を逃れ、結果的に残存していたものである。なお、この高まりの土層断面観察で海抜1.8mほどのレベルで黒褐色土層が確認され、他のトレンチと同様に弥生時代前期と推定される水田層が残存していることが確認された。一方、上面の遺構面の検出レベルは海抜2.7m付近で水田および土壙等の遺構が確認された。これらの遺構は出土遺物および検出レベル等から中世から近世にかけての遺構と考えられる。

これらの調査成果から、Ｔ９付近は弥生時代前期には水田が存在していたものの、弥生時代後期後半頃に溝あるいは河道が形成され、中世以降は主に水田として利用されていたことがわかった。

溝３（第31・32図、写真23）

溝３は調査区西端に位置する幅2.8m以上、深さ約1.25mの北東から南西方向に走る溝である。溝の断面は浅いＶ字状を呈し、人為的に掘削された可能性が否定できない。なお、溝からの出土遺物はなく、溝の詳細な時期は不明であるが、河道と同様の方向に掘削されていることから、河道と同じく弥生時代後期後半から古墳時代前期前半を中心に営まれたものと考えられる。



第32図　溝３(1/60)

写真23. 溝３断面（南から）

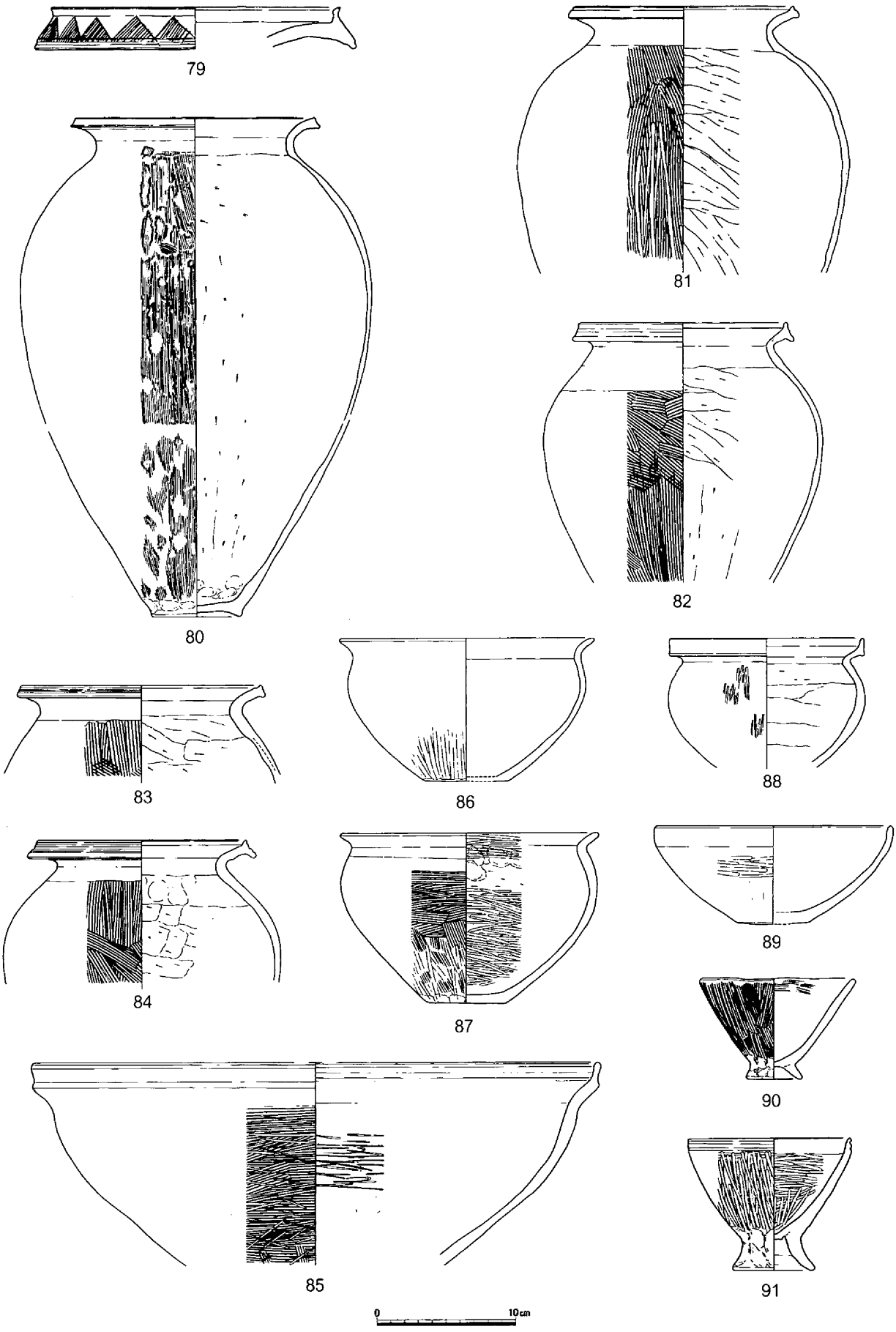
河道（第31・33・34図）

河道は北東から南西方向に流れ、幅10m以上、深さ60cm以上を測る。河道の東岸は調査区外のため不明であるが、河道の西岸は沖積作用で堆積した土を河道の流路により浸食した結果、形成されたような印象を受ける。河道内の埋土は粗砂を中心とする砂質土で構成されており、下半部を中心に土器片がおよそコンテナ５箱ほど出土した。土器片は弥生土器・土師器を中心とするものである。

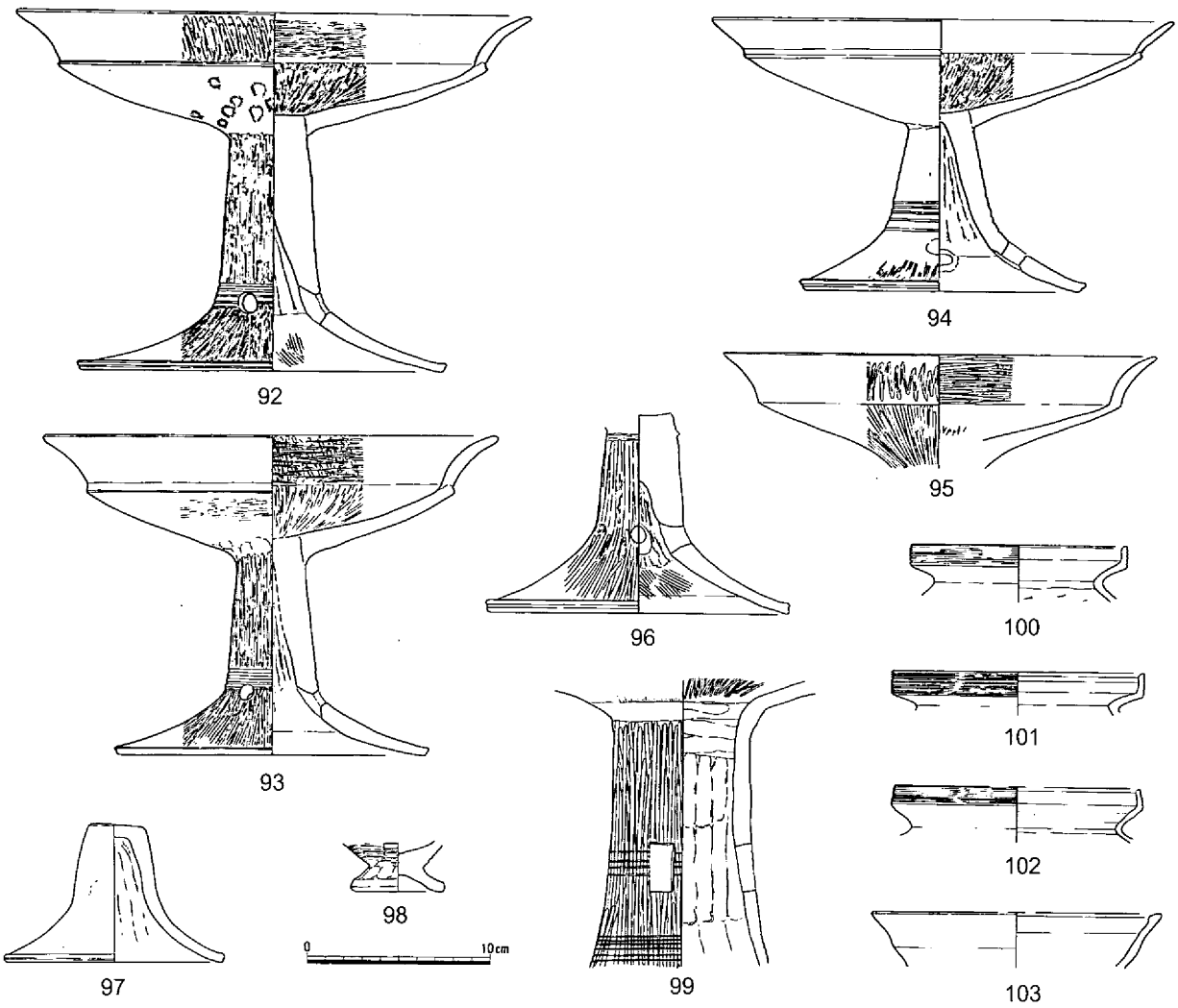
79～99は弥生土器である。79は壺の口縁部で、口唇部に刻目が、また、外面には鋸歯文が施されている。80～84は甕である。85は大型の鉢である。86～89は小型の鉢である。90・91は台付鉢である。92～96は高杯である。97は蓋である。98は製塩土器の脚部である。99は器台と考えられる。100～103はいずれも土師器甕の口縁部である。これらの出土遺物より河道は弥生時代後期後半頃から古墳時代前期前半頃まで存在していたものと考えられる。

土壙５（第31・35図）

調査区の南辺に位置する円形の土壙で、径約1.65m、深さ約１ｍを測る。出土遺物がなく時期は不



第33図　河道出土遺物(1)（1/4）



第34図　河道出土遺物(2)（1/4）

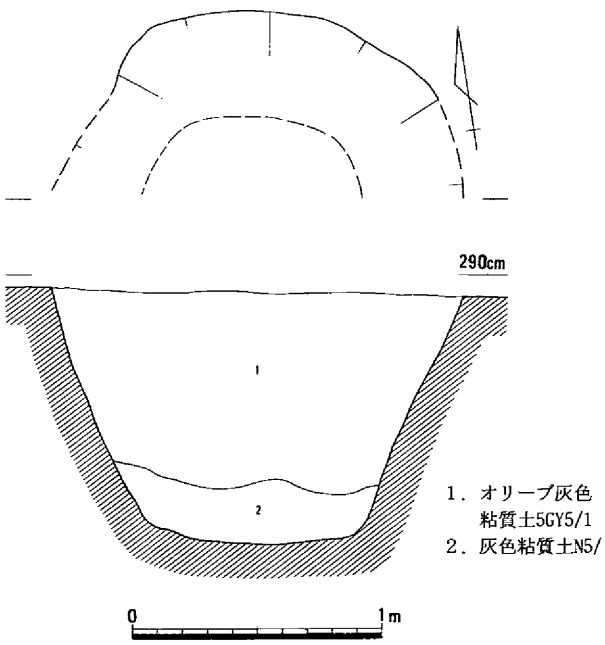
明であるが、遺構の検出レベルが近・現代の水田耕作土の直下に近いことから、近世以後に営まれた可能性が指摘できる。土壙の性格については農業関連の井戸のようなものであった可能性が考えられよう。

土壙６（第31･36図）

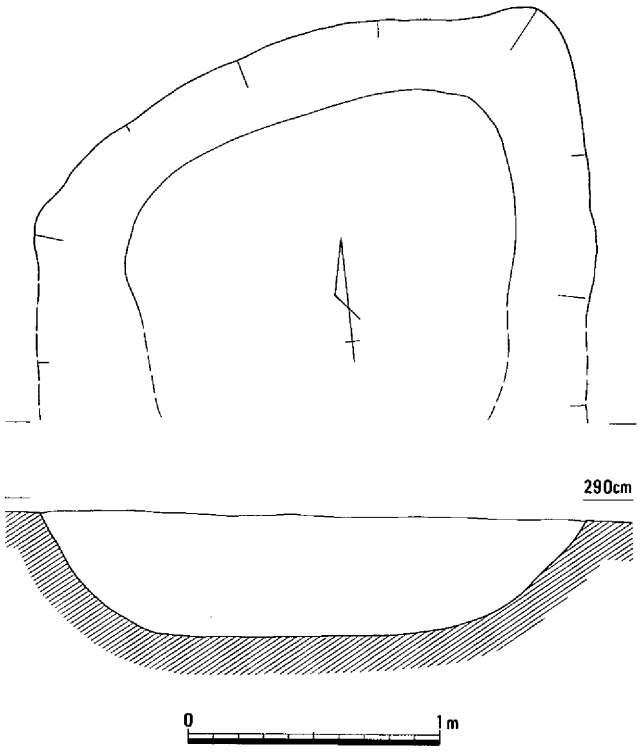
土壙５の北に隣接する土壙で幅約2.2m、深さ約50cmを測る。土壙５を囲むように掘られていることから、土壙５に関連する遺構と考えられる。出土遺物はないが、近世以後のものである可能性が高い。

土壙７（第31・37図）

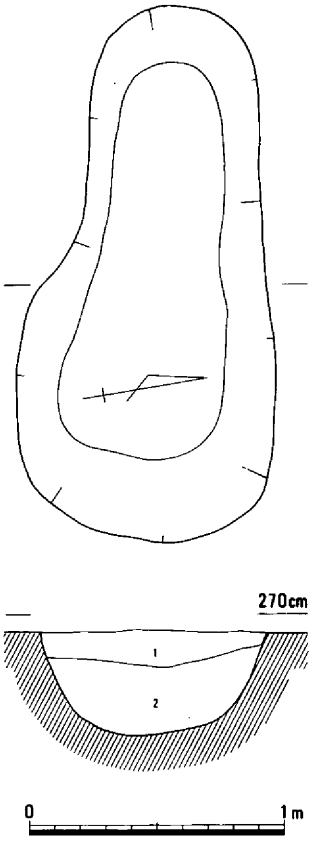
調査区の東部で検出された土壙である。長さ2.15m、幅約１m、深さ約40cmを測る。詳細な時期は不明であるが、検出レベルから中世



第35図　土壙５（1/30）



第36図　土壙６（1/30）



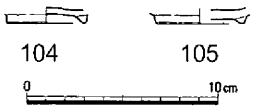
1．明褐灰色粘性砂質土
2．褐灰色粘性砂質土

第37図　土壙７（1/30）

を中心とする時期に比定できよう。

水田（第31・38図）

調査区の南半部で検出した。調査区の北東から南西にいたる畦畔状の高まりから南に向かって広がっているが畦畔等は検出されていない。水田に伴う出土遺物は僅少であるが、土師器片があげられる。**104・105**は土師器椀片である。これらの遺物から水田は中世後半以降に営まれたと考えられる。



第38図　水田出土遺物（1/4）

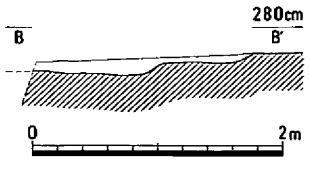
たわみ状遺構（第31・39図）

調査区の北半部で北に向かって段状に落ち込んでいるたわみ状の遺構を検出した。たわみ状遺構からいわゆる早島式土器片等が出土したことから、この遺構は中世後半以降のものと考えられる。

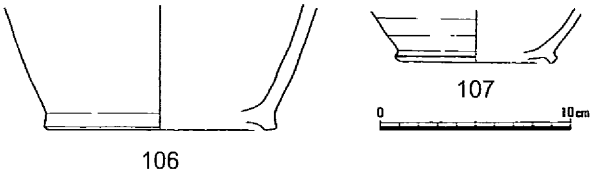
その他の出土遺物（第40図）

Ｔ９では河道や水田等から出土した土器のほか、弥生土器、土師器、須恵器片等が出土している。その中で図示しえたものとして第40図の須恵器があげられる。**106**は壺の高台部、**107**は杯身の高台部と推測される。

（金田）



第39図　たわみ状遺構（1/60）



第40図　その他の出土遺物（1/4）

第11節　　T10

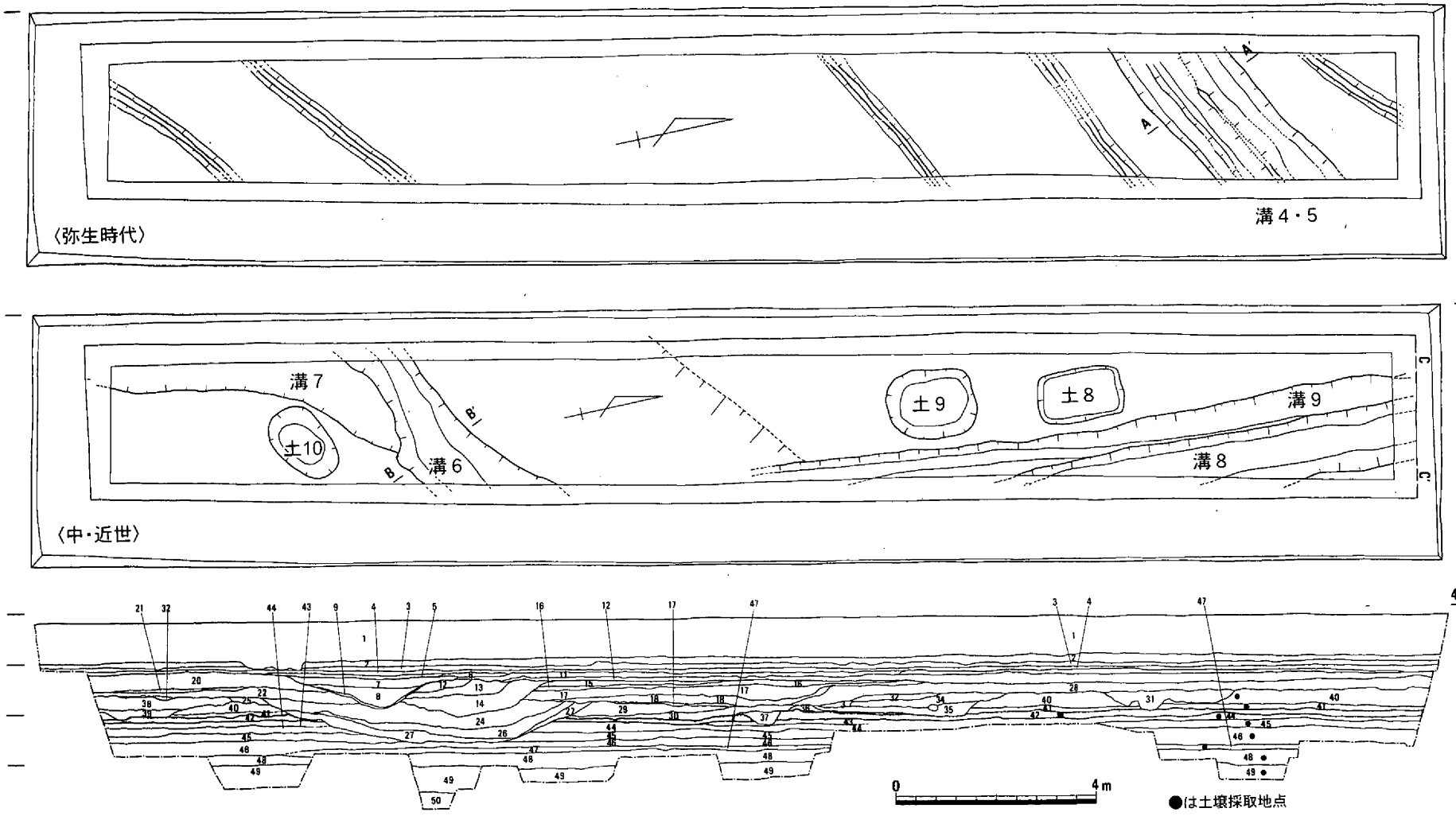
１．概要

T10は陸上競技場の北西に設けた南北方向の長大なトレンチである。層序は、第１層が造成土、第２・３層が近代の洪水砂と水田、第４～39層は古代から近世までの包含層と溝の埋土。第40層は弥生時代の包含層、第42層は弥生前期水田、以下は自然堆積層である。深掘部の第48～50層は砂質が強く、開田以前の旧河道の堆積物と考えられる。第40層以下についてはプラント・オパール分析を実施した。検出された遺構には弥生前期水田のほか、弥生時代後期の溝、中・近世の溝と土壙がある。

写真24．西壁（北東から）

写真25．西壁北端部（東から）

写真26．西壁中央部（東から）



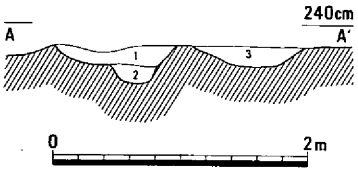
1．アスファルト・造成土
2．暗緑灰色微砂10GY4/1
3．暗緑灰色粘質土10GY4/1
4．灰オリーブ色粘質土7.5Y5/3
5．黄灰色粘質土2.5Y6/1
6．オリーブ黄色粘質土5Y6/4
7．黄灰色粘質土2.5Y5/1
8．灰色粘質土(Fe沈着)10YR5/1
9．黄褐色粘質土(Fe沈着)10YR5/6
10．灰黄色粘質土2.5Y6/2
11．にぶい黄色粘質土2.5Y6/3
12．灰黄褐色粘質土10YR6/2
13．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4
14．褐灰色粘性微砂10YR5/1
15．灰黄色粘質土(Fe・Mn沈着)2.5Y6/2
16．黄灰色粘質土(Fe・Mn沈着)2.5Y6/1
17．灰色粘質土(Fe・Mn沈着)5Y5/1
18．暗灰黄色微砂(Fe沈着)2.5Y5/2
19．灰色粘性微砂5Y5/1
20．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
21．灰色粘質土(Fe沈着)5Y6/1
22．灰色粘性微砂(Fe・Mn沈着)5Y6/1
23．灰色微砂7.5Y6/1
24．灰色粘質土(Mn沈着)5Y5/1
25．褐灰色粘質土10YR5/1
26．灰色粘質土7.5Y4/1
27．灰色粘質土(微砂含、Fe沈着)
28．黄灰色粘性砂質土(Fe・Mn沈着)2.5Y5/1
29．暗灰黄色粘質土(Fe・Mn沈着)2.5Y5/2
30．にぶい黄色微砂(弥生～中世土器多、Fe多く沈着)
31．灰色粘質土5Y5/1
32．黄褐色粘性砂質土(Fe多く沈着)2.5Y5 4
33．にぶい黄色微砂(Fe多く沈着)2.5Y6/4
34．黄灰色粘質土(Fe多く沈着)2.5Y4/1
35．褐色粘質土(弥生～中世土器多、Fe多く沈着)
36．黄灰色粘質土(Fe多く沈着)2.5Y4/1
37．灰色粘質土10Y5/1
38．青灰色粘質土(Fe沈着)10BG5/1
39．灰オリーブ色粘質土5Y6/2
40．明黄褐色粘質土(Fe・Mn沈着)2.5Y6/6
41．暗灰黄色粘質土(Fe・Mn沈着)2.5Y5/2
42．黒褐色粘質土10YR2/2
43．灰色粘質土5Y4/1
44．暗灰色粘質土N3/
45．灰色粘質土N4/
46．オリーブ灰色粘質土10Y6/2
47．暗青灰色粘質土5BG4/1
48．灰色微砂7.5GY6/1
49．緑灰色粘質土(微砂含)
50．暗灰色細砂(粘質土含)N3/

第41図　遺構配置図および西壁土層断面図（1/120）

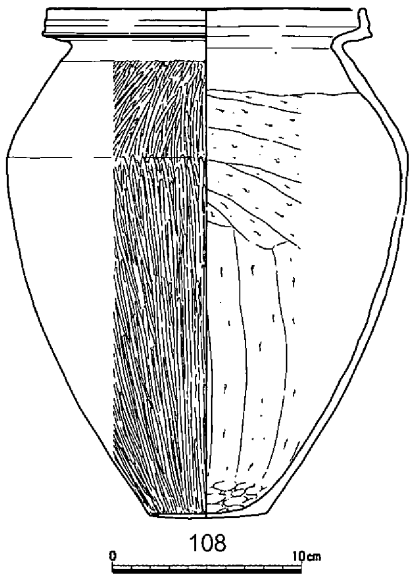
溝４・５（第41・42図、図版５－３）

調査区の北端付近、第40層上面で検出された２条の溝で、北東から南西へと流下する。第40図Ａ—Ａ´断面での幅は両者併せて1.95m、深さは溝４が31cm、溝５が15cmを測る。この２条は流路がほとんど平行で、埋土も酷似し、調査区西壁断面では区別できなかったことと併せると、本来は底面に凹凸のある１条の溝であった可能性が高い。付近で同時期の遺構が検出されておらず、溝の性格は不明である。

時期は、溝５から出土した甕108により、弥生時代後期後半と考えられる。



1．灰色粘質土N5/
2．灰色粘質土N4/
3．灰色粘質土10Y5/1



第42図　溝４・５（1/60）・溝５出土遺物（1/4）

水田（第40図、図版６－１）

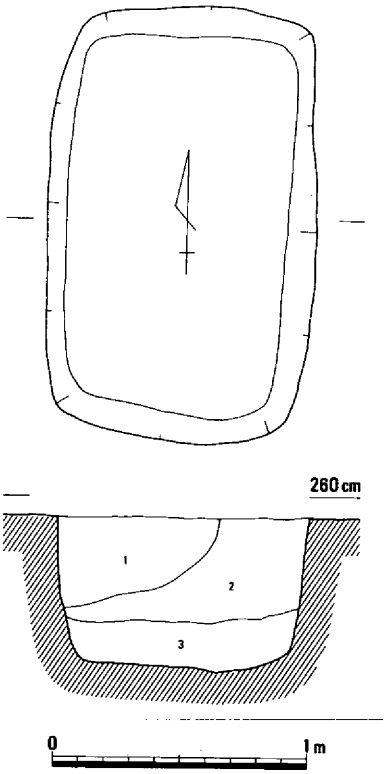
西壁土層断面図で第42層とした弥生時代前期の水田である。田面の海抜高は1.9～2.0mを測る。畦畔は、北東—南西方向のものが５条、ほぼ平行に検出されたが、直交する畦畔は確認されていない。トレンチ中央部では中近世の溝による攪乱のため畦畔が残存していない。土壌のプラント・オパール分析を依頼したところ、第42層自体からはイネ属が検出されず、むしろ直上の第41層で多産するとの結果が得られている。

土壙８（第41・43図）

調査区の北半、溝８・９の西側に位置する土壙である。平面形は長方形、断面形は箱状を呈し、壁面の傾斜は垂直に近い。規模は、長さ1.72m、幅1.10m、深さ50cmを測り、弥生前期水田層まで掘り込まれている。遺物は出土していないが、埋土や検出層位から近世の遺構と考えられる。

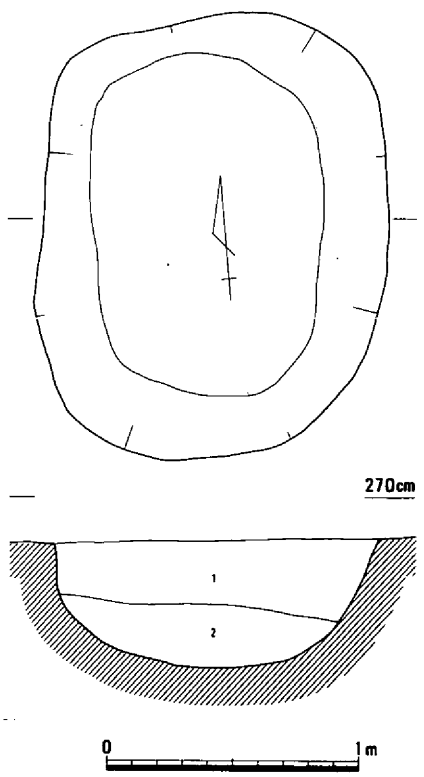
土壙９（第41・44・45図、図版６－３）

土壙８の南側に、主軸方向をほぼ揃えて隣接す



1．灰色粘質土N5/
2．灰黄色粘性砂質土2.5Y6/2
3．にぶい黄褐色粘性砂質土10YR5/3

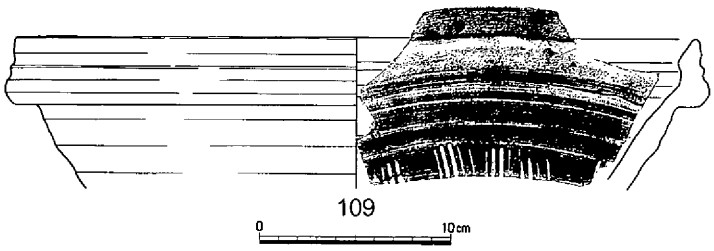
第43図　土壙８（1/30）



1．黄灰色粘性砂質土
2．灰黄色粘性砂質土

第44図　土壙９（1/30）

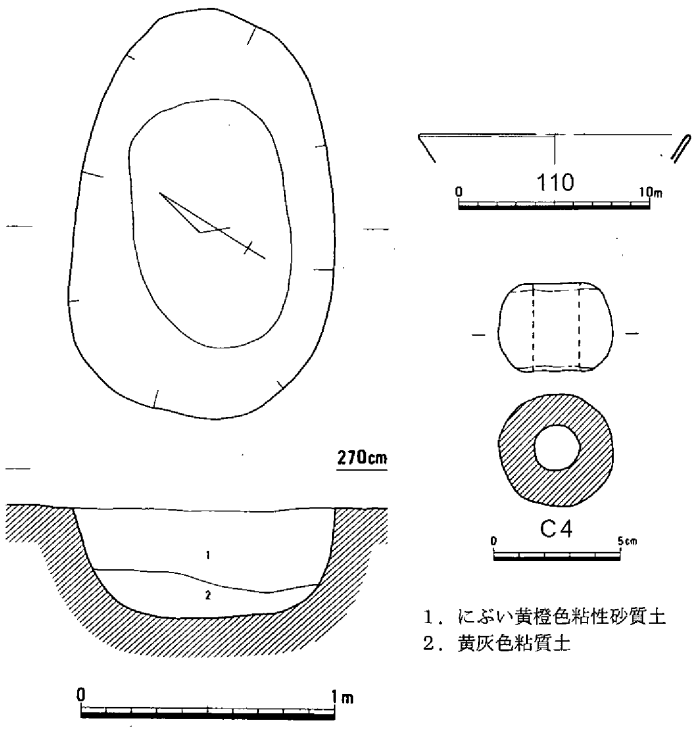
る土壙である。平面形は不整な隅丸長方形、断面形は椀状を呈する。長さ1.74m、幅1.38m、深さ49cmを測る。土器片等が少量出土しており、**109**は備前焼の擂鉢である。 出土遺物や埋土等から、土壙の時期は近世と考えられる。



第45図　土壙９出土遺物（1/4）

土壙10（第41・46図）

調査区の南端付近で検出した土壙である。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈する。規模は、長さ1.61m、幅1.02m、深さ42cmを測る。遺物は土器片等が少量出土した。**110**は白磁片、**C４**は土錘である。土壙の時期は、遺物や埋土等から近世と考えられる。



第46図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

溝６（第41・47図）

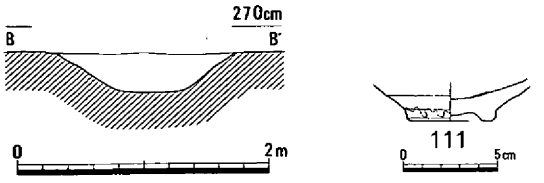
調査区南半部で検出した溝である。北東から南西に流走し、後述する溝７の埋没後に掘削されている。西壁断面図では第７～９層が該当する。少量の遺物が出土しており、図示した**111**は肥前陶器の碗の底部である。時期は近世と考えられる。

溝７（第41・48図）

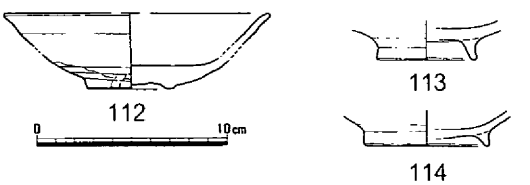
調査区南半部で検出した、北東から南西に走る幅の広い溝である。平面では輪郭を明瞭に検出できなかったが、西壁断面図で見ると第12～14層、第15～18層、第24～27層等をそれぞれ一つのまとまりと捉えられ、数次にわたり埋没と再掘削が繰り返されたものと思われる。出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器等が多いが、最下層から中世土器**113**・**114**、最上層から肥前陶器**112**が出土したことから、中世から近世にかけて数度の改修を経つつ機能した溝と考えられる。

溝８（第41・49図）

調査区の北半で検出した南北方向の溝である。幅1.20m、深さ45cm前後を測る。後述する溝９の埋没後、それを踏襲する形で掘削されている。備前焼甕**115**が出土しており、時期は近世に比定される。



第47図　溝６（1/60）・出土遺物（1/4）

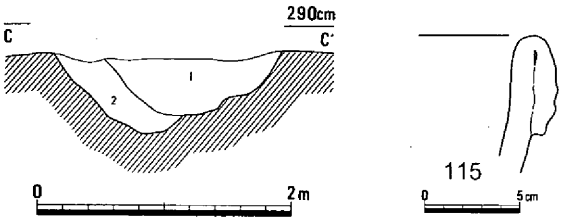


第48図　溝７出土遺物（1/4）

流走方向からみて、条里の坪割に関連する溝の可能性がある。

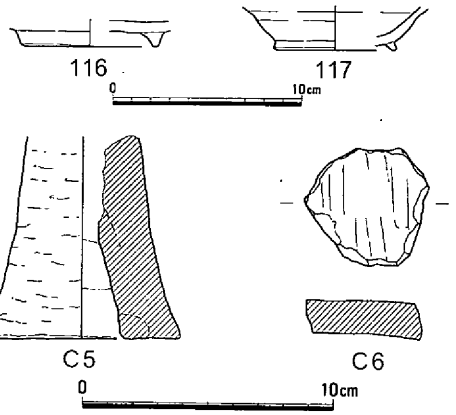
溝９（第41・49・50図）

調査区北半部で、溝８に切られる状態で検出された溝である。方向は溝８とほぼ同一である。深さは60cm前後を測る。図示した遺物のうち、**116・117**は中世土器、**Ｃ５**は用途不明の土製品、**Ｃ６**は備前焼を加工した円板状土製品である。時期は近世、性格については溝８同様、条里との関連が想定される。



1．灰色粘質土10Y5/1
2．黄灰色粘質土2.5Y5/1

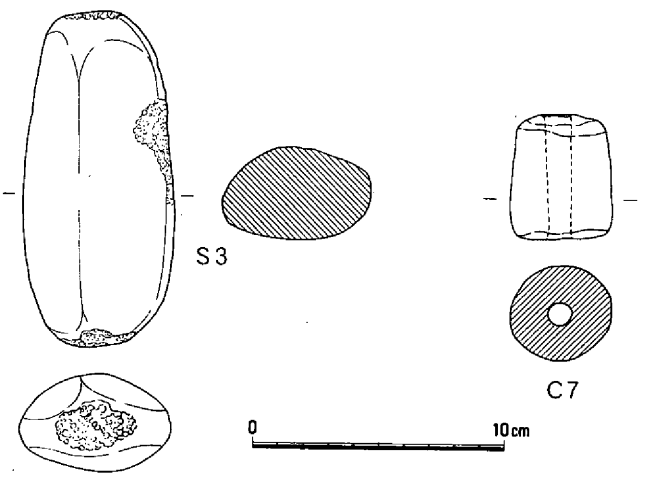
第49図　溝８・９（1/60）・溝８出土遺物（1/4）

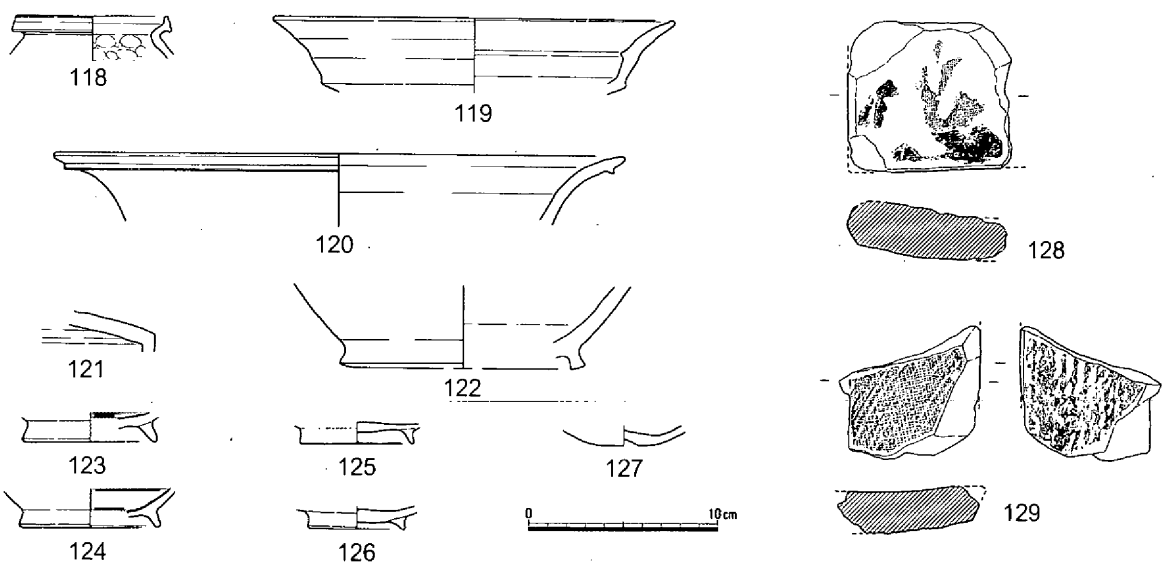


第50図　溝９出土遺物（1/4・1/3）

その他の出土遺物（第51図）

遺構に伴わない遺物を一括して図示した。**Ｓ３**は敲石で、両端と側縁には敲打痕が残る。**Ｃ７**は土錘である。**118・119**は弥生土器である。**120～122**は須恵器で、**121**は平瓶の肩部である。**123・124**は黒色土器の椀であろう。**125～127**は中世の土師質土器椀の底部で、**127**は無高台・上げ底である。**128・129**は平瓦で、凹面には布目が認められる。時期は古代であろう。　（岡本）





第51図　その他の出土遺物（1/3・1/4）

第４章　平成10年(1998年)度発掘調査の概要

第１節　調査区の概要

平成10年度は、昨年に引き続き、遺構の有無および旧地形の把握を目的として確認調査を実施した。調査区は、昨年度調査された陸上競技場の西に隣接する補助競技場および軟式野球場に４ヵ所設定し、一番東の調査区から反時計回りにT11～T14とした。

調査にあたっては、昨年度調査で明らかになった集落や水田域の広がりを押さえることに主眼を置いた。さらに、軟式野球場内のT13は国史跡に近接することから、当時確認された弥生時代前期の微高地および水田の一端を捉えることも念頭において調査を行った。その結果、T13では弥生時代前期の微高地および土壙を検出するなど、貴重な成果をあげることができた。（渡邉）

第２節　T11

１．概要

補助競技場の東端、T10の約40m西に位置し、基本的な層序はT10とほぼ同じである。地表下70cmは明治期の造成土で、その下約50cmには近世の耕作土とみられる粘質微砂が堆積している。海抜約2.2mで弥生時代後期の遺構面、海抜1.8m前後で弥生時代前期水田層を確認している。さらに古い水田層を確認するため２ヵ所の深掘りを行ったが、砂が堆積しており、海抜40cmで調査を終えた。東壁第８～11層および西壁第31層でプラント・オパール分析、西壁第29・32・33層で珪藻分析を行った。

２．遺構・遺物

溝10・11（第52・53図、図版７－1・2）

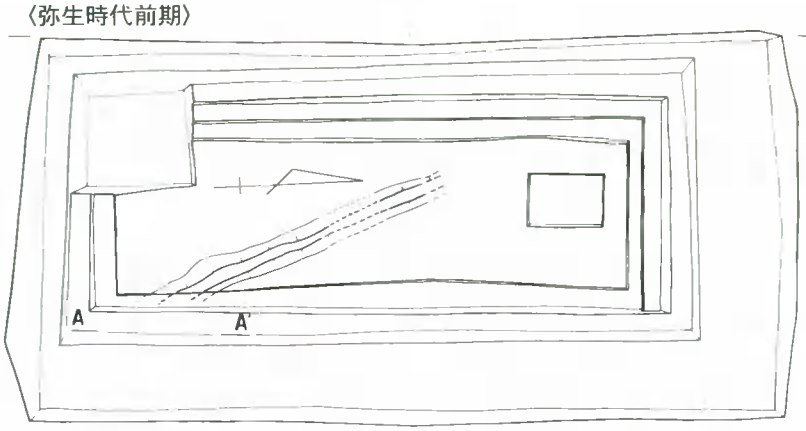
調査区の南端で検出された東西方向の溝で、南側を溝10、北側を溝11としている。溝11の底面が溝10より10cm程度低いため平面図では規模に差が生じているが、同程度の規模を有し、埋土も同じことから、同時期もしくはあまり時間を置かずに存在していたと考えられる。上面を覆っている第20層の下面にはかなり磨滅した土器細片が粗砂に混じって堆積しており、T10で確認された第18層と同一層と考えられる。溝11からは**130**が、第20層からは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土していることから時期的な矛盾もない。また、T10では東西方向の溝４・５が検出されているが、埋土や堆積状況などから同一の溝の一端と考えられる。

第52図　溝11出土遺物(1/4)

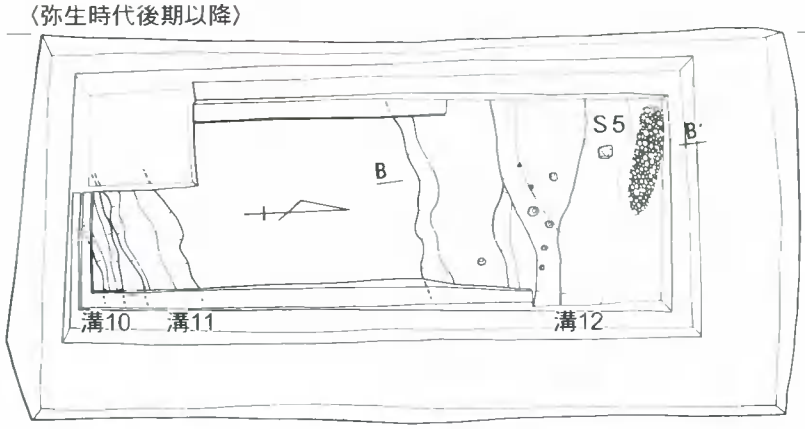
水田（第53～55図）

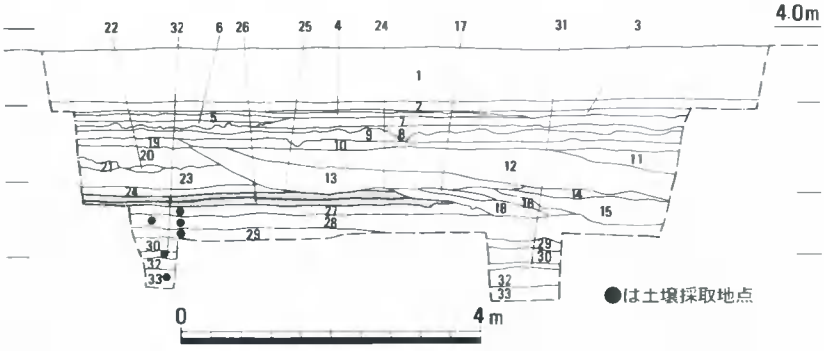
調査区の南半部で、弥生時代前期水田に対応する黒色の堆積層を確認した。西壁では第25・26層にあたり、東壁では第９・10層にあたる。第54図に図示したように基底部幅約40cm、高さ２～５cmの畦畔が検出された。**S４**は畦畔検出

〈弥生時代前期〉



〈弥生時代後期以降〉





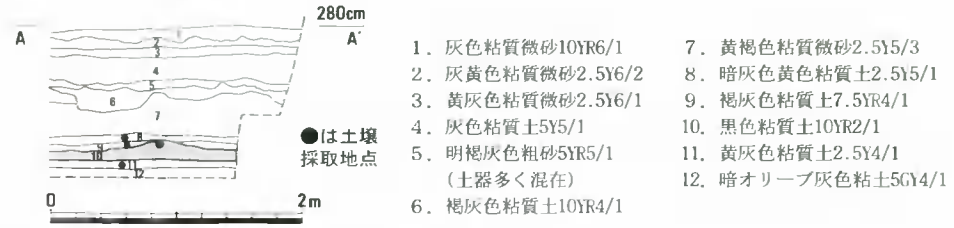
1．造成土
2．黄灰色細砂～微砂2.5Y5/1
3．黄灰色粘質微砂2.5Y6/1
4．褐灰色粘質微砂10YR6/1
5．褐灰色粘質微砂10YR5/1
6．灰色粘質微砂10Y6/1
7．にぶい黄色粘質微砂2.5Y6/4
8．灰黄色粘質微砂2.5Y6/2
9．黄灰色粘質微砂2.5Y6/1
10．鈍い黄褐色粘質微砂10YR5/4
（上面Mn沈着）
11．褐灰色粘質微砂7.5YR6/1
12．灰黄褐色細砂10YR6/1
13．褐灰色細砂10YR6/1
14．灰色粗砂N4/
15．灰色細砂7.5Y4/1
16．灰オリーブ色細砂7.5Y5/2
17．オリーブ黒色細砂5Y3/1
18．灰色粗砂7.5Y4/1
19．明褐色砂質土7.5YR5/6
（上面Fe・Mn沈着，土器・焼土含む）
20．灰色粘質土5Y5/1
21．褐灰色粘質土10YR4/1
22．褐灰色粘質土10YR4/1
23．黄褐色粘質微砂2.5Y5/3
24．黄灰色粘質土2.5Y5/1
25．黒色粘質土10YR2/1
26．黒褐色粘質土10YR3/1
27．暗オリーブ灰色粘土5GY4/1
28．黒色粘質土2.5Y2/
29．オリーブ黒色粘質土5Y3/1
30．灰オリーブ色粘質微砂5Y5/2
31．黒色粘質微砂N2/
32．オリーブ灰色微砂～細砂5GY5/1
33．褐灰色細砂～粗砂10YR6/1

第53図　遺構配置図および西壁土層断面図（1/100）

写真27．西壁（北東から）

写真28．西壁北側深掘り部（南西から）

中に出土している。畦畔部は西壁では明確でなかったが、東壁第10層上面で畦畔に対応する盛り上がりが確認できた。水田層の海抜高は上面で1.9m、下面で1.75mを測る。なお、土壌分析の結果、第9・10層からイネ属のプラント・オパールが確認された。詳細は付載２に譲る。



第54図　東壁南端部土層断面図（1/60）

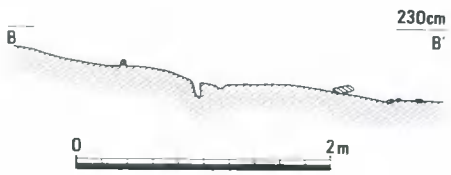
第55図　水田面出土遺物(1/2)

写真29．東壁畦畔部（西から）

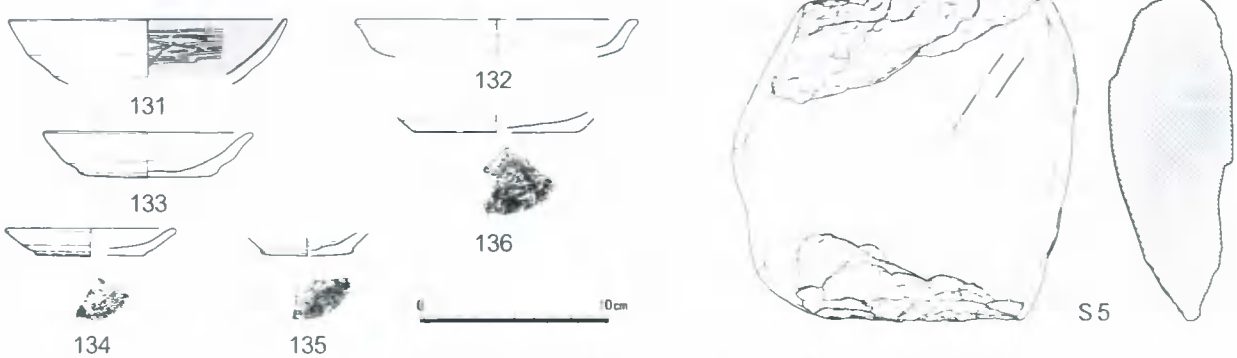
写真30．水田検出状況（南から）

溝12（第52・56図、図版７－1・3）

北肩口のみ検出しており、本体はさらに北に広がっていると思われる。テラス状の平坦面を作りながら緩やかに傾斜しており、斜面に平行する方向に杭の痕跡がいくつか残されていた。また、トーンで示した範囲には小礫が敷かれており、作業のための足場と推察される。



溝内からは弥生時代後期から中世の遺物が出土しているが、堆積状況および131～136などから、その掘削が古代に遡る可能性が高い。　（渡邉）

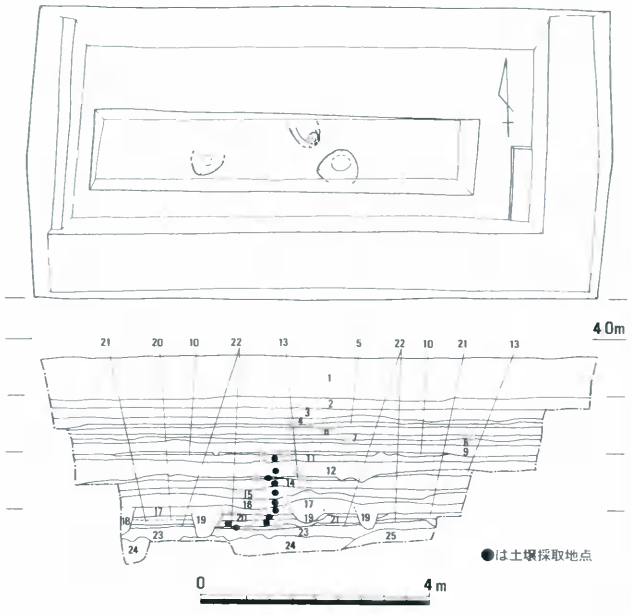


第56図　溝12（1/60）・出土遺物（1/4）

第３節　T12

１．概要

T12は補助競技場北西隅に設定した。目的は、国指定史跡区域内の調査で判明した弥生時代前期の微高地と水田の広がりを確認することである。



1．造成土
2．灰オリーブ色細砂5Y6/2
3．灰色微砂5Y5/1
4．灰オリーブ色微砂5Y5/2
5．灰色微砂5Y5/1
6．灰オリーブ色微砂5Y5/2
7．灰色微妙5Y5/1
8．黄灰色微砂2.5Y4/1
9．灰オリーブ色微砂5Y5/2
10．灰オリーブ色粘質土5Y5/2
11．灰色粘質土5Y4/1
12．灰オリーブ色粘質土5Y5/2
13．黄褐色粘質土10YR5/6
14．暗灰黄色粘質土2.5Y5/2
15．黄褐色粘質土2.5Y5/3
16．灰オリーブ色粘土5Y5/2
17．緑灰色粘土7.5GY5/1
18．黄褐色粘質土と灰色粘土が混在
19．暗緑灰色粘土5G3/1
20．灰色粘土N4/0
21．緑黒色粘土5G1.7/1
22．緑灰色粘土5G6/1
23．オリーブ灰色粘土10Y5/1
24．灰色粘土10Y4/1(植物遺体含む)
25．緑灰色細砂5G6/1
(灰色粘土縞状に堆積)

第57図　遺構配置図および南壁土層断面図（1/100）

写真31．南壁（北東から）

写真32．南壁中央部（北から）

遺構配置図では第20・21層上面での検出状況を示している。以下、層序順に説明する。

第１層は造成土、第２層は練兵場以前の耕作土である。第９層までほぼ水平堆積を示し、鉄分やマンガンの沈着が見られるのでこれらは水田層であると言える。第10層以下は粘質が強くなる。第11層は黒色系の色調を呈し、有機質の堆積があった可能性がある。

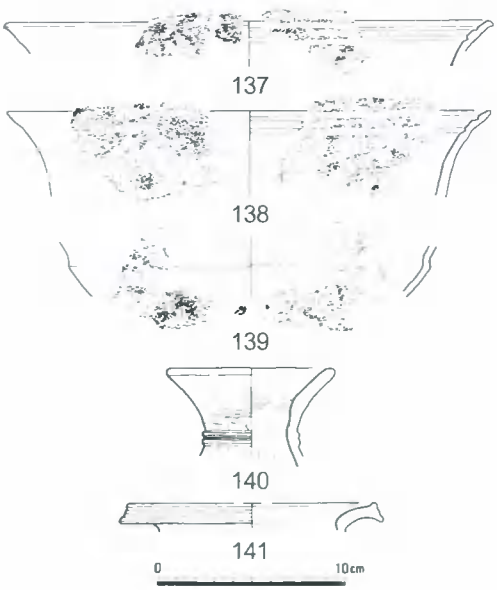
第13層は、T12土層の中では安定した黄色土層で、基盤層と言ってもよい層である。この層の上面では、南東から北西へ流れる溝１条とたわみが見られた。溝埋土中には土器片が１片あったが、時期を断定するのは困難である。溝自体も底部が残るだけで、人為的な掘削かどうか断定できない。

第16層より下はグライ化し緑色系の色調である。第18層は灰色粘土がブロック状に入り遺構埋土の可能性があるが、平面では確認できなかった。第18層は第17層上面から切り込んでいるようだが、さらに上層からの掘り込みかもしれない。

第19層は第17層上面からの掘り込みである。第20・21層上面で平面的に検出した。３基の柱穴状の遺構で、直径60cm程度の不整円形、底面の標高は50～80cmを測る。第20層から下層は東から西へ堆積し、第24層以下の自然堆積を反映している。

出土遺物は整理箱にして１箱分である。

137～139は第21層出土で、位置は調査区中央部、ほぼ一括と考えられる。**137・138**は同一個体の可能性がある。いずれも縄文晩期にあたる。**140**は第17層から出土した壺口縁である。２条の削出突帯を有し、弥生時代前期にあたる。**141**は第11層出土の弥・後・Ⅱ期の甕で、口縁片のみである。　（氏平）



第58図　その他の出土遺物（1/4）

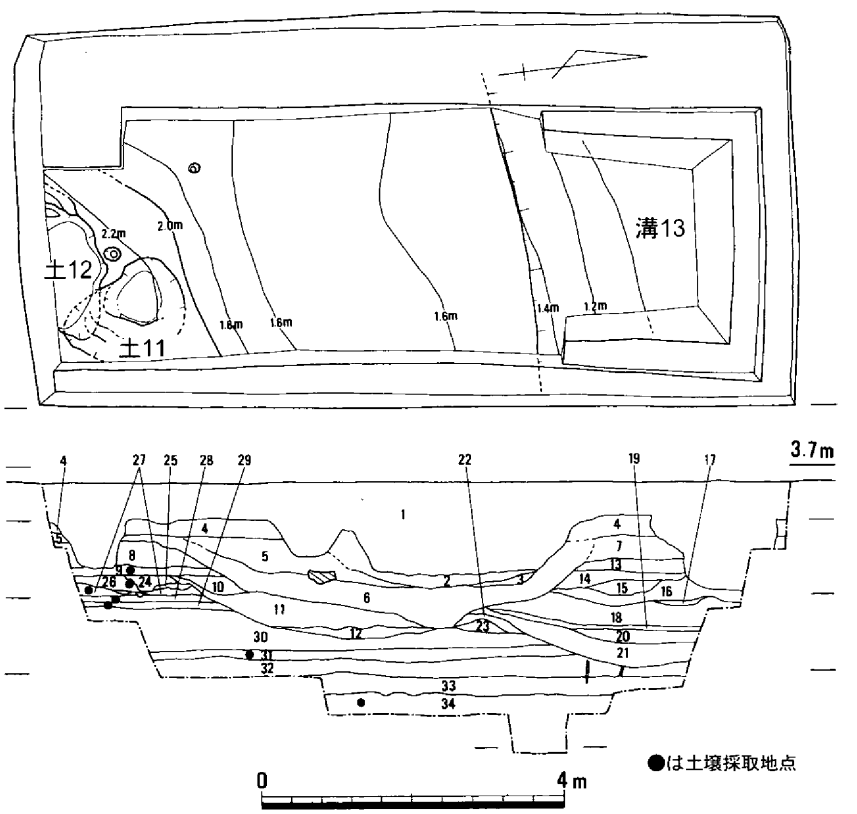
写真33. 第20層上面遺構検出状況（東半部、北西から）

写真34. 南壁中央深掘り部（北から）

第４節　T13

１．概要

軟式野球場に位置する。地表下約50cmは明治期の造成土で、直下にあった当時の穴や水路も第１層に含めた。第４層および第７・８層は、近世以降の耕作土と考えられる。調査区中央部の第５層から第12層は堆積状況から、同じ溝が幾度も掘りなおされた痕跡と考えられる。上層からは、ガラス片なども出土しており、最終的には、埋没後のくぼみを利用してごみ捨て場にしていたようだ。そのため、この部分は脆弱で、造成時には人頭大の角礫を落しこんでおり、第１層の中央部が深くくぼんでいる。下層からは備前焼や伊万里などが出土しているが、攪乱が著しく、掘削時期は明確でない。第13～21層は溝13の埋土、第26層は土壙11の埋土にあたり、第27層が微高地の基盤となる。



1．造成土・近～現代の遺構
2．にぶい黄橙色粘質微砂10YR6/4
3．灰色粘質微砂N5/
4．灰色砂質土N4/
5．灰色粘土N4/
6．安静灰色粘質土5B4
7．灰褐色粘質微砂7.5YR6/2
8．にぶい黄色粘質微砂2.5Y6/4
9．にぶい黄色砂質土2.5Y6/3
10．灰黄色砂質土2.5Y6/2
11．黄灰色砂層2.5Y6/1
12．灰色粘質微砂N4/
13．にぶい褐色粘質細砂7.5YR6/3
14．にぶい黄橙色砂質土10YR6/4
15．褐灰色粘土10YR6/1
16．にぶい黄橙色粗砂10YR6/4
17．褐灰色粘土10YR5/1
18．にぶい黄橙色粗砂10YR7/4
19．褐灰色粘質細砂10YR4/1
20．褐灰色細砂～粗砂10YR6/1
21．褐灰色粘土(細砂混じり)10YR5/1
22．灰色粘質土2.5Y4/1
23．褐灰色粗砂10YR5/1
24．灰黄褐色細砂10YR6/2
25．明褐色細砂(Fe沈着)7.5YR5/6
26．黒褐色粘質土7.5YR3/2
27．橙色粘質土7.5YR6/6
28．黒褐色粘質土7.5YR3/1
29．黒褐色粘質土7.5YR3/2
30．にぶい黄色粘質土2.5Y6/4
31．オリーブ黒色粘質土5Y3/1
32．オリーブ黄色粘質土5Y6/3
33．灰色粘質細砂5Y6/1
(オリーブ黒色粘土混在、有機質含む)
34．灰色粗砂5Y4/1

第59図　遺構配置図および東壁土層断面図（1/100）

微高地を形成する部分にも黒褐色の土壌が帯状に堆積していた(第28・29層)。他の調査区でみられた弥生時代前期の水田層とはレベルでは差が無いが、色調や質が違い、プラント・オパールも検出されていないため、別の堆積層と考えられる。微高地の肩口は、上位にある溝に改変されて本来の形をとどめていないうえ溝13が北側にあり、微高地縁辺の水田層の有無およびそれまでに確認された水田層との関連は明らかに出来なかった。第30層より以下はT11と同様の砂層で、海抜０m近くまでで調査を終えた。第９・26～29層はプラント・オパール分析、第31・34層は珪藻分析を行った。

２．遺構・遺物

土壙11（第59・60図、図版８－３）

調査区南端の微高地上に位置する。検出当初では、土壙11・12の上面が同様の埋土で覆われていたため、微高地のラインに平行する１条の細長い溝に見えたが、掘り下げを進めていく途上で２基の土壙が重複していることが判明し、北東側を土壙11、南西側を土壙12とした。**S６・７**は上面で出土をしており、土壙11に伴うというよりはむしろ２基の土壙の埋没過程で混入したと言える。

土壙11は南北1.6m、東西１m弱の楕円形を呈し、底面の海抜高は約1.9mを測る。**142**が出土しており弥生時代前期後葉と考えられるが、切り合いから土壙12より新しい。

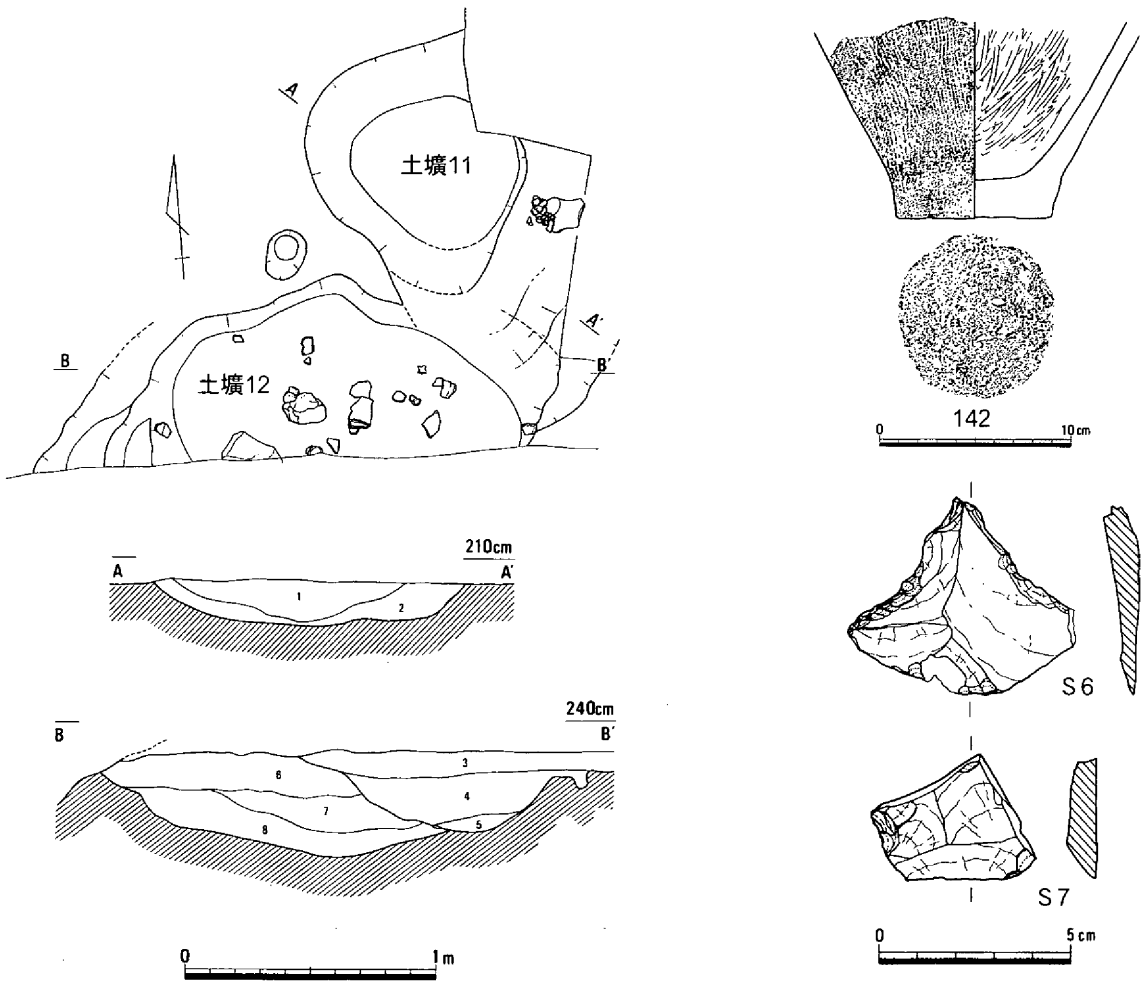
土壙12（第59・60～62図、図版９－１）

南側が調査区外となるため全容は不明であるが、土壙11と同じ様な楕円形の土壙と考えられる。底面の海抜高は1.86mを測る。壺・甕など比較的多くの遺物が出土しているがいずれも細片である。弥生時代前期後葉と考えられる。若干のサヌカイト製石器が出土したため、底面直上の埋土を採取して水洗したところ、ごくわずかではあるがサヌカイトのチップ、フレイクが検出された。**S10・11**は半花崗岩の角礫であるが、トーン部分に磨滅痕があり、作業台として使用されたと考えられる。

溝13（第59・63図、写真36・37）

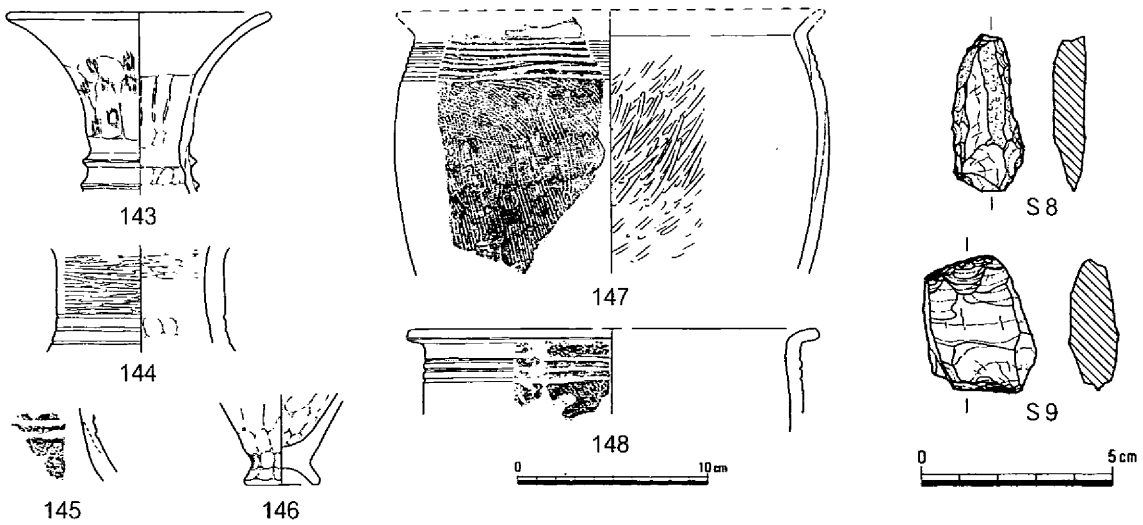
調査区の北端で検出された東西方向の溝で、東壁の第15～21層がこの溝の埋土にあたる。南肩口お

写真35．東壁（西から）



1．黒褐色粘質土10YR2/2(炭・焼土・黄色土粒含む)　　5．黒褐色粘質土7.5YR3/1
2．黒褐色粘質土7.5YR3/1(炭・焼土含む)　　6．黒褐色粘質土7.5YR3/2
3．黒褐色粘質土10YR3/2　　7．暗褐色粘質土10YR2/2(黄色土粒多く含む)
4．黒褐色粘質土10YR3/2(炭多く含む)　　8．黒褐色粘質土7.5YR2/2(炭含む)

第60図　土壙11・12（1/30）・土壙11出土遺物（1/4・1/2）



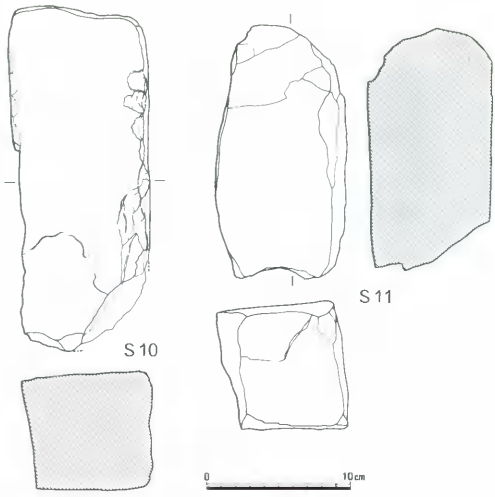
第61図　土壙12出土遺物(1)（1/4・1/2）

よび底に近い部分で杭が検出されている。

149は第18層から出土した。また、底面直上で獣骨が出土している。埋土の状況や位置、方向から溝12と同一の溝と考えられるが、溝12と溝13を東西に結んだ線状には坪境が想定されており、条里に伴う溝の可能性が高い。

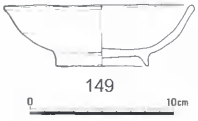
その他の出土遺物（第64図）

150は底部をヘラ切りした杯片で、出土層位は不明であるが、遺跡地内にこれまで明確でなかった古代の遺構の存在を示唆するものとしてあげた。条里関連と考えられる溝13もあり、溝13の掘削が古代に遡る可能性も高くなる。それ以外は調査区中央部にある近世以降の溝や水田層、攪乱層の中から出土した遺物である。　（渡邉）



第62図　土壙12出土遺物(2)（1/4）

写真36．溝13（北西から）



第63図　溝13出土遺物（1/4）

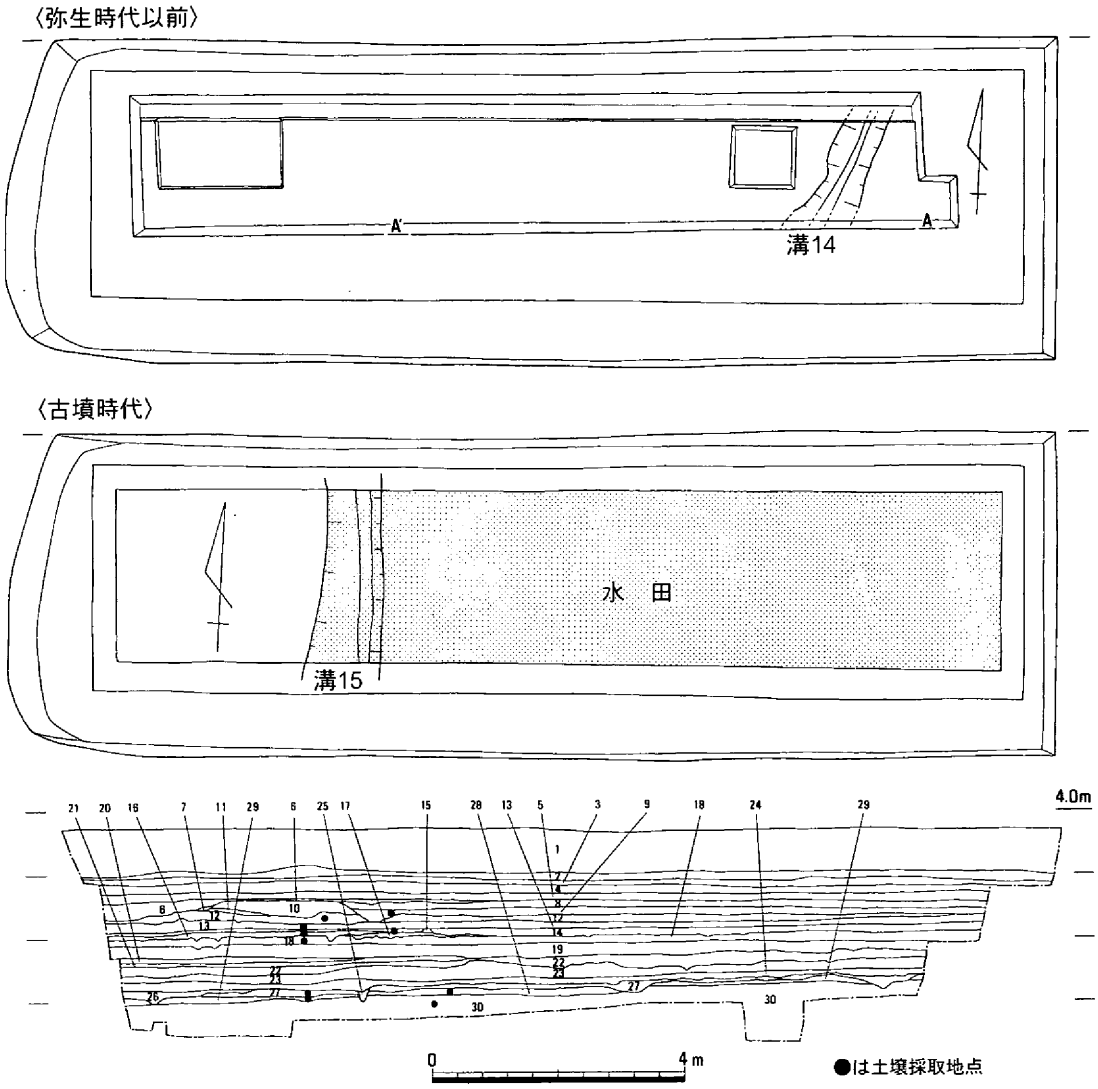
写真37．溝13内遺物
出土状況（北から）

第64図　その他の出土遺物（1/4・1/2・2/3・1/3）

第５節　T14

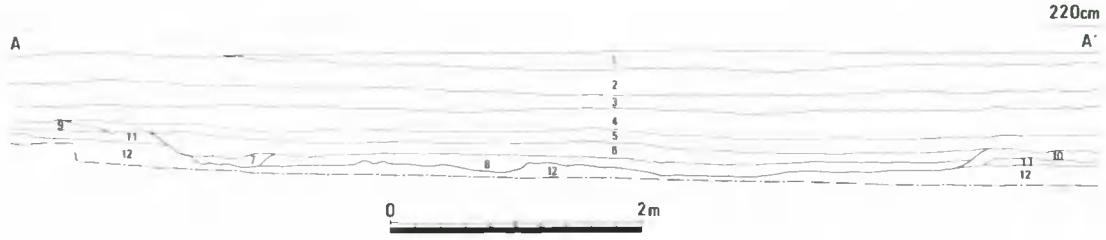
１．概要

T14は補助競技場南部に設定した東西約14m、南北約５mの調査区である。



1．造成土
2．オリーブ灰色細砂2.5GY6/1
3．オリーブ灰色粘質土2.5GY6/1
4．オリーブ黄色微砂5Y7/3
5．灰オリーブ色微砂5Y7/2
6．灰色微砂(Fe沈着)10Y6/1
7．灰色微砂7.5Y6/1
8．灰色微砂(上面Fe沈着)10Y6/1(水田)
9．灰色細砂～微砂(焼土・炭少量含む)5Y5/1
10．黄灰色微砂2.5Y5/1
11．黄灰色微砂2.5Y5/1
12．暗灰黄色微砂(Mn多、焼土・炭少量含む)2.5Y5/2
13．黄灰色微砂(上面Fe沈着)2.5Y5/1
14．黄灰色微砂2.5Y4/1
15．暗灰黄色微砂2.5Y5/2
16．黄灰色微砂(Mn多)2.5Y4/1
17．黄灰色微砂2.5Y4/1
18．黄褐色微砂2.5Y5/3
19．黄灰色微砂2.5Y5/1
20．黄灰色微砂2.5Y5/1
21．黄褐色微砂(Fe多)2.5Y5/3
22．黄褐色粘質土(Fe多)2.5Y5/3
23．灰黄色粘土2.5Y6/2
24．灰オリーブ色粘土5Y5/2
25．オリーブ灰色細砂5GY5/1
26．灰オリーブ色粘土5Y4/2
27．灰色粘土N5/
28．灰色粘土N4/
29．オリーブ灰色粘質細砂5GY6/1
30．暗灰色粘土N3/

第65図　遺構配置図および北壁土層断面図（1/120）



1．灰黄褐色微砂10YR6/2
2．にぶい黄橙色微砂10YR6/3
3．にぶい黄橙色粘質土10YR6/3
4．灰黄色粘土2.5Y6/2
5．灰黄色粘土2.5Y6/2
6．黄灰色粘土2.5Y5/1
7．黄灰色微砂～細砂2.5Y5/1
8．黄灰色微砂2.5Y5/1
9．黄灰色微砂2.5Y5/1
10．黄灰色粘土5B5/1
11．暗灰色粘土N3/
12．オリーブ灰色細砂(灰色粘土混在)5GY6/1

第66図　南壁土層断面図（1/60）

写真38．北壁（南西から）

写真39．北壁中央部（南から）

写真40．溝14検出状況（南から）

写真41．南壁溝14部分（北から）

北壁土層を中心に層位を見ていく。北壁第５層までは水平な堆積を示し、水田層と考えられる。遺物が少なく各層の時期決定は困難である。北壁第８～12層までは古墳時代の水田層と考えられる。

北壁第13層～19層にかけてはほぼ水平な堆積で、細かい凹凸が見られる。この層も水田と考えられる。層中に土器が含まれ、弥生時代後期の可能性が考えられる。

北壁第22層以下はグライ化し、粘質が強くなる。標高1.5mでは本トレンチの中央部はたわみ状になっていて、南側へ下がる。北壁第29層を切る形で第28層が、第27層を切って南壁第６層が、また第28層を切って南壁第８層が堆積している。北壁第27層は第28層と比べて明瞭に区分できる。北壁第30層は自然堆積で、東から西へゆるやかに下がる。

２．遺構・遺物

溝14（第65図、写真40・41、図版９－２）

溝14は北壁第28層と南壁第８層を切り、北壁第27層と南壁第６層で削平される。最大幅70cm程度、深さ20cmを測る。北東から南西へ流れ、調査区内比高差は６cmである。出土遺物はない。

溝15（第65図）

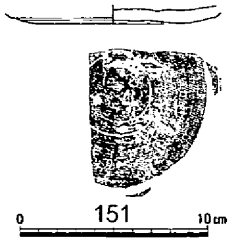
溝15は北壁第９層まで除去後に検出した。最大幅1.2m、第10層上面からの深さで40cmを測り、北から南へ流れる。出土遺物は見られなかった。

水田（第65・67図、図版９－３）

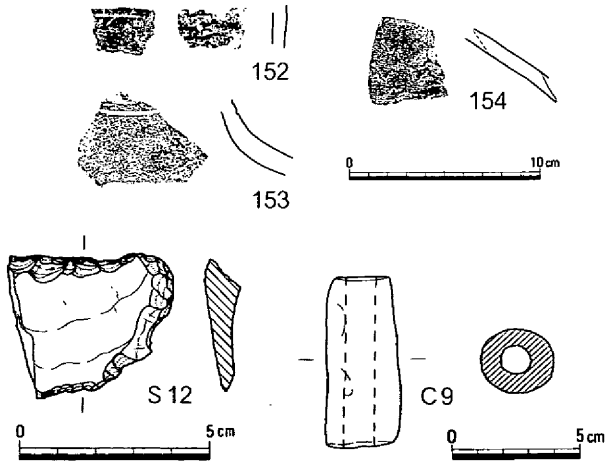
水田層(北壁第８・９・12層)と土手(北壁第10・11層)、溝15が検出できた。土手、溝15は北壁第12層が堆積した後に構築されている。また調査区の北東隅に向けては図示していないが落ち込みが存在した(北壁第６・７層)。落ち込みの性格は不明だが、やはり水田の堆積と見てよい。**151**は須恵器の底部片である。第８層と第10層の接点で、第10層の傾斜に沿って出土した。この須恵器から、水田は古墳時代の可能性が高い。落ち込みはこの水田より後出である。

その他の出土遺物（第68図）

152～153は**151**と差のない高さから出土している。**152**は弥生時代前期の甕口縁部付近、**153**は同じく前期の壺頸部～胴部片である。**154**は北壁第28層から出土した。弥生時代前期壺の肩部と思われる。**S12**は弥生時代水田層から出土した。**C９**は古墳時代水田層か、その上層で出土している。　（氏平）



第67図　水田出土遺物(1/4)



第68図　その他の出土遺物（1/4・1/2・1/3）

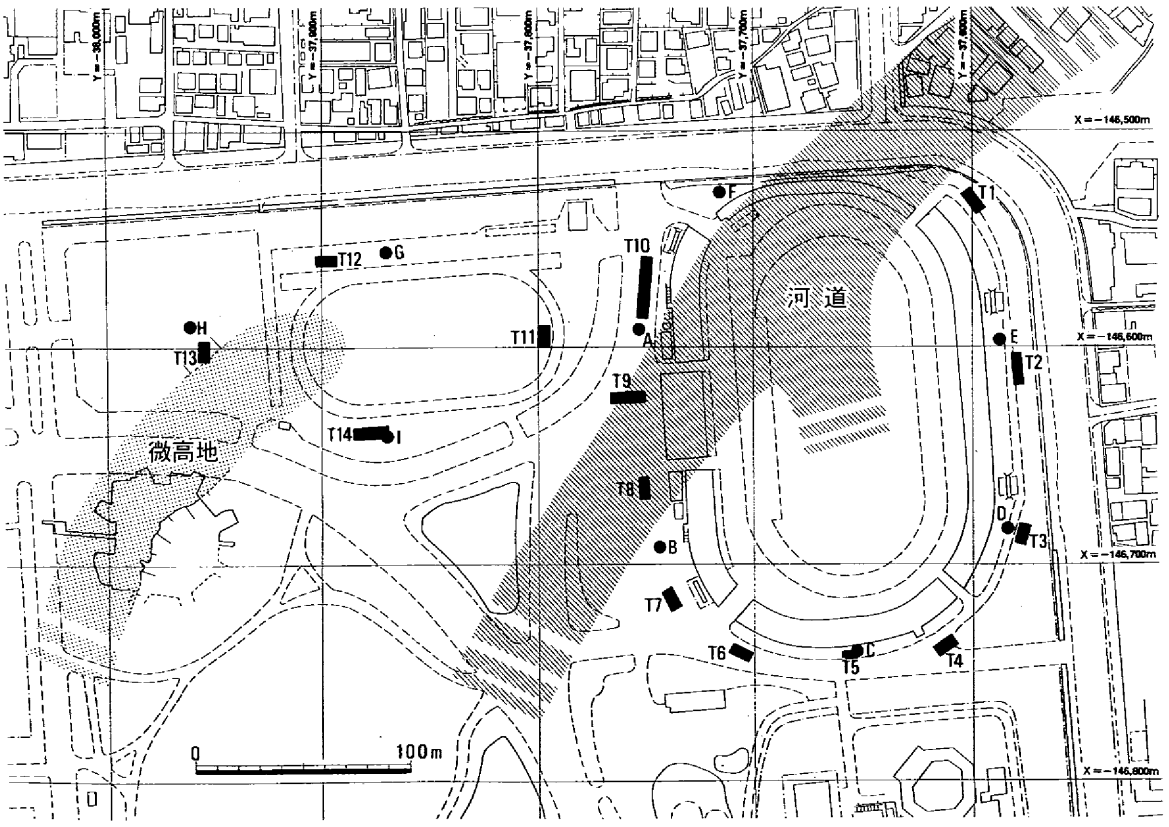
第5章 ま と め

津島遺跡は旭川の右岸に形成された沖積地に所在する。今回は岡山県総合グラウンド内の北東部分にある陸上競技場周辺に10ヵ所、補助競技場内に３ヵ所、軟式野球場内に１ヵ所の計14ヵ所(830㎡)を対象に第一次確認調査を実施した。

陸上競技場の周辺に設定したトレンチでは河道を検出したＴ４・８を除き、Ｔ１～３、Ｔ５～７、Ｔ９・10の８ヵ所から弥生時代前期の水田層が確認されている。田面海抜高は1.5～２ｍの高低差があり、Ｔ２・５・10が海抜２ｍ、Ｔ７が海抜1.95m、Ｔ１・９が海抜1.85m、Ｔ３が海抜1.6m、Ｔ６が海抜1.5mをはかる。このうちＴ１・２・10の水田では小畦畔を伴っており、Ｔ１は南北に１条、Ｔ２は南北に１条、東西に２条と整然と配置されている。T10ではＴ１・２と小畦畔の方向が異なり、北東から南西に向かう５条が認められる。河道の流走する方向、すなわち微高地の長軸に並行して長辺の小畦畔、流れに直交する格好で短辺の小畦畔が形成される傾向が認められる。基本的に水田は北東から南西に緩やかに高さを減じる微高地の縁辺、低位部の古地形に即して造田されている。

この前期水田は陸上競技場周辺ほぼ全域に分布すると考えられ、従来の知見からさらに広範囲な水田域の展開を把握することが可能であるが、かならずしも水田が連綿と続くということではなく、居住域と共存しながら田園風景を作り出していたものと考えられる。

まず、陸上競技場の中央から北方向約1.05km、岡山大学総合情報処理センター建設[1]に伴う発掘調査において、海抜２～３ｍ付近で整然と並ぶ小区画の水田が面的に確認されている。北東1.2㎞では岡山



第69図 津島遺跡周辺の地形想定図（1/3,500）

大学学生部男子学生寮建設[2]に伴い、海抜３～3.3m付近で等高線に沿う格好での小区画水田が広範囲に確認されている。また、そこより300m南に下がった場所にある岡北中学校内[3]でも海抜3～3.3m付近に小区画水田が確認されている。旧河道上や微高地周縁部を中心に東西幅165mをはかる。さらに、水田域の東端を示すと考えられる場所は陸上競技場中央から東に750m、主要地方道岡山吉井線の西側50mまで延びて微高地縁辺に接続している。

このように津島遺跡の弥生前期水田は陸上競技場を中心に北へ1.05km以上、北東に1.2km以上、東に0.75kmまでが確認されており、水田の分布する範囲は東西0.9km以上、南北1.2km以上が想定できる。その面積は108万㎡にもおよび、さらに分布が広くなる可能性がうかがえる。これらの水田遺構に伴う遺物は少なく、今回は弥生前期後半の小土器片が若干出土するにとどまった。Ｔ３においては弥生前期の水田層(第15・16層)の下位(第17層)からイネ族イネ属の珪酸体が検出され、さらに古い時代の水田の存在が確認された。また、前期水田面より下位約65cm(第24層)では海水泥質干潟指標群の珪藻化石が多産している。

一方、補助競技場・軟式野球場内に設定したＴ11ではＴ10と直交する小畦畔を伴う水田、Ｔ13では水田は出ず、微高地上海抜235cmで弥生前期後半の土壙２基が確認されている。この微高地は南にある国指定史跡の弥生前期の集落が所在する微高地につながるものと考えられる。Ｔ11・13間は南北方向に溝状の低地となっており、Ｔ12・14ではＴ11まで見られた前期水田のような明瞭な水田形状は確認できていない。しかし、Ｔ12では弥生前期の土器を包含する第17層と縄文晩期の土器を包含した第21層の間、第20層からイネ属の珪酸体が検出されており、Ｔ14の弥生前期土器を包含した第28層の下位、第29・30層でもイネ属の珪酸体が検出されている。これらより、比高差の異なる水田、あるいは古い時代の水田が存在する可能性も考えられる。

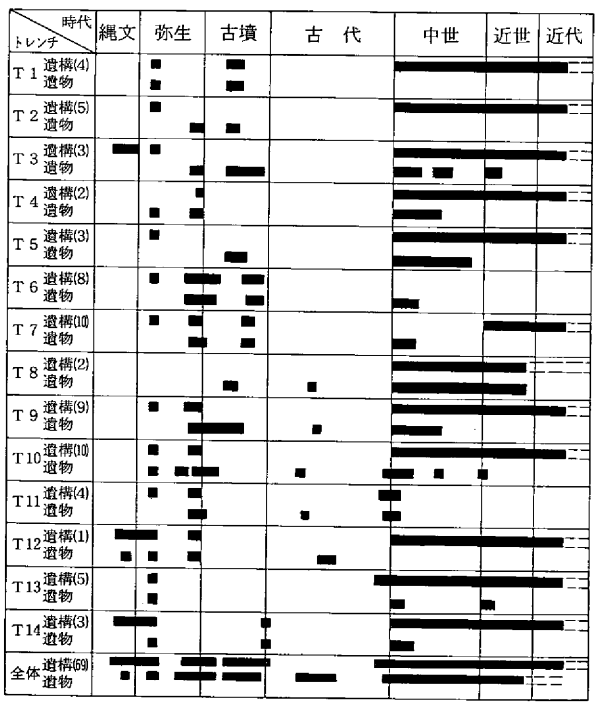


表３．遺構・遺物の消長

弥生時代中期の遺構は確認できず、Ｔ10の河道内から中期末の土器片が数点出土しているのみである。弥生時代後期では後期後葉の遺構・遺物が比較的多く、Ｔ４・６・７・９～12からは井戸、土壙、溝、柱穴が確認されている。また、Ｔ９の河道内では後期中葉の高杯、甕等の土器片が出土している。古墳時代前半での遺構・遺物は少なく、古墳時代後半においてＴ１・６・７で竪穴住居、土壙、柱穴等が出土している。Ｔ６・７の周辺に集落が営まれていたようである。古代の遺構は確認できず、遺物もごくわずかである。中世では水田、溝、土壙等の遺構があり、Ｔ11・13では条里関連の東西溝が認められた。遺物は備前焼、東播系須恵器、早島式土器がある。近世・近代もほぼ同様の遺構が存在する。

(高畑)

註

(1)津島岡大遺跡第11次調査　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡」7　1996
(2)津島岡大遺跡第３次調査　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡」3　1992
(3)岡山市教育委員会「津島江道遺跡」『シンポジューム日本における稲作農耕の起源と展開』資料集　1988

付載１　津島遺跡ボーリングＦ・Ｇ地点採取土壌の花粉分析

岡山理科大学教授　**三　好　教　夫**

津島遺跡のＦ・Ｇ地点で実施されたボーリング調査の花粉分析結果を報告する。本格的な花粉分析調査では、１試料につき木本200個、草本を含めて500個以上測定するが、本試料では化石花粉の出現数が少ないため、木本・草本合わせて100個以上のものを表に示した。（表１～４）

Ｆ地点では地表下３～５ｍの間で出現するものの、イネ科(*Graminea*)など水田跡を特徴付けるものはあまり出土していない。年代測定が行われていないので確かなことは言えないが、エノキ属・ムクノキ属(*Celtis*・*Aphanathe*)が多数出現しているのは、西日本の低地では後氷期初期(9000～7000年前)によくみられる特徴である。

Ｇ地点については、地表下2.5～４ｍの間でアカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)やシイノキ属(*Castanopsis*)など照葉樹林要素が多く出ており、イネ科やヨモギ属(*Artemisia*)も多く人類の活動期のものであることが推察される。しかし、先に述べたように、全体としての化石花粉の出現数が少ないため、水田跡を断定するには至らなかった。

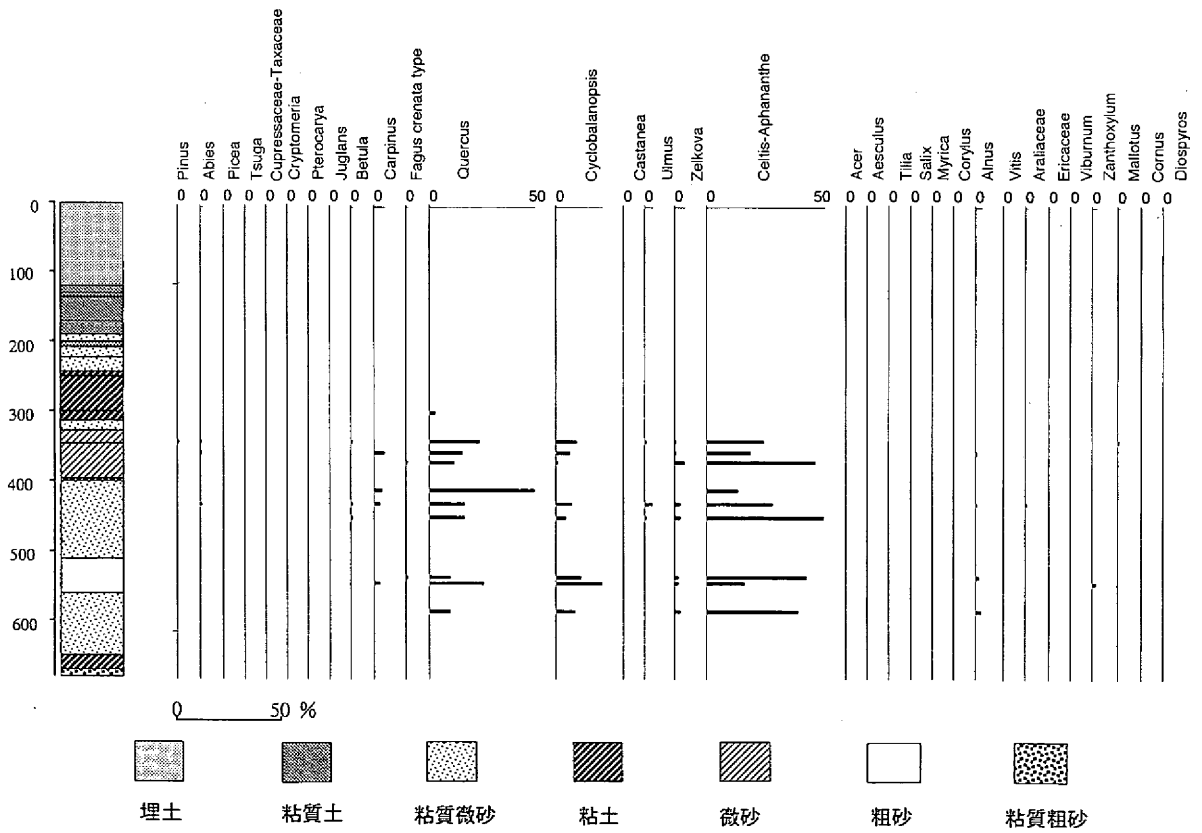


表１　津島遺跡(Ｆ)　木本花粉

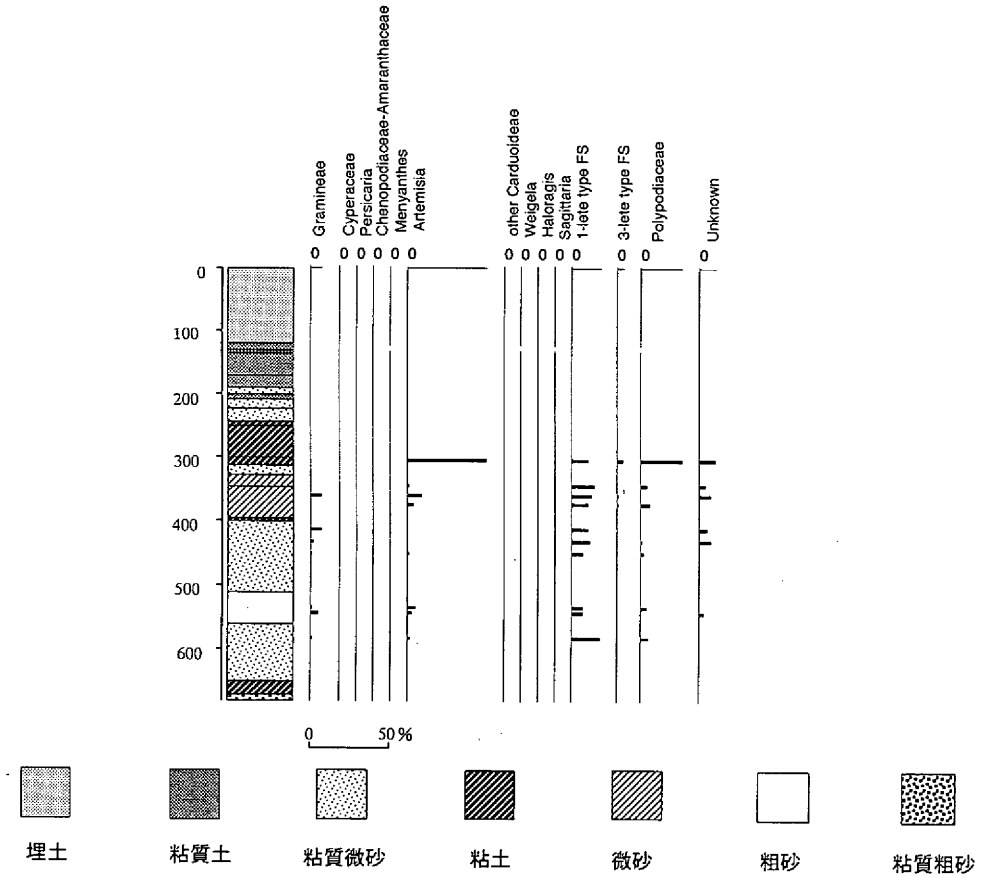


表２　津島遺跡（Ｆ）　草本花粉、シダ胞子

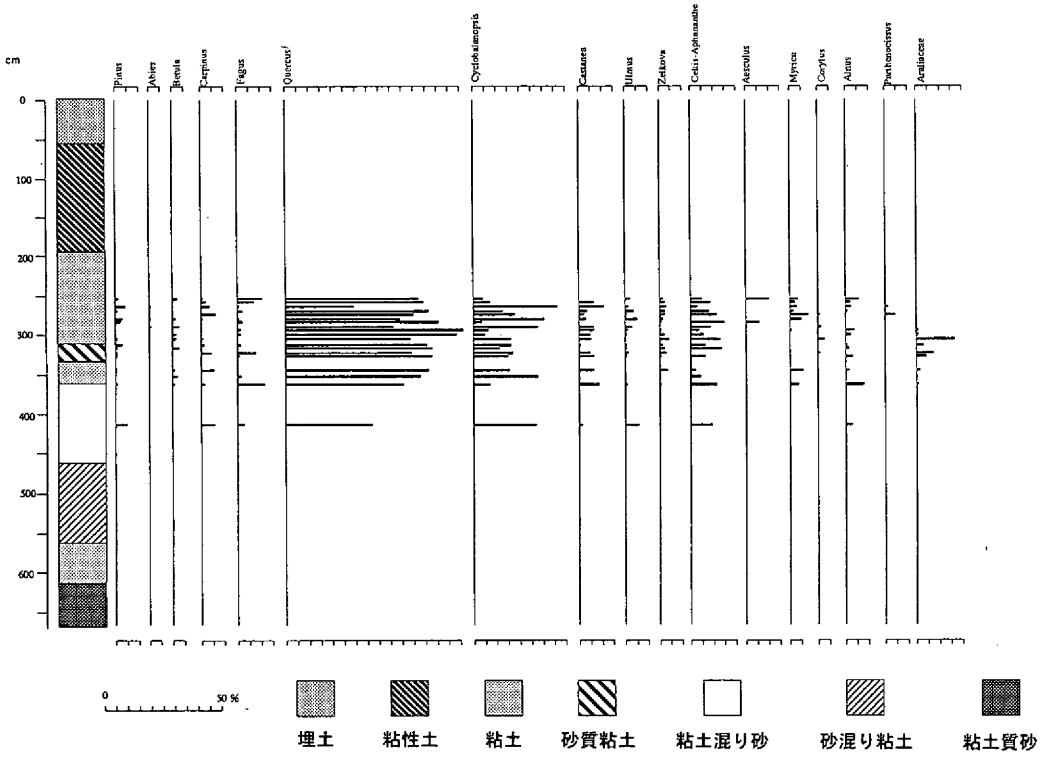


表３　津島遺跡（Ｇ）　樹木花粉

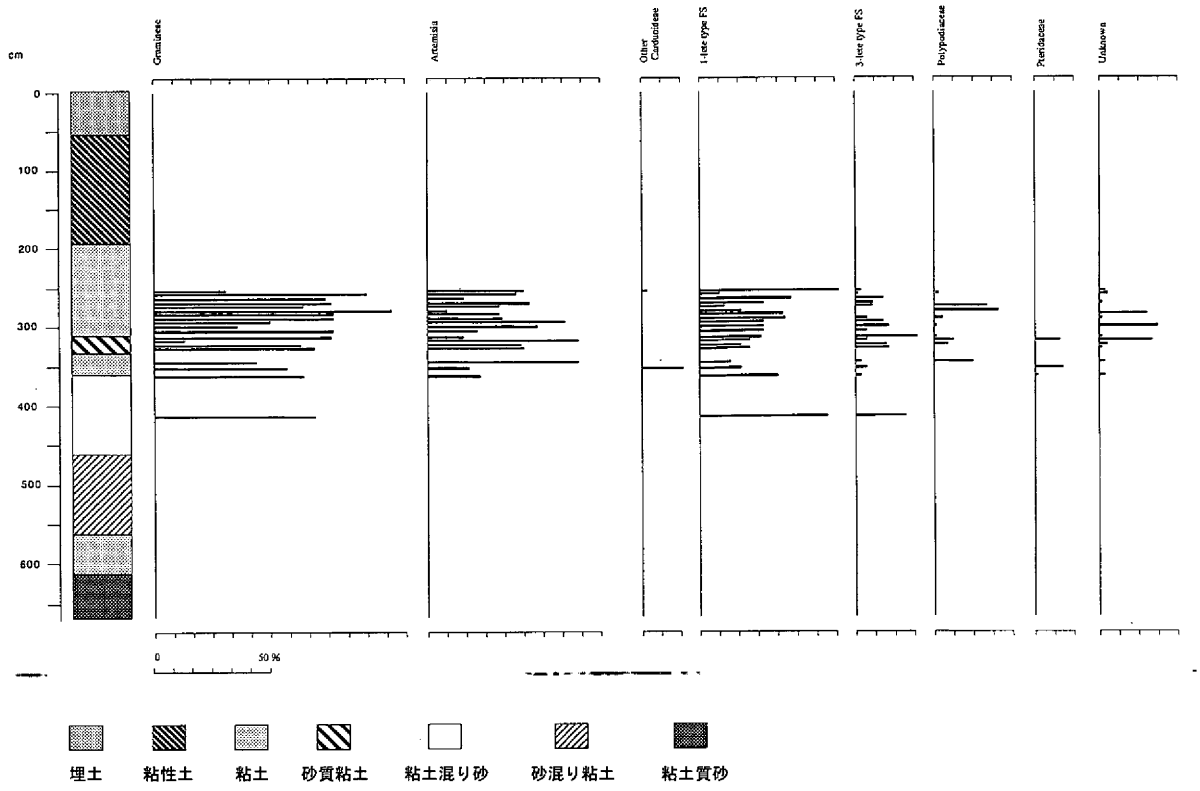


表４　津島遺跡（Ｇ）　非樹木花粉

付載２　津島遺跡埋没水田層の花粉分析結果

岡山理科大学講師　守　田　益　宗

いずれの試料においても花粉含量がきわめて少ない。

Faegri&Iversen(1975) によると堆積物中の花粉・胞子含量の少ない原因は、1)元来、付近の植生の花粉生産量が少なかった。2)何らかの原因によって堆積した花粉・胞子が分解した。3)花粉の供給量に比べ堆積物の堆積速度が大であった場合が考えられるという。一般に、花粉・胞子が分解される場合、相対的に分解されにくいシダ胞子の比率が増加する傾向があり、本分析結果でも同様の傾向を認めることができる。また、流水の影響が強い堆積物では、しばしば環紋藻化石が多く認められるので、堆積物の堆積速度が大きかった可能性も否定できない。

農耕に多少とも関係のある植物としては、水田雑草となる*Rotala*や*Salvinia*、畑地や畦に多く見られる*Xanthium*、*Artemisia*、*Umbelliferae*があげられるが、*Artemisia*、*Umbelliferae*以外はいずれも１粒のみの検出であり、他から流れ込んできた可能性を否定することは難しい。また、*Artemisia*、*Umbelliferae*にしても荒れ地によく見られる植物であることから、農耕地の存在を積極的に支持する証拠としては弱い。

学名	和名	T3-No.4	T12-No.16	T12-No.18	T14-No.28	T14-No.29
Abies	モミ属			1		
Betula	シラカンバ属			1		
Quercus	コナラ亜属	6		48		
Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	1		13		
Castanea-Castanopsis	クリ属ーシイ属			2		
Myrica	ヤマモモ属	1				
Parthenocissus	ツタ属			1		
Gramineae	イネ科	1		9	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科			1		
Typha	ガマ属			3		
Rotala	キカシグサ属				1	
Umbelliferae	セリ科			23		1
Artemisia	ヨモギ属			52		
Xanthium	オナモミ属			1		
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	50	1	27	1	1
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子	1		9		
Pteris	イノモトソウ属	5				
Salvinia	サンショウモ属				1	
Zygospore	接合胞子	7				
Concentricystis	環紋藻	9	2	1	4	9
Unknown	不明	1	1	8		1

付載３　津島遺跡の古環境復元

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

津島遺跡は岡山平野北部、旭川西岸の氾濫原に立地する。遺跡近辺の微地形は、旭川の河川作用により形成された、北東から南西方向に細長く延びる自然堤防性の微高地、後背湿地、埋没流路などの要素からなる。これらは、度重なる流路変更により複雑な地形面を形成している。

今回の発掘調査では、弥生時代以降の水田が確認されており、より古い時期より水田として利用されていた可能性が考えられている。そこで、本遺跡が位置する場所の古地理の変遷、および稲作の消長に関する情報を得ることを目的として、自然科学分析調査を実施する。調査内容は、堆積物の堆積年代を放射性炭素年代測定により推定し、その成因を珪藻分析から検討する。また、稲作の消長は植物珪酸体の層位的産状に基づいて検討する。

１．調査地点の層序概要

調査地点は発掘調査が実施されたＴ３・５・10～14と、微高地および低位部で実施されたボーリング調査地点Ｄ・Ｅ・Ｆである。調査区の堆積層は、地点により層相変化が異なっているが、おおむね以下のようにまとめることができる。

標高約0.8mより下位は、微～粗砂を主とする砂質堆積物からなる。これらの堆積物は、後述する珪藻分析の結果から海成堆積物に由来する。

標高約0.8mより上位は、粘土を主体とする堆積物からなり、場所によっては砂を狭在する。この堆積物は調査区を広く覆うが、場所により堆積状況に差が見られる。また、この中には縄文時代晩期、弥生時代前期、同後期、古墳時代の遺物が出土している。

２．試料

調査対象は、低地および微高地に設けられた試掘調査の壁面に認められた堆積物、およびボーリング調査で得られた堆積物である。このうち、Ｆ地点では微化石の保存状態が良好と考えられる粘土やシルトを対象として、標高約－３～－1.5mの堆積物(第４図第18～20層)を選択した。また、Ｅ地点の標高－4.75mより出土した木片(第４図☆印)を放射性炭素年代測定用の試料とした。各調査区で見られた水田層では、その層位と上下の堆積層を中心にして選択した。

３．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

（２）珪藻分析

湿重７ｇ前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻の半分以上が残存するものを対象に200個体以上を、同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot(1986･1988･1991a･1991b)、K.Krammer(1992)、Reichardt,E.(1995)、Lange-Bertalot,H. AND D.Metzelt

in(1996)、Lange-Bertalot,H. et al(1996)、Metzeltin,D. and A.Witkowski(1996)などを用いる。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分ける。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(ｐＨ)・流水に対する適応性についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率２％以上の主要な種類について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め、考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたっては、水生珪藻については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性についてはAsai,K. and Watanabe,T.(1995)の環境指標種を参考とする。

（３）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W,250KHz,１分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体とよぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐藤(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

４．結果

（１）放射性炭素年代値

Ｅ地点の木片の放射性炭素年代値は、6,080±100 y.B.P.(4,103 B.C.:Gak-19989)である。

（２）珪藻化石の産状

以下に、調査区の西側から東側にかけて、各調査区の結果を述べる。

＜T13＞

結果を図１に示す。各資料からは珪藻化石が産出するが、試料Ｃ(第31層)・５(第28層)では少ない。

試料Ｇ(第34層)は、内湾指標種群の*Paralia sulcata*、*Cyclotella striata C.stylorum*、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia cocconeiformis*、*N.granulata*が10～30％と多産することを特徴とする。

試料Ｃ・５では、内湾指標種や干潟指標種が僅かながら産出する。

＜T12＞

結果を図２に示す。試料18(第21層)・16(第17層)から珪藻化石が産出するが、試料10(第11層)は淡水性種が僅かに産出したにすぎない。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、40～30％と低い。

試料18では淡水生種を主体とするが、汽水浮遊性の*Coscinodiscus rudolfii*、偶発浮遊性種の*Aulacoseira italica*、流水不定生の*Eunotia pectinalis var.minor*、*Diploneis ovalis*、陸域や水中に認められる陸生珪藻Ｂ群(伊藤・堀内，1991)の*Eunotia praerupta var.bidens*が10％前後と多産する。なお、*Eunotia pectinalis var.minor*、*Eunotia praerupta var.bidens*は、沼沢湿地付着性種群(安藤，1990)の一種でもある。

試料16は、淡水浮遊性の*Cyclotella comta*が約30％と優占する。次いで、淡水浮遊性の*Stephanodiscus*

niagarae、流水不定性の*Cocconeis placentula*や*Cymbella tumida*、流水性の*Cocconeis placentula var.euglypta*が10%前後と多産する。*Stephanodiscus niagarae*は湖沼浮遊性群種の一種である。

珪藻化石の少ない試料10は、淡水生種が僅かながら産出するが、いずれも壊れたり、溶解している。

<T14>

結果を図3に示す。試料28～30(第27・29・28層)・32(第30層)とも珪藻化石が普通に産出する。産出種は、淡水生種を主体とするが、汽水生種も僅かながら産出する。完形殻の出現率は、30～40%と低い。珪藻化石群集の特徴は、試料32と試料28～30とで差がある。

試料32では、淡水浮遊性種の*Cyclotella comta*、*Stephanodiscus niagarae*、流水不定性の*Cocconeis place*

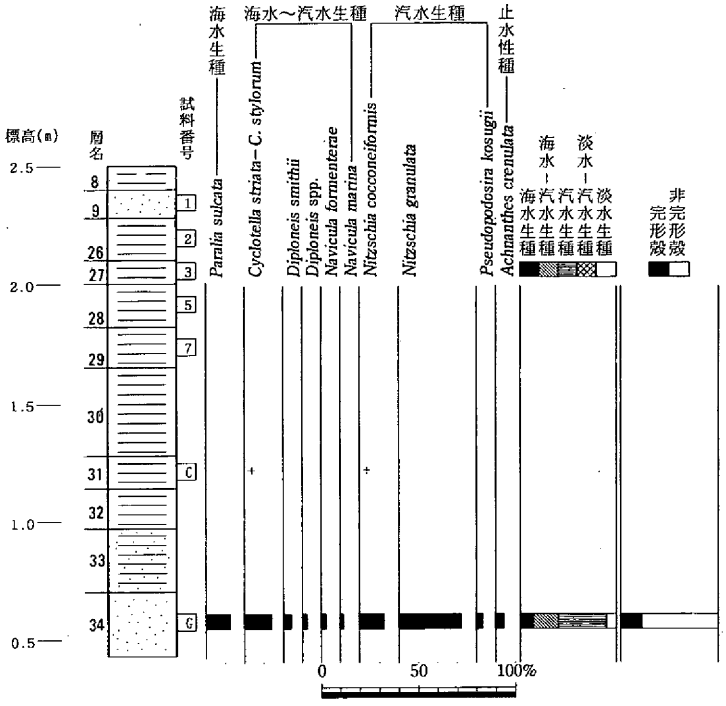


図1　T13東壁の主要珪藻化石群集

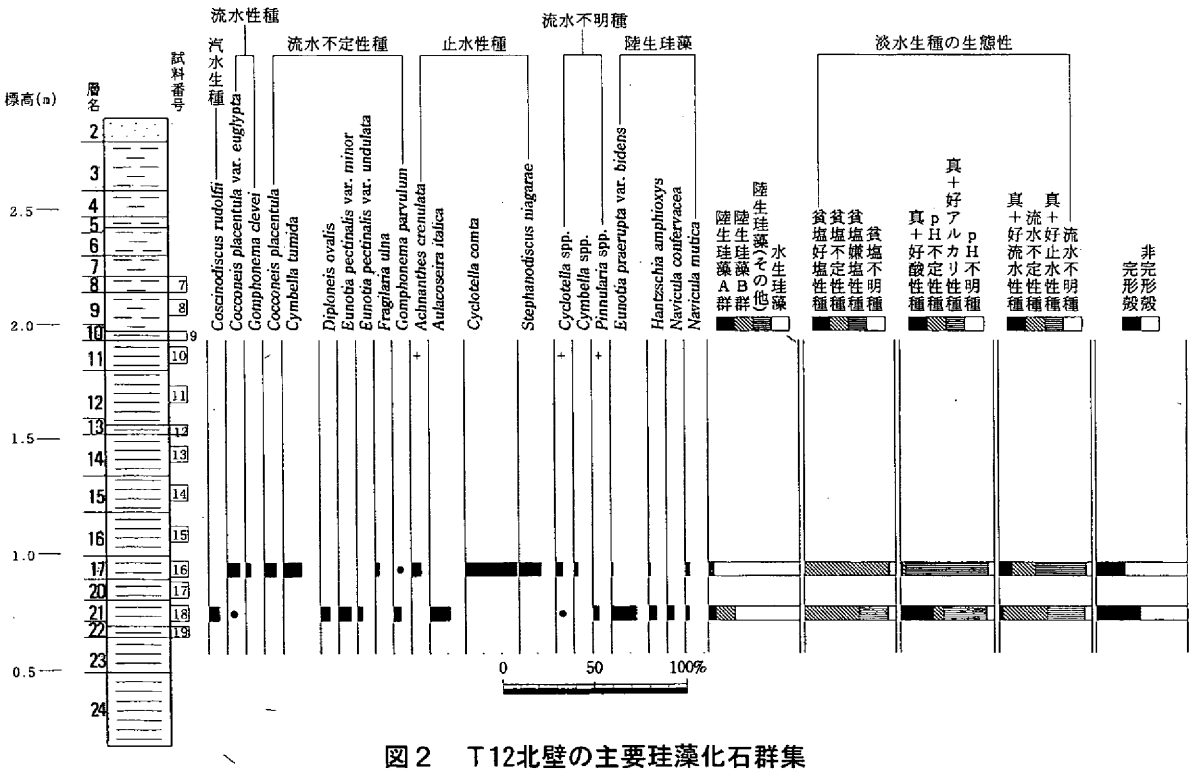


図2　T12北壁の主要珪藻化石群集

※　海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で産出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

ntula、*Cymbella tumida*、流水性の*Cocconeis placentula var.euglypta*が10～20%と多産することが特徴である。

試料30・29・28では流水不定性の*Cymbella tumida*、*Eunotia pectinalis var.undulata*、*Aulacoseira italica*、*Cyclotella comta*、耐乾性が強く主に陸域に生育する陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）の*Hantzchia amphioxys*、*Navicula mutica*、陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群の一種でもある*Eunotia praerupta var.bidens*が10%前後を占める。

＜T11＞

珪藻化石は概して少ない。

第33層は*Pralia sulcata*等の海生種、*Cyclotella striata-C.stylorum*等の海～汽水生種、*Nitzschia granulata*等の汽水生種がごく僅かに産出する。

第32層は5個体と少なく、第29層は無化石である。

＜F地点＞

結果を図4に示す。各試料からは珪藻化石が産出するものの、第

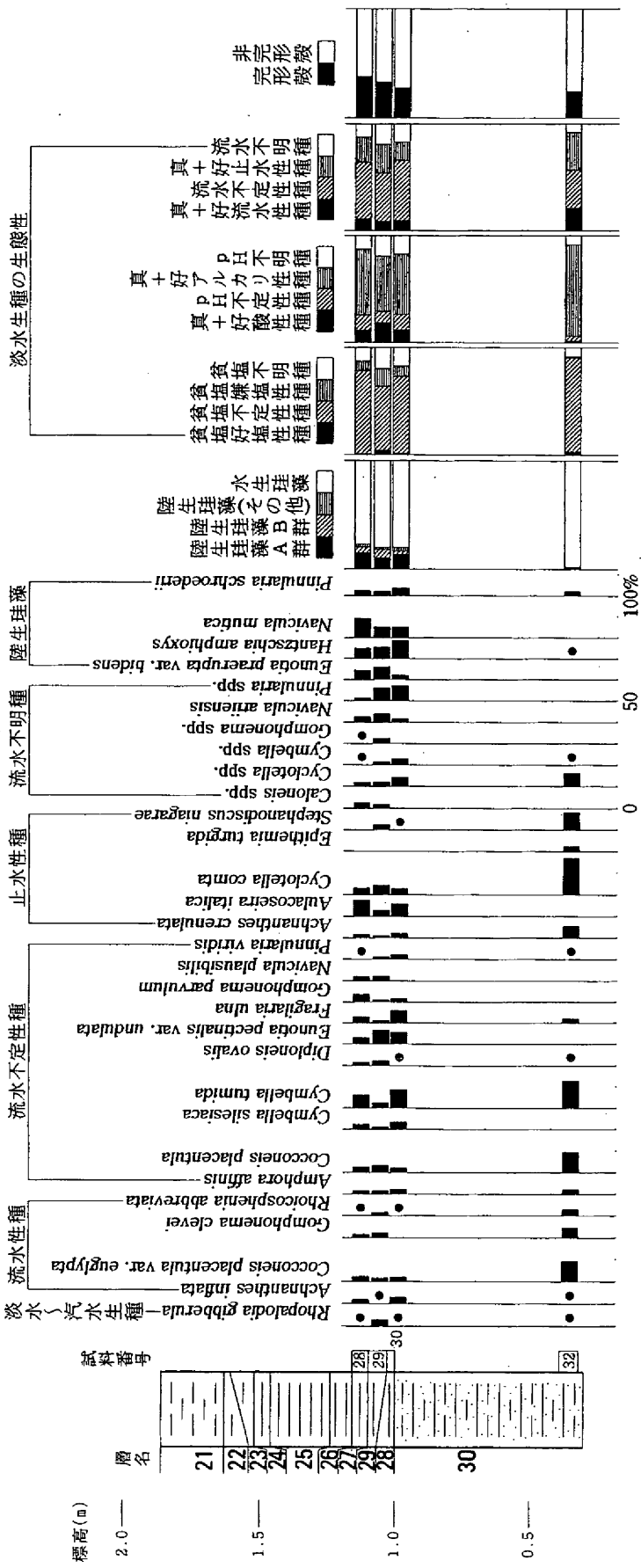


図3　T14北壁の主要珪藻化石群集

※　海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で産出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

20層は26個体と少ない。完形殻の出現率は、第18層が13%、第19層が約20%と非常に低い。第18層は海水生種、海水～汽水生種、汽水生種がほぼ同じ割合で産出するが、第19層は汽水生種が少ない反面、淡水生種が比較的多く産出する。産出分類群数は、24属49種類である。

第19層は、海水浮遊性の*Pralia sulcata*、海水～汽水浮遊性の*Cyclotella striata*-*C.stylorum*が13～20%と多産し、海水浮遊性の*Biddulphiasp.A*、*Thalassionema nitzschioides*、*Trybliоptychus cocconeiformis*、汽水付着性の*Nitzschia cocconeiformis*、*N.granulata*、淡水浮遊性の*Cyclotella comta*などを伴うことが特徴として挙げられる。また、*Pralia sulcata*、*Cyclotella striata*-*C.stylorum*、*Thalassionema nitzschioides*は内湾指標種群、*Nitzschia cocconeiformis*、*N.granulata*は海水泥質干潟指標種群とされる(小杉，1988)。

第18層は汽水付着性の*Nitzschia granulata*が約30%と優占し、第19層と同様に内湾指標群種の*Pralia sulcata*、*Cyclotella striata*-*C.stylorum*が15～20%と多産する。なお、淡水生種はほとんど産出しない。

珪藻化石の少ない第20層は、第18・19層と同様の種類が産出する。

＜D地点＞

試料は第４図の第4･6･7･10･14層で、結果を図５に示す。下位４層から珪藻化石が産出するものの、第４層は21個体と少ない。下位４層の完形殻の出現率は50%前後である。下部の試料第10･14層は、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種の合計が約80%以上と優占するが、第７層以浅では大部分が淡水生種で占められる。産出分類群数は、39属155種類である。

珪藻化石群集は試料ごとに異なっている。

第14層は、海水浮遊性で内湾指標種群、あるいは外洋指標種群(小杉，1988)とされる*Thalassionema nitzschioides*が23%と優占し、内湾指標種群の*Pralia sulcata*、*Cyclotella striata*、海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata*、海成層上限高度の認定に有効(佐藤・谷村・横山，1996)とされる*Pseudopodosira kosugii*が多産することを特徴とする。

第10層では、第14層で優占した内湾指標種群は急減し、かわって海水泥質干潟指標種群の*Nitzschia granulata*が

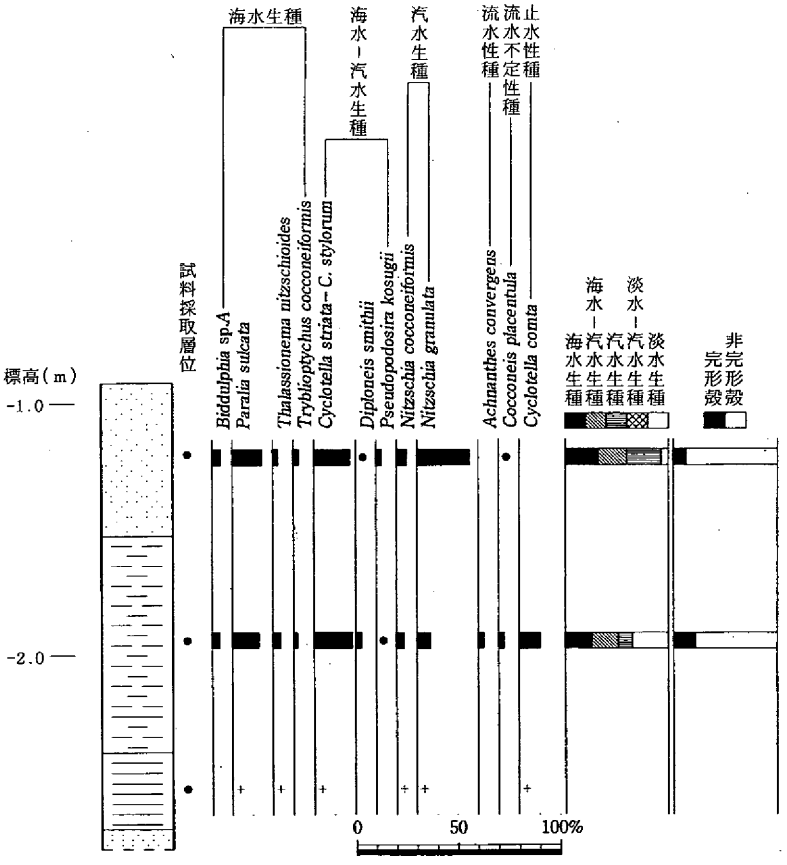


図４　Ｆ地点の主要珪藻化石群集

※　海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で産出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

約20%と多産し、同じ生態性である*Nitzschia compressa*、*Synedra tabulata*などを伴う。

第７層は、淡水浮遊生の*Achnanthes crenulata*が約30%と優占し、同じ生態性を有する*Cyclotella comta*、*Stephanodiscus niagarae*、流水不定性の*Fragilaria ulna*などを伴う。

第６層になると第７層で多産した淡水浮遊生種の減少が見られ、偶発浮遊生種の*Aulacoseira italica*、陸生珪藻Ａ群の*Hantzchia amphioxys*、*Navicula mutica*、陸生珪藻Ｂ群の*Navicula confervacea*が５～10%産出する。

第４層になると、化石の産出が少なくなり、しかも溶解あるいは壊れている。

＜Ｔ３＞

結果を図５に示す。弥生時代前期水田と考えられる層から採取された試料３(第16層)、縄文時代晩期と考えられる試料４(第17層)とも珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は、40%前後である。産出種の全ては淡水生種で構成され、産出分類群数は23属65種類である。

産状は試料４・３とも近似しており、偶発浮遊性種の*Aulacoseira italica*が15%前後と多産し、同じく淡水浮遊生の*Aulacoseira ambigua*や*Cyclotella comta*、流水不定性の*Cocconeis placentula*、*Cymbella tumida*、*Fragilaria ulna*などを伴う。なお、*Aulacoseira ambigua*は湖沼沼沢湿地指標群(安藤，1990)の一種、*Cyclotella comta*は湖沼浮遊生種群(安藤，1990)の一種である。

（３）植物珪酸体の産状

以下に、調査区西側から東側にかけて、各調査区の結果を述べる。

＜Ｔ13＞

結果を図６に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが、試料３(第27層)・１(第９層)では検出個体数が少ない。試料７～試料１(第29～９層)ではタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出され、この中ではタケ亜科の産出が目立つ。試料５(第28層)ではススキ属短細胞珪酸体、試料２(第26層)ではススキ属短細胞珪酸体とヨシ属機動細胞珪酸体の産出も目立つ。また、試料１で栽培植物のイネ属がわずかに認められる。

＜Ｔ12＞

結果を図７に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが、検出個数は概して少ない。

試料19(第22層)・18(第21層)では、ヨシ属の産出が目立ち、タケ亜科、ウシクサ族なども認められる。また、栽培植物のイネ属もわずかながら認められる。

試料17～13(第20～14層)ではヨシ属が激減し、タケ亜科の産出が目立つ。また、ススキ属やイネ属なども認められる。

試料12～８(第13～９層)ではイネ属(機動細胞珪酸体)とタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やウシクサ族などがわずかに認められるにすぎない。

試料７(第８層)では、検出個数が少ない中でタケ亜科の産出が目立つ。

＜Ｔ14＞

結果を図８に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが、試料16(第13層)では検出個数が少ない。

試料30(第28層)ではイネ属、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族の産出が目立つ。試料29(第29層)でもタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族の産出が目立つが、イネ属は認められない。試料28(第27層)でも同様な産状を示すが、再びイネ属が認められる。

試料21～12(第18～９層)はイネ属とタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ

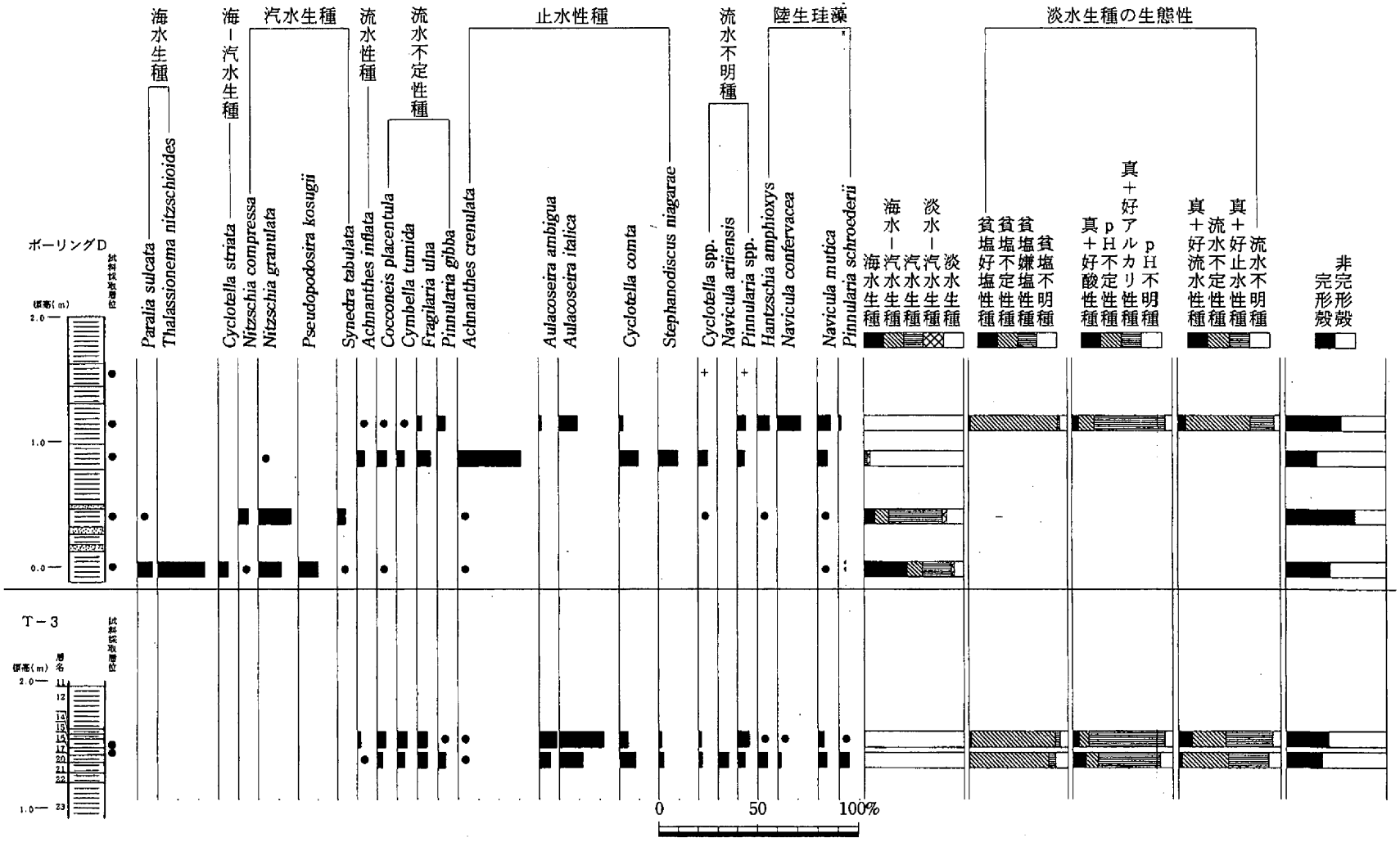


図５　D地点・Ｔ３の主要珪藻化石群集

※　海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で産出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

亜科なども認められる。

＜T11＞

西壁試料の結果を図９に示す。第32層試料はタケ亜科が多産し、ヨシ属やウシクサ族も認められる。

東壁試料の結果を図10に示す。第11・10層ではタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族機動細胞珪酸体も多産する。また、ヨシ属やイチゴツナギ亜科も認められる。

第12・11層試料ではイネ属の産出が目立ち、タケ亜科も多産する。

＜T10＞

結果を図11に示す。試料９～７(第49～46層)では検出個数が少ないが、タケ亜科やヨシ属の産出が

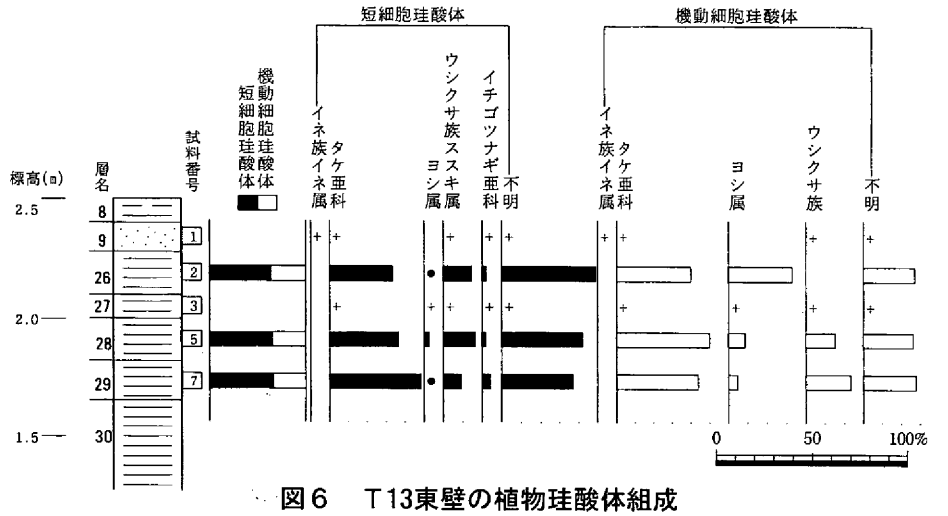


図６　T13東壁の植物珪酸体組成

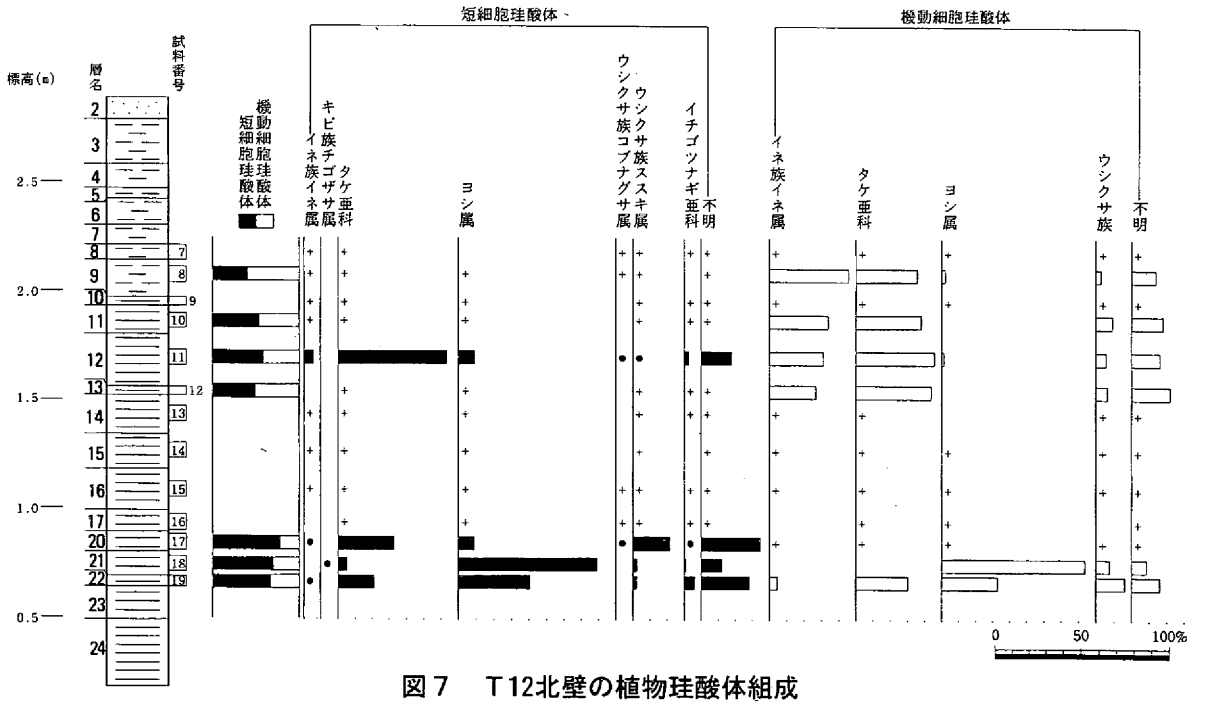


図７　T12北壁の植物珪酸体組成

※　出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は１％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個体未満の試料で検出した種類を示す。

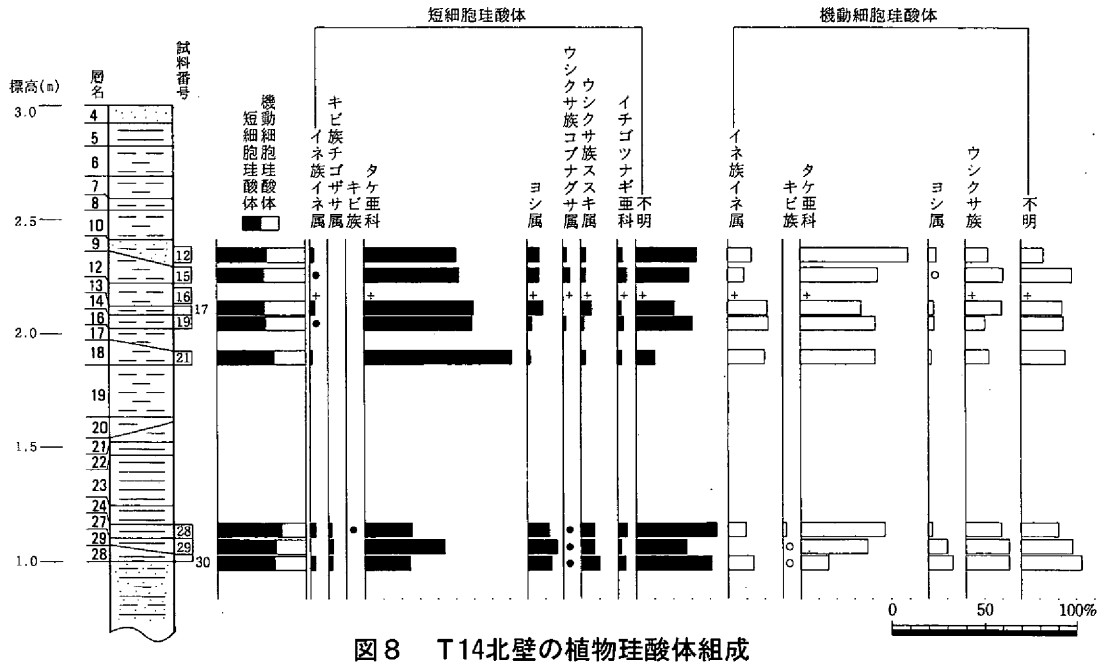


図８　T14北壁の植物珪酸体組成

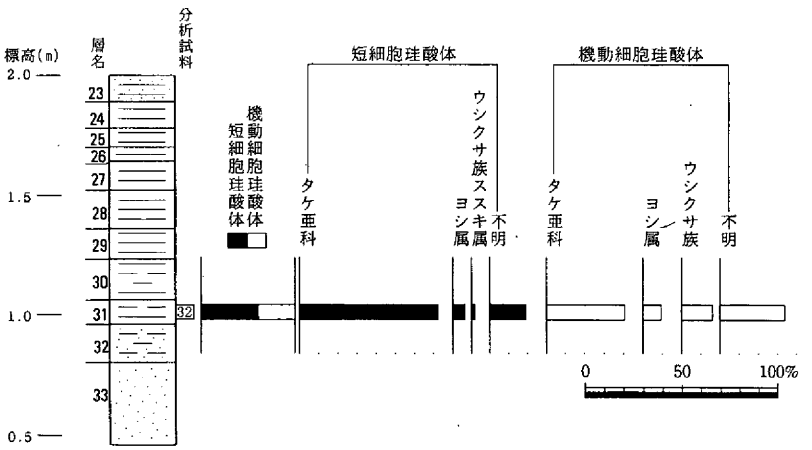


図９　T11西壁の植物珪酸体組成

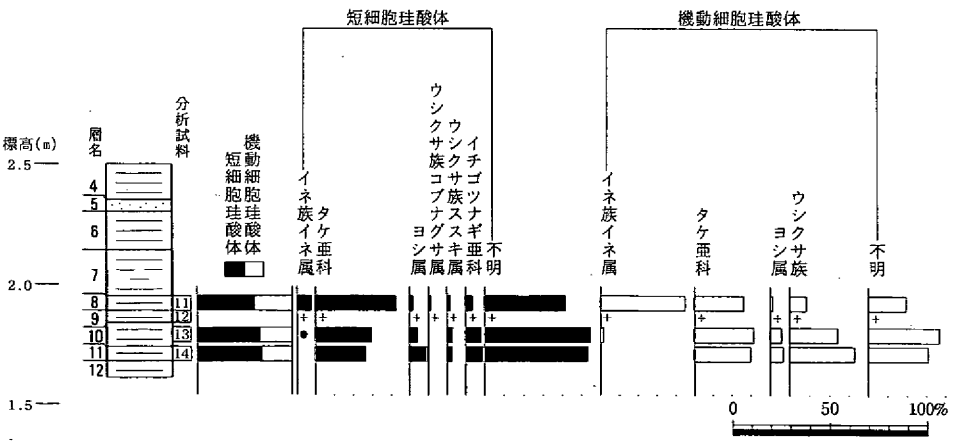


図10　T11東壁の植物珪酸体組成

※　出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は１％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個体未満の試料で検出した種類を示す。

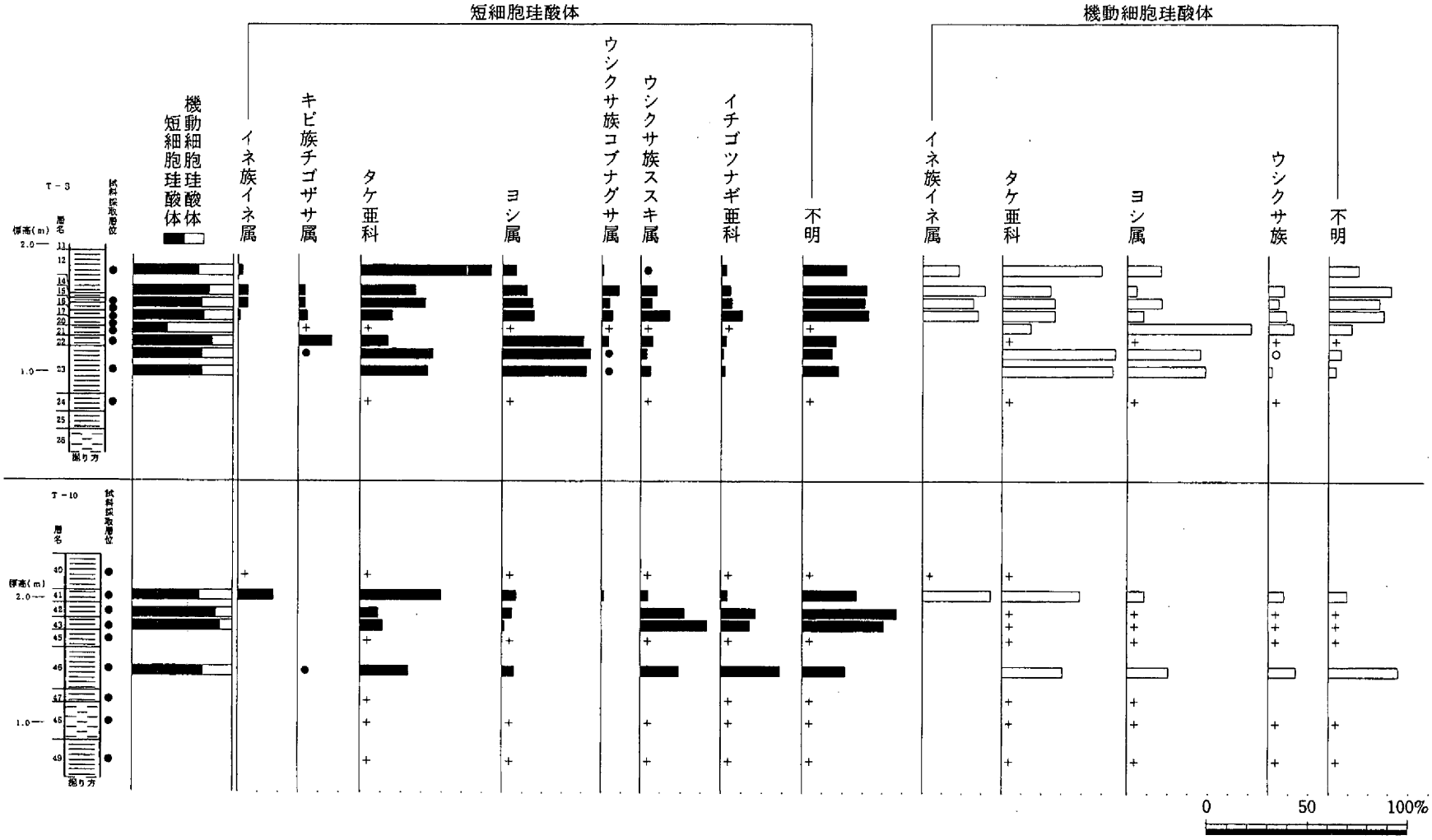


図11　Ｔ３・Ｔ10の植物珪酸体組成

※　出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は１％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個体未満の試料で検出した種類を示す。

目立つ。

試料６～３(第46～43層)では、ススキ属やイチゴツナギ亜科の産出が目立ち、タケ亜科やヨシ属なども認められる。しかし、弥生時代前期の水田層とされる試料３からは、イネ属が全く検出されない。

試料２(第41層)ではイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出され、特に機動細胞珪酸体の産出が目立つ。また、タケ亜科の割合が高く、ヨシ属やウシクサ族なども認められる。

試料１(第40層)では、イネ属やタケ亜科などがわずかに認められるにすぎない。

＜Ｔ５＞

結果を図12に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して保存状態は悪い。

試料10～７(第17～14層)では、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族などが見られ、タケ亜科の産出が目立つ。

弥生時代前期水田層とされる土層より下位の層位から採取された試料６(第13層)では、栽培植物のイネ属がわずかに認められる。また、タケ亜科の産出が目立ちヨシ属やウシクサ族なども認められる。

弥生時代前期水田層とされる試料のうち、試料５(第12層)と試料３(第10層)では、イネ属が認められるものの、出現率は低い。また、試料４(第11層)ではイネ属が全く認められず、タケ亜科とともにウシクサ族の産出が目立つ。

試料２(第９層)・１(第８層)では、特にイネ属の機動細胞珪酸体の産出が目立つ。また、タケ亜科の割合が高く、ヨシ属やウシクサ族なども認められる。

＜Ｔ３＞

結果を図11に示す。試料９(第24層)では、タケ亜科やヨシ属などがわずかに認められるにすぎない。なお、本試料からは珪藻化石も認められ、海水泥質干潟指標種群(小杉，1988)に含まれる*Nitzschia granulata*が多産する。

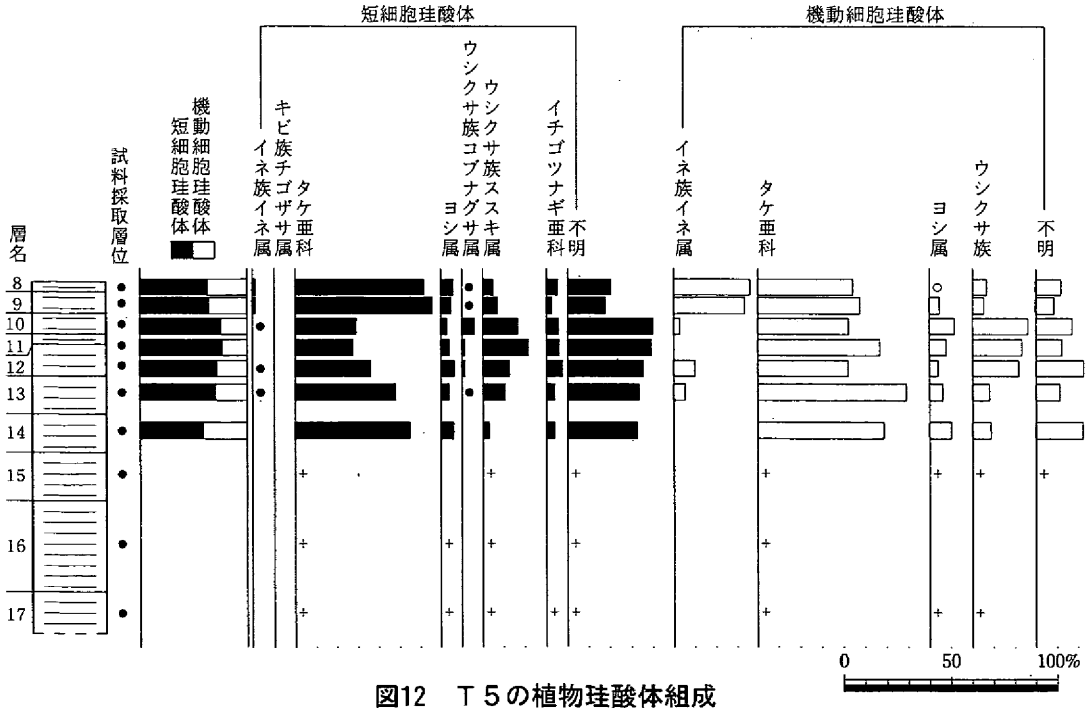


図12　Ｔ５の植物珪酸体組成

※　出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個体未満の試料で検出した種類を示す。

試料８～５(第23～20層)では、タケ亜科やヨシ属が優占する組成が見られ、チゴザサ属やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

縄文時代晩期の水田層とされる第17層より採取された試料４では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がともに検出され、特に機動細胞珪酸体の産出が目立つ。また、ヨシ属の割合が減少する。このほか、タケ亜科やウシクサ族なども認められる。

弥生時代前期の水田層とされる試料３(第16層)・２(第15層)でもイネ属が検出され、機動細胞珪酸体の検出が目立つ。また、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族など下位の試料と同様な産状である。

その上位の試料１(第12層)でもイネ属が検出される。また、タケ亜科の産出が目立つ。

５．考察

各調査区の珪藻化石・植物珪酸体の産状に基づいて、調査区内の古環境変遷を述べる。(図13)

(１) 古地理変遷

岡山平野の地下には、下位より更新統の低位段丘堆積物、最終氷期堆積物、その上位に完新統の下部砂層、海成粘土層、上部砂層、表土が順に堆積している。(和田，1987・是板，1987)。今回の各調査区で認められた堆積物は、珪藻化石群の特徴から、海成粘土層より上位の堆積物に対比される。

標高0.8mの砂質堆積物(T13第34層、T11西壁第33層、F地点－3.0～－1.5m、D地点－0.5m)では、海水あるいは海～汽水生種が多産する群集が認められた。これらの層準が海成粘土層に対比される。その堆積時期は、E地点の標高－4.75m出土木片の放射性炭素年代値から、約6,000年前以降と推定される。すなわち、縄文海進の海退期の堆積物とみなせる。珪藻化石群集は、標高－1.0m以下で内湾指標種が卓越しているのに対して、上位に向かって汽水生種の占める割合が増加している。このような変化も海退を反映したものであり、調査区が内湾から干潟へ変化したことを示す。

このように今回の調査域では、少なくとも標高0.8m層準まで干潟が継続していたとみられるが、T12についてはその限りではない。T12・14では標高0.8mより下位でも淡水性の珪藻化石が卓越している。これは、両調査区の調査地点では干潟堆積物が何らかの影響により浸食されていることを示す。おそらく、調査区が干潟であった時期以降に河成作用が活発となり、干潟面を浸食する谷が形成されたものと推測される。この谷の形成時期は、遺物の出土状況から、全国各地の海岸平野で確認されている「弥生の小海退」と呼ばれる小海水準低下により形成された浅谷に対比される可能性がある。

干潟期以降は、各調査区とも河成作用が活発となるが、その水域環境は各調査区で異なっている。

T13では、干潟の上位を覆う堆積物からは珪藻化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、堆積速度が速く、取り込まれる珪藻化石が少なかった、あるいは堆積後に分解消失した可能性が考えられる。

T12では、上記したように浸食谷が形成されている可能性がある。この谷は、埋積途中の第21・17層の頃に池沼のような止水域になり、第11層の頃に沼沢地のような場所へ変化したとみられる。遺物の時代性に基づくと、止水域の時期は縄文時代晩期から弥生時代前期頃、沼沢地の時期は弥生時代後期頃と推定される。

T14でも浅谷が形成された可能性があり、その浅谷の埋積途中の第30～29層の頃は、乾燥することのある沼沢地～湿地のような場所へ変化したことが推定される。

T11では干潟の上位を覆う堆積物からは珪藻化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、T13と同様の原因が考えられる。

調査区 / 年代	T13 東壁 (微高地)	T12 北壁 (旧河道)	T14 北壁 (低地？)	T11 西壁 (旧河道)	T11 東壁 (旧河道)	T10 (低地)	ボーリングF (微高地)	T5 (微高地)	ボーリングD (微高地)	ボーリングE (微高地)	T3 (微高地)	堆積環境の変化	稲作の消長
弥生時代後期		珪藻化石が少ない イネ属の多産	古墳時代水田までイネ属が連続的に産出					イネ属の多産				詳細な環境は不明	引き続き、稲作が行われる
弥生時代前期	珪藻化石・P0少ない 内湾の影響のある干潟 タケ亜科の産出が目立つ	池沼 イネ属はわずかタケ亜科が多産	池沼～湿地（乾燥化） イネ属が産出 氾濫？		イネ属の多産 タケ亜科などの産出	イネ属の多産 タケ亜科などの産出		イネ属が産出 タケ亜科多産の P0の検出が少数	珪藻化石が少ない		沼沢地 イネ属の多産 タケ亜科の多産	沼沢地～湿地	低地や微高地で稲作が行われる 周囲にタケ亜科などが生育
縄文時代晩期		池沼～湿地 イネ属はわずか ヨシ属が多産		珪藻化石は未検出 海水～汽水が混じる		タケ亜科・ヨシ属・ウシクサ族の産出目立つ			池沼		イネ属の多産 タケ亜科の多産	池沼、あるいは沼沢地～湿地	周囲にタケ亜科やヨシ属が生育 イネ属は落ち込み？
縄文時代後期									干潟		タケ亜科・ヨシ属の産出が目立つ	干潟	周囲にタケ亜科やヨシ属が生育
縄文時代前期							内湾		内湾の影響のある干潟	-4.75mの出土木片 14C年代：4130B.C.		内湾、あるいは内湾の影響のある干潟	

図13　調査区内の環境変遷（網掛け部分は未調査部分）

D地点では、標高0.9m前後で止水域となり、標高1.5m前後で沼沢地のような場所へ変化したことが推定される。このうち、沼沢地の層準が弥生時代前期の層準に対比されると考えられている。

T３では、弥生時代前期水田層の第17・16層の頃は、沼沢～湿地のような水域環境で堆積したことが推定される。

各調査区の結果から弥生時代前期の頃は、調査域西部のT12は池沼のような場所であったが、T14は乾燥することのある沼沢～湿地のような場所であったと考えられる。この場所を利用して水田が構築されたと推定される。

（２）稲作の消長

T３の第21層は縄文時代後期の水田層、第17層は縄文時代晩期の水田層である可能性が考えられている。栽培種のイネ属は第17層から産出したが、その層厚が薄く、直上を弥生時代前期の水田層(第16・15層)が覆うことから、上位層からの落ち込みの可能性が高い。したがって、水田耕土であったと特定することはできない。ただし、T12の谷堆積物のうち縄文時代晩期土器の出土した第21層からは、わずかであるがイネ属が検出された。このことは縄文時代晩期にイネが存在していたことを示しており、縄文時代晩期に稲作が行われていた可能性も否定できない。今後、本地域において同様の調査を行うことにより明らかにしていきたい。なお、この時期の調査域はヨシなどが繁茂していたことが推定される。

弥生時代前期の水田層の可能性がある層順では、各調査区ともイネ属が多産した。これは、土層内にイネ属の植物体が取り込まれていることを示しており、稲作に起因すると考えられる。すなわち、弥生時代前期には、調査域の広い範囲で稲作が行われていた可能性が高い。この水田層の水域環境は、先述したとおり沼沢地のような状態にあり、水田耕作を行うには適していたと考えられる。水質的には、富栄養水域を指標する珪藻が少ないことから、富栄養化していなかったと推定される。中世・近世の水田では、富栄養種が多産する場合がしばしば認められ、その原因として施肥の影響が指摘されている(田中，1987;パリノ・サーヴェイ株式会社，1982・1983・1986・1992・1996)。今回の水田では、施肥の有無などの農耕様式が異なっていたのかもしれない。

このような弥生時代前期の水田は、T３の植物珪酸体組成の層位変化などから、ヨシ属が繁茂していた場所を開墾して構築されたことが推定される。T３の畦畔構成層(第16層)は、イネ属植物珪酸体の出現率が低かった。通常、継続して行われている水田では、畦畔は水田耕土を利用して構築される場合が多い。ここでの畦畔も水田層と同様の岩質を呈することから、耕土と同様の土が盛られている可能性が高い。特定はできないが、そうだとすれば検出された畦畔は開墾当時に構築されたものである可能性がある。

弥生時代後期以降の堆積物では、T12・14・５でイネ属が多産した。特にT14の古墳時代水田では多産した。このことは弥生時代後期以降も引き続いて稲作が行われていたことが推定される。周囲には、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族などのイネ科植物もみられたと考えられる。タケ亜科やウシクサ族などは比較的乾燥した場所に分布する種類であり、当時の水田周辺にはそのような場所が存在したことが推定される。

以上の結果から、本遺跡における稲作は弥生時代前期の頃までさかのぼることができる。発掘調査所見では弥生時代前期には微高地以外の場所で稲作が行われていたと考えられているが、今回の結果では微高地部に位置するT３でも稲作が行われていたことが推定された。低地と微高地での詳細な稲

作の開始時期は現段階では明確になっていないが、ほぼ同時期に開始しているとすれば、低地に限らず、稲作の条件にあった場所で稲作が行われた可能性がある。今後、微高地の調査例を増やすことにより検討していきたい。

＜引用文献＞

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理，42，p.73-88.

Asai,K. and Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species in to Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1-353. BERLIN･STUTTGART.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1982）矢中遺跡群（Ⅱ）．高崎市文化財調査報告書第35集「天王前遺跡」，高崎市教育委員会，p.40-41.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1983）村北 A・天王前遺跡．高崎市文化財調査報告書第40集「矢中遺跡群（Ⅲ）」，高崎市教育委員会，p.30-34.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1986）中村遺跡．関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書（ＫＣ－Ⅲ），渋川市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団，p.541-542.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）二之宮千足遺跡の古環境解析．（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集「二之宮千足遺跡一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（自然科学・分析編）」，建設省・群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団，p.61-111.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1996）微化石の産状からみた稲作の消長．綾瀬市史９　別編，p.55-58.

佐藤裕司・谷村好洋・横山祐典（1996）*Melosira*属の珪藻の特徴的な種類：日本の完新世におけるマリーンリミットの指標．第四紀研究，35，2，p.99-107.

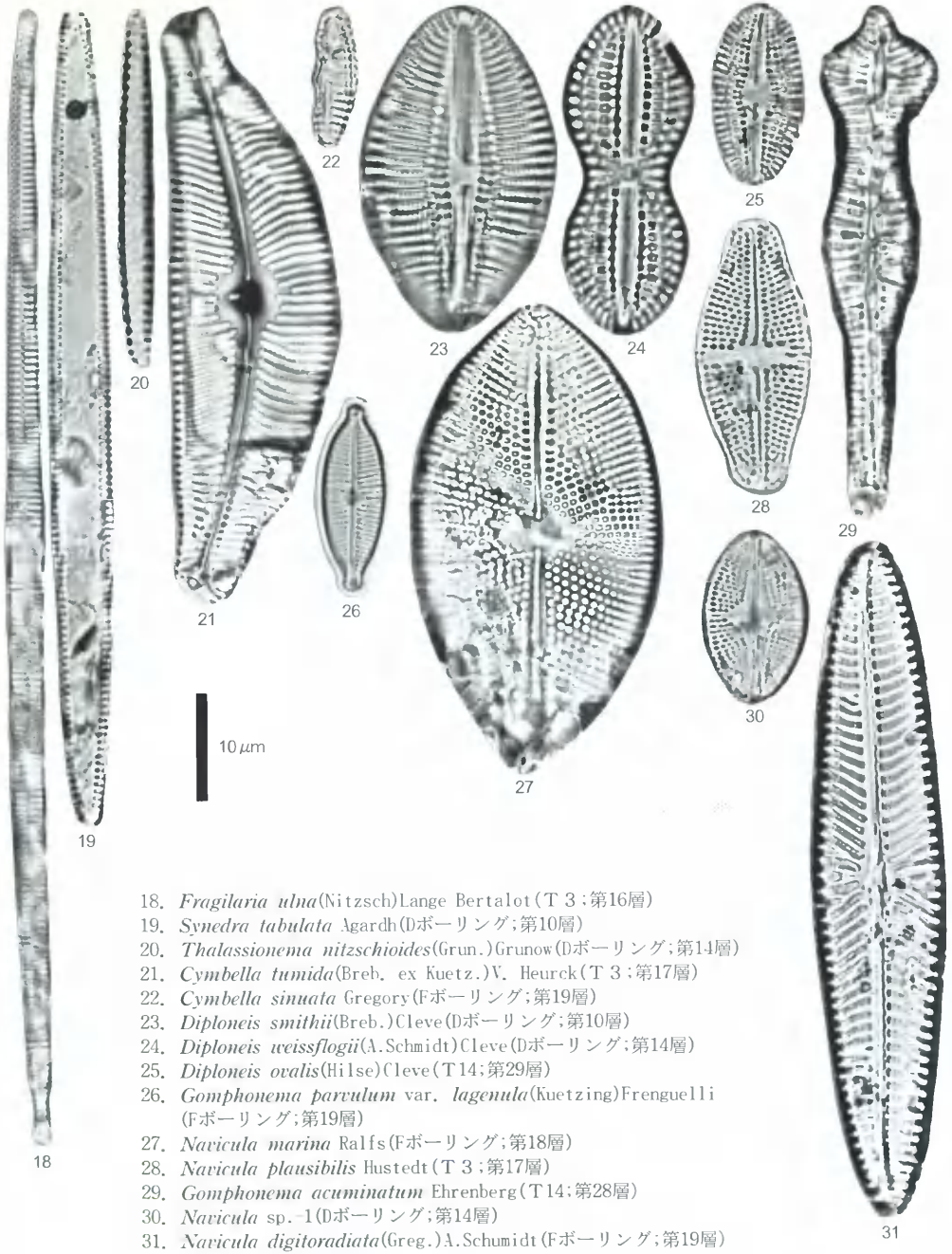
田中宏之（1987）群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻.群馬県立歴史博物館紀要，8，p.1-15.

和田温之（1987）岡山平野．日本の地質７「中国地方」，日本の地質「中国地方」編集委員会，p.146，共立出版株式会社.

是板慶一（1987）岡山平野．日本の地質７「中国地方」，日本の地質「中国地方」編集委員会，p.207-208，共立出版株式会社.

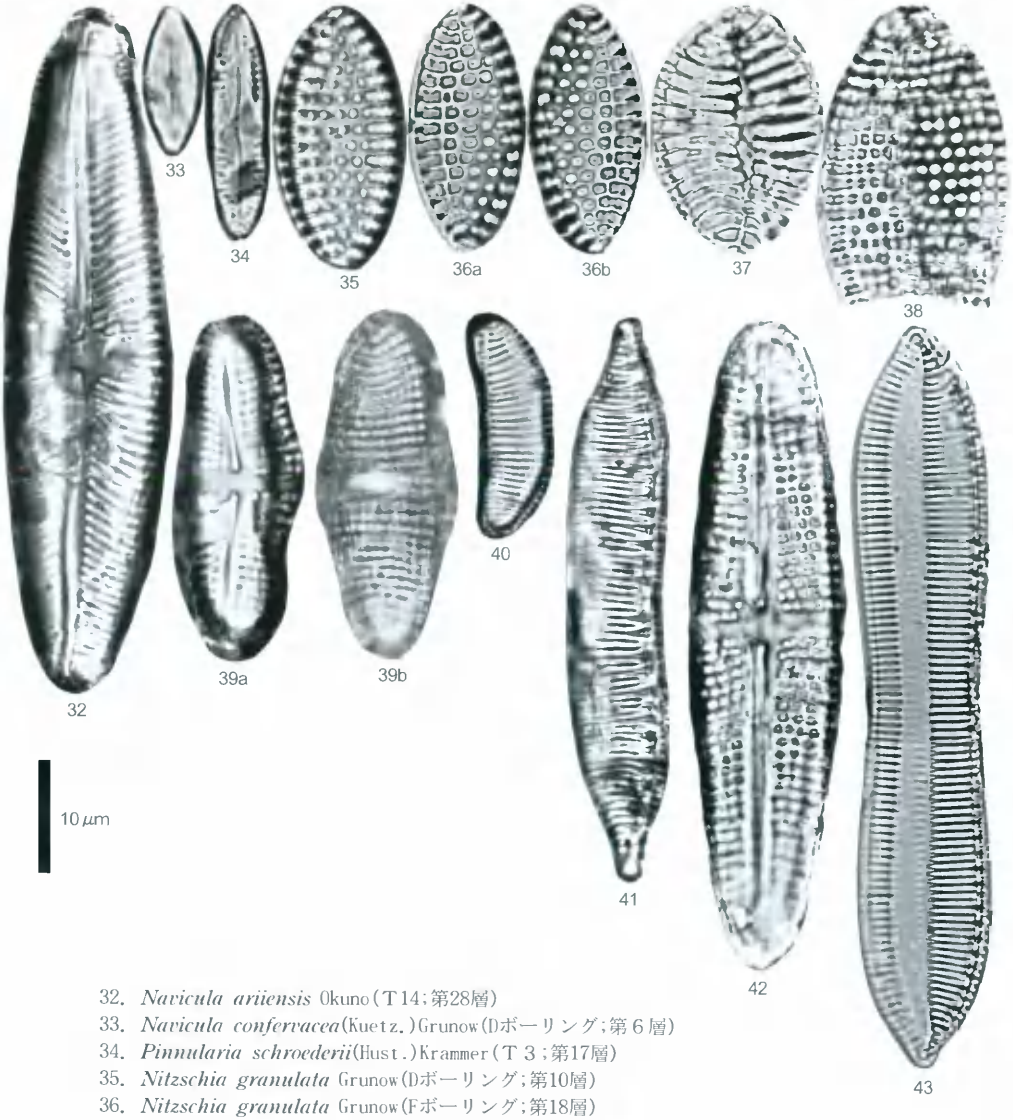
1．*Stephanodiscus niagarae* Ehrenberg(T12;第17層)
2．*Thalassiosira lacustris*(Grun.)Hasle(Dボーリング;第10層)
3．*Paralia sulcata*(Ehr.)Cleve(Fボーリング;第18層)
4．*Cyclotella* striata C. stylorum(Fボーリング;第18層)
5．*Cyclotella striata*(Kuetz.)Grunow(Dボーリング;第14層)
6．*Paralia sulcata*(Ehr.)Cleve(Dボーリング;第14層)
7．*Trybliоptychus cocconeiformis*(Cl.)Hendey(Dボーリング;第14層)
8．*Trybliоptychus cocconeiformis*(Cl.)Hendey(Fボーリング;第18層)
9．*Cyclotella comta*(Ehr.)Kuetzing(Fボーリング;第19層)
10．*Cyclotella comta*(Ehr.)Kuetzing(Fボーリング;第19層)
11．*Paralia sulcata*(Ehr.)Cleve(Fボーリング;第18層)
12．*Cyclotella comta*(Ehr.)Kuetzing(T 3;第17層)
13．*Cyclotella comta*(Ehr.)Kuetzing(T12;第17層)
14．*Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato(Dボーリング;第10層)
15．*Pseudopodosira kosugii* Tanimura et Sato(Dボーリング;第10層)
16．*Aulacoseira granulata*(Ehr.)Simonsen(Fボーリング;第10層)
17．*Aulacoseira italica*(Ehr.)Simonsen(T 3;第17層)

図版 1　珪藻化石(1)



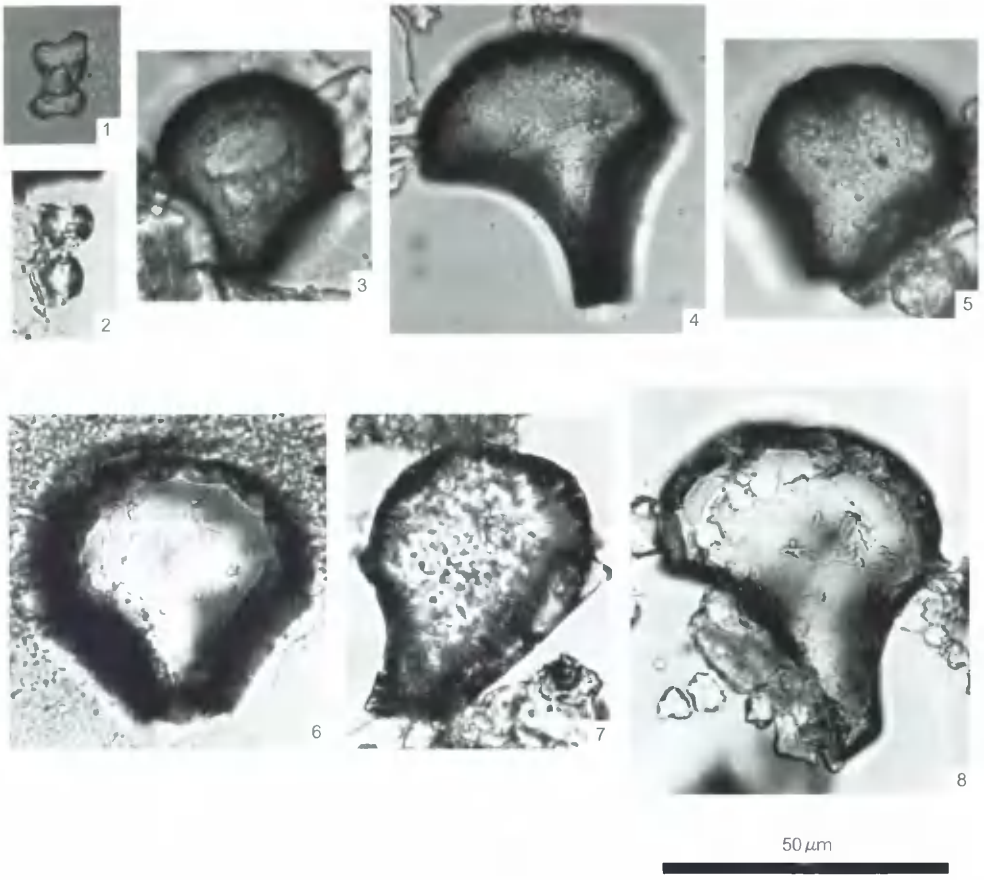
18. *Fragilaria ulna*(Nitzsch)Lange Bertalot(T 3 ;第16層)
19. *Synedra tabulata* Agardh(Dボーリング;第10層)
20. *Thalassionema nitzschioides*(Grun.)Grunow(Dボーリング;第14層)
21. *Cymbella tumida*(Breb. ex Kuetz.)V. Heurck(T 3 ;第17層)
22. *Cymbella sinuata* Gregory(Fボーリング;第19層)
23. *Diploneis smithii*(Breb.)Cleve(Dボーリング;第10層)
24. *Diploneis weissflogii*(A.Schmidt)Cleve(Dボーリング;第14層)
25. *Diploneis ovalis*(Hilse)Cleve(T14;第29層)
26. *Gomphonema parvulum* var. *lagenula*(Kuetzing)Frenguelli (Fボーリング;第19層)
27. *Navicula marina* Ralfs(Fボーリング;第18層)
28. *Navicula plausibilis* Hustedt(T 3 ;第17層)
29. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg(T14;第28層)
30. *Navicula* sp.-1(Dボーリング;第14層)
31. *Navicula digitoradiata*(Greg.)A.Schumidt(Fボーリング;第19層)

図版２　珪藻化石(2)



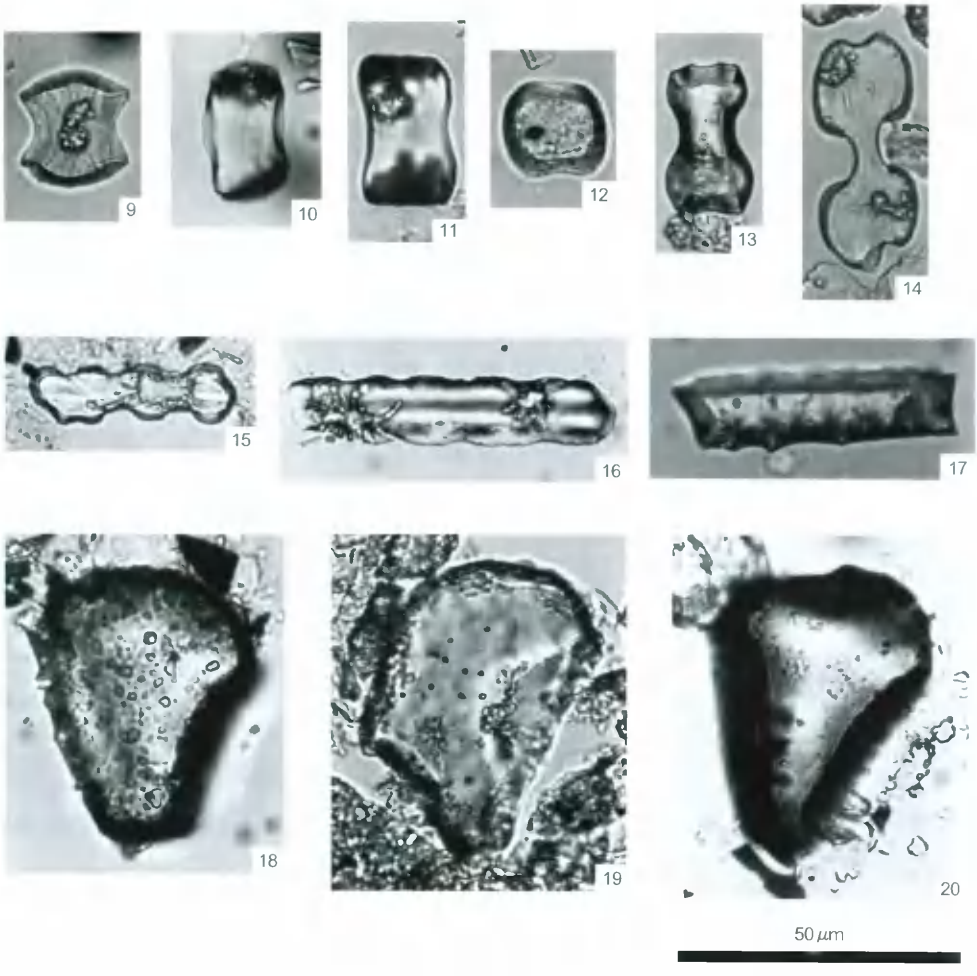
32. *Navicula ariiensis* Okuno(T14;第28層)
33. *Navicula confervacea*(Kuetz.)Grunow(Dボーリング;第6層)
34. *Pinnularia schroederii*(Hust.)Krammer(T3;第17層)
35. *Nitzschia granulata* Grunow(Dボーリング;第10層)
36. *Nitzschia granulata* Grunow(Fボーリング;第18層)
37. *Nitzschia cocconeiformis* Grunow(Fボーリング;第18層)
38. *Nitzschia compressa*(Bailey)Boyer(Fボーリング;第18層)
39. *Achnanthes inflata*(Kuetz.)Grunow(Dボーリング;第7層)
40. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow(T3;第17層)
41. *Hantzschia amphioxys*(Ehr.)Grunow(T14;第29層)
42. *Achnanthes crenulata* Grunow(Dボーリング;第6層)
43. *Nitzschia marginulata* Grunow(Dボーリング;第10層)

図版3　珪藻化石(3)



1．イネ属短細胞珪酸体(T11東壁:第９層)
2．イネ属短細胞珪酸体(T10:第41層)
3．イネ属機動細胞珪酸体(T12:第20層)
4．イネ属機動細胞珪酸体(T14:第28層)
5．イネ属機動細胞珪酸体(T11東壁:第９層)
6．イネ属機動細胞珪酸体(T10:第41層)
7．イネ属機動細胞珪酸体(Ｔ５:第12層)
8．イネ属機動細胞珪酸体(Ｔ５:第８層)

図版４　植物珪酸体(1)



9．チゴザサ属短細胞珪酸体（T３；第15層）
10．タケ亜科短細胞珪酸体（T５；第17層）
11．タケ亜科短細胞珪酸体（T10；第41層）
12．ヨシ属短細胞珪酸体（T３；第17層）
13．コブナグサ属短細胞珪酸体（T５；第12層）
14．ススキ属短細胞珪酸体（T３；第17層）
15．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（T10；第43層）
16．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（T５；第12層）
17．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（T11東壁；第11層）
18．タケ亜科機動細胞珪酸体（T10；第41層）
19．ヨシ属機動細胞珪酸体（T３；第21層）
20．ウシクサ族機動細胞珪酸体（T５；第12層）

図版５　植物珪酸体(2)

新旧遺構名称対照表

新遺構名	調査区	旧遺構名	時　　期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時　　期
竪穴住居１	Ｔ６	竪穴住居	６世紀前半	溝１	Ｔ２	溝	弥生時代前期
竪穴住居２	Ｔ７	竪穴住居	弥生時代後期	溝２	Ｔ２	溝	中世？
竪穴住居３	Ｔ７	竪穴住居１	５世紀末～６世紀初頭	溝３	Ｔ９	溝	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半
竪穴住居４	Ｔ７	竪穴住居２	６世紀代	溝４	Ｔ10	溝５	弥生時代後期後半
柱穴列１	Ｔ１	柱穴１・２	古墳時代初頭	溝５	Ｔ10	溝５	弥生時代後期後半
井戸１	Ｔ６	井戸１	古墳時代初頭	溝６	Ｔ10	溝１	近世
土壙１	Ｔ６	土壙１	６世紀中葉～	溝７	Ｔ10	溝４	中世～近世
土壙２	Ｔ７	土壙３	弥生時代後期後半	溝８	Ｔ10	溝２	近世
土壙３	Ｔ７	土壙４	弥生時代後期後半	溝９	Ｔ10	溝３	近世
土壙４	Ｔ７	土壙１	弥生時代後期後半	溝10	Ｔ11	溝１	弥生時代後期後半
土壙５	Ｔ９	土壙２	近世	溝11	Ｔ11	溝２	弥生時代後期後半
土壙６	Ｔ９	土壙１	近世	溝12	Ｔ11	溝３	古代～中世
土壙７	Ｔ９	土壙１	中世	溝13	Ｔ13	溝	古代～中世
土壙８	Ｔ10	土壙３	近世	溝14	Ｔ14	溝２	弥生時代前期？
土壙９	Ｔ10	土壙２	近世	溝15	Ｔ14	溝１	古墳時代後期
土壙10	Ｔ10	土壙１	近世	河道	Ｔ９	河道	弥生時代後期後半～古墳時代前期前半
土壙11	Ｔ13	土壙１	弥生時代前期後半	柱穴１	Ｔ７	Ｐ４	古墳時代初頭
土壙12	Ｔ13	土壙２	弥生時代前期後半	たわみ状遺構			中世後半

竪穴住居一覧

遺構番号	平面形態	規　模 長×短	床面積（㎡）	主柱穴数	中央穴	屋内土壙	壁体溝	焼土面	かまど	時　　期	備　　考
1	方	－	－	無	無	1	有	－	有	６世紀前半	
2	円	－	－	２＋α	有	－	有	－	無	弥生時代後期	
3	方	－	－	３＋α	無	－	無	－	有	５世紀末～６世紀初頭	主柱穴４本か、勾玉出土
4	方	－	－	－	無	－	－	－	－	６世紀代	

－は未確認を示す

土器観察表

番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調
1	竪穴住居1	(須)杯身	12.1	－	－	内外面ヨコナデ	1㎜以下の砂粒僅	良好	灰N6/0
2	竪穴住居1	甑形土器	24.5	7.9	22.9	内外面ナデ、底部外面工具痕	1㎜以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい褐7.5YR6/3
3	井戸１	甕形土器	－	－	－	内面ケズリ、外面ハケ	0.5㎜以下の砂粒多、赤色酸化粒少	良好	にぶい黄橙10YR7/4
4	井戸１	高杯形土器	17.4	－	－	内外面ミガキ	水こし粘土	良好	橙5YR6/6
5	土壙１	(須)無蓋高坏	－	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ	0.5㎜以下の砂粒僅	良好	灰N6/0
6	竪穴住居2	鉢形土器	10.7	3.5	7.1	内面ナデ・ハケ、外面ハケ、脚部ユビオサエ	0.5㎜以下の砂粒・赤色酸化粒中、角閃石多	良好	にぶい橙7.5YR6/4
7	土壙２	壺形土器	25.9	－	－	内面ケズリ・ハケ、外面ハケ	3㎜以下の砂粒・角閃石やや多	良好	灰白2.5Y7/1
8	土壙２	壺形土器	30.4	－	－	内面ケズリ・ミガキ・しぼり痕、外面ハケ、沈線らせん状	0.5㎜以下の砂粒・赤色酸化粒・角閃石やや多	良好	にぶい橙7.5YR7/3
9	土壙２	壺形土器	32.4	－	－	内外面ヨコナデ	2.5㎜以下の砂粒・3～5.5㎜の石粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/4
10	土壙２	壺形土器	27.3	－	－	内面ケズリ・ハケ、外面ハケ・ミガキ	1㎜以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい黄橙10YR7/3
11	土壙２	壺形土器	19.8	－	－	内面ケズリ・ハケ・ヨコナデ、外面ハケ・ミガキ	石粒僅、0.5㎜以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい橙7.5YR7/3
12	土壙２	壺形土器	10.1	－	－	内面ミガキ・刺突２、外面ミガキ・面取り痕	0.5㎜以下の砂粒・赤色酸化粒少、角閃石僅	良好	にぶい黄橙10YR7/3
13	土壙２	壺形土器	18.6	－	－	内面ケズリ・ミガキ・刺突２、外面ミガキ	1㎜以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい橙7.5YR6/4
14	土壙２	壺形土器	－	－	－	内面ケズリ・ハケ、外面ハケ・ミガキ	2.5㎜以下の砂粒多、赤色酸化粒中、角閃石少	良好	にぶい橙7.5YR7/4
15	土壙２	壺形土器	－	－	－	内面ケズリ・ユビオサエ、外面ハケ・ミガキ、突帯1条	0.5㎜以下の砂粒・角閃石中	良好	にぶい橙7.5YR7/3
16	土壙２	壺形土器	－	－	－	内面ケズリ・ハケ・ミガキ、外面ハケ・ミガキ	1㎜以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい黄橙10YR7/3
17	土壙２	壺形土器	17.5	－	－	内面ケズリ、外面ミガキ・ヨコナデ	1㎜以下の砂粒多、角閃石中	良好	にぶい橙5YR6/4
18	土壙２	壺形土器	18.2	10.0	－	内面ケズリ・ナデ、外面ミガキ	2.5㎜以下の砂粒・角閃石中	良好	にぶい橙5YR7/4
19	土壙２	台付口壺形土器?	－	－	－	内面ユビオサエ・シボリ、外面ミガキ	0.5㎜以下の砂粒僅	良好	にぶい橙7.5YR6/4
20	土壙２	甕形土器	15.8	25.9	5.1	内面ケズリ、外面ハケ、口縁部ヨコナデ	1㎜以下の砂粒・赤色酸化粒少、角閃石僅	良好	にぶい橙7.5YR7/3
21	土壙２	甕形土器	13.9	－	－	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	1㎜以下の砂粒中、赤色酸化粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/3
22	土壙２	甕形土器	14.1	－	－	内面ケズリ・ユビオサエ、外面ハケ、ユビオサエ口縁部ヨコナデ	1㎜以下の砂粒少、赤色酸化粒少	良好	にぶい橙2.5YR6/4
23	土壙２	甕形土器	14.5	－	－	内面ケズリ、外面ハケ、口縁部ヨコナデ	0.5㎜以下の砂粒少、赤色酸化粒僅	良好	灰黄褐10YR6/2
24	土壙２	甕形土器	15.9	－	－	内面ケズリ、外面ハケ、ユビオサ、エ口縁部ヨコナデ	1～1.5㎜の砂粒中	良好	赤橙10YR6/6
25	土壙２	甕形土器	14.5	－	－	内面ケズリ、外面ハケ	0.5㎜以下の砂粒少	良好	にぶい黄橙10YR7/3
26	土壙２	壺形土器	13.9	－	－	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	－㎜以下の砂粒多、角閃石少	良好	にぶい橙5YR6/4
27	土壙２	甕形土器	17.3	－	－	内面ケズリ	5.5㎜以下の石粒中、1.5㎜以下の砂粒多	良好	にぶい橙5YR6/4
28	土壙２	高杯形土器	19.7	－	－	内外面ヨコナデ・ミガキ、杯部外面ケズリ後ミガキ	0.5㎜以下の砂粒僅、水こし粘土？	良好	にぶい橙7.5YR6/4
29	土壙２	高杯形土器	－	10.5	－	内外面ミガキ、脚部内面シボリ	1㎜以下の砂粒・赤色酸化粒中、角閃石僅	良好	橙2.5YR6/6
30	土壙２	鉢形土器	16.4	40.1	6.7	内外面ヨコナデ・ミガキ	0.5㎜以下の砂粒少、赤色酸化粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/4
31	土壙２	鉢形土器	18.6	5.9	12.2	内面ケズリ・ミガキ・ハケ、外面ミガキ	1㎜以下の砂粒少、赤色酸化粒少	良好	にぶい橙5YR7/4
32	土壙２	鉢形土器	19.1	－	－	内面ケズリ・ミガキ、外面ハケ・ミガキ	0.4㎜以下の砂粒少、赤色酸化粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/4
33	土壙２	鉢形土器	19.4	－	－	内外面ミガキ	0.5㎜以下の砂粒・赤色酸化粒少	良好	にぶい橙5YR7/3
34	土壙２	鉢形土器	26.9	6.8	16.5	内面ケズリ・ミガキ、外面ハケ	1㎜以下の砂粒中、赤色酸化粒少	良好	橙5YR6/6
35	土壙２	鉢形土器	40.2	12.9	1.8	内面ケズリ・ミガキ、外面ハケ	3.5～5㎜の石粒僅、1㎜以下の砂粒少	良好	にぶい橙7.5YR7/3
36	土壙２	鉢形土器	－	4.4	－	内外面ユビオサエ・ナデ	0.5㎜以下の砂粒中	良好	にぶい橙7.5YR7/4

番号	出土地点	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調
37	土壙２	鉢形土器	11.4	3.9	6.4	内面ユビオサエ・ナデ、外面ユビオサエ	１mm以下の砂粒中、赤色酸化粒少	良好	灰黄褐2.5YR6/4
38	土壙２	台付鉢形土器？	12.6	－	－	内外面ユビオサエ後ナデ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	にぶい黄橙10YR7/2
39	土壙２	小型器台形土器	10.8	－	－	内外面ハケ	0.5mm以下の砂粒・角閃石中	良好	にぶい褐7.5YR6/3
40	土壙３	甕形土器	13.9	－	－	内面ケズリ	１mm以下の砂粒中	良好	にぶい橙7.5YR7/4
41	土壙３	甕形土器	14.7	－	－	内面ケズリ、外面ヨコナデ	１mm以下の砂粒中、赤色酸化粒少	良好	にぶい橙7.5YR6/4
42	土壙３	鉢形土器	－	5.3	－	内面ナデ、外面ハケ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰黄2.5Y6/2
43	土壙４	甕形土器	12.6	－	－	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒中、角閃石僅	良好	にぶい橙7.5YR7/4
44	土壙４	鉢形土器	14.6	－	－	内面ハケ、外面ナデ、底部木葉文？	0.5mm以下の砂粒少、赤色酸化粒僅	良好	にぶい橙7.5YR7/3
45	土壙４	鉢形土器	15.8	－	－	内面ハケ、外面ナデ	1.5mm以下の砂粒少、赤色酸化粒僅	良好	褐灰10YR6/1～5/1
46	土壙４	高杯形土器	13.9	－	－	内外面ミガキ	微砂粒少	良好	にぶい橙7.5YR7/3
47	土壙４	高杯形土器	17.9	－	－	内外面ミガキ	0.5mm以下の砂粒少、赤色酸化粒僅	良好	にぶい橙5YR6/4
48	土壙４	高杯形土器	－	－	－	杯部内外面ミガキ脚部内面しぼり、脚部外面ミガキ・沈線	0.5mm以下の砂粒少、赤色酸化粒僅	良好	橙7.5YR6/6
49	土壙４	鉢形土器	8.8	2.7	8.0	内面ハケ・ヨコナデ、外面ハケ後ナデ・ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒中、角閃石僅	良好	にぶい黄橙10YR7/2
50	土壙４	手づくね	4.8	－	3.1	内外面ユビオサエ	0.5mm以下の砂粒・角閃石僅	良好	にぶい黄橙10YR7/3
51	土壙４	手づくね	4.9	－	－	内外面ユビオサエ・ナデ	0.5mm以下の砂粒・赤色酸化粒僅	良好	橙7.5YR7/6
52	柱穴１	高杯形土器	10.8	－	－	内外面ミガキ	微砂粒中	良好	橙5YR7/6
53	柱穴１	高杯形土器？	18.7	－	－	内外面ヨコナデ	１mm以下の砂粒少、赤色酸化粒・角閃石中	良好	灰褐7.5YR5/2
54	竪穴住居3	甕形土器	18.5	－	33.9	内面ナデ・ユビオサエ、外面ハケ・ヨコナデ	2.5mm以下の砂粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/3
55	竪穴住居3	甕形土器	15.9	－	－	内面ナデ・ユビオサエ、外面ハケ	2.5mm以下の砂粒多、角閃石少	良好	橙N6/6
56	竪穴住居3	甕形土器	16.6	－	－	内面ケズリ・ハケ、外面ナデ・工具痕有	１mm以下の砂粒中、角閃石少	良好	橙5YR6/6
57	竪穴住居3	甕形土器	13.3	－	－	内面ケズリ、外面ナデ	２mm以下の砂粒多	良好	灰黄褐10YR6/2
58	竪穴住居3	小型甕形土器	－	－	－	内外面ユビオサエ・ナデ	0.5mm以下の砂粒少、角閃石多、赤色酸化粒少	良好	褐灰10YR5/1
59	竪穴住居3	(須)杯蓋	11.1	－	5.3	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、口唇部磨滅、ロクロ左	１mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
60	竪穴住居3	(須)杯蓋	11.8	－	5.6	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、口唇部磨滅、ロクロ左？	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰N7/0
61	竪穴住居3	(須)杯蓋	12.0	－	5.4	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ左、口唇部磨滅	1.5mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
62	竪穴住居3	(須)杯蓋	12.5	－	5.6	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、口唇部磨滅、ロクロ右	３mm以下の砂粒少、１mm以下の砂粒中	良好	灰白10YR7/1
63	竪穴住居3	(須)杯蓋	11.9	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ左	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰N7/0
64	竪穴住居3	(須)杯身	9.45	－	4.7	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ右	1.5mm以下の砂粒僅	良好	灰N6/0
65	竪穴住居3	(須)杯身	9.6	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ右？	1.5mm前後の砂粒中	良好	灰N6/0
66	竪穴住居3	(須)杯身	10.0	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ右、口唇部磨滅、重ね焼き痕	１mm以下の砂粒僅	良好	灰白N7/0
67	竪穴住居3	(須)杯身	10.2	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、口唇部磨滅、ロクロ右？	１mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
68	竪穴住居3	(須)杯身	10.4	－	3.7	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、口唇部磨滅、ロクロ右	2.5mm以下の砂粒少	良好	灰N5/0
69	竪穴住居3	(須)杯身	10.8	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、口唇部磨滅、ロクロ右	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
70	竪穴住居3	(須)杯身	－	－	10.9	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ右	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
71	竪穴住居3	(須)有蓋高坏	9.8	6.7	11.9	内外面ヨコナデ、透し有、重ね焼き痕有	2.5mm以下の砂粒僅	良好	灰白N7/0
72	竪穴住居3	(須)有蓋高坏	9.9	7.7	9.2	内外面ヨコナデ、３方透し、ロクロ左	１mm以下の砂粒少	良好	灰白N7/0
73	竪穴住居3	(須)有蓋高杯	10.0	8.8	8.7	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ	3～5mmの砂粒少、１mm以下の砂粒中	良好	灰N7/0
74	竪穴住居3	(須)有蓋高杯	10.0	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ左	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
75	竪穴住居3	(須)有蓋高杯	－	7.6	－	内外面ヨコナデ、３方透し	１mm以下の砂粒僅	良好	灰N7/0
76	竪穴住居3	(須)無蓋高坏	12.7	－	－	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ・口唇部磨滅、ロクロ右？	２mm以下の砂粒僅	良好	灰N6/0
77	竪穴住居3	(須)無蓋高坏	15	－	－	内外面ヨコナデ、外面丹塗りか、ロクロ右？	0.5mm以下の砂粒僅	良好	にぶい黄橙10YR7/2
78	竪穴住居3	(須)短頸壺	7.8	－	8.5	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ・ケズリ、ロクロ左	１mm以下の砂粒中	良好	灰N6/0
79	河道	壺形土器	20.7	－	－	内外面ヨコナデ、口唇部刻目	1.5mm以下の砂粒少	良好	灰白10YR7/1
80	河道	甕形土器	17.2	6.5	36.0	内面ケズリ、外面ハケ後ミガキ	３mm以下の砂粒多、赤色酸化粒やや多	良好	灰黄10YR7/2
81	河道	甕形土器	15.5	－	－	内面ケズリ、外面ハケ・ミガキ	１mm以下の砂粒多、角閃石中	良好	にぶい黄橙10YR7/2
82	河道	甕形土器	14.8	－	－	内面ケズリ、外面ハケ	１mm以下の砂粒多、角閃石少	良好	褐灰10YR6/1
83	河道	甕形土器	17	－	－	内面ケズリ、外面ハケ	3～6.5mmの石粒・2.5mm以下の砂粒・赤色酸化粒中	良好	にぶい橙5YR7/4
84	河道	甕形土器	15.0	－	－	内面ケズリ、外面ハケ	7～9mmの石粒少、2.6mm以下の砂粒中、赤色酸化土粒少	良好	にぶい橙5YR6/4
85	河道	鉢形土器	40.7	－	－	内面ミガキ・ユビオサエ、外面タタキ・ケズリ・ハケ後ミガキ	2.5mm以下の砂粒中、赤色酸化粒・角閃石少	良好	にぶい橙7.5YR6/4
86	河道	鉢形土器	18.1	10.3	6.2	内面磨滅のため不明、外面ミガキ	1.5mm以下の砂粒中	良好	橙5YR6/6
87	河道	台付鉢形土器	18.4	5.6	12.3	内面ケズリ・ミガキ、外面ハケ・ミガキ	1.5mm以下の砂粒多、角閃石少	良好	にぶい橙5YR6/4
88	河道	鉢形土器	13.7	－	－	内面ケズリ、外面ミガキ	１mm以下の砂粒少、赤色酸化粒少	良好	にぶい橙7.5YR7/3
89	河道	鉢形土器	16.8	5.1	7.1	内面ナデ？、外面ミガキ	0.5mm以下の砂粒多	良好	浅黄橙7.5YR8/4
90	河道	台付鉢形土器	10.7	3.7	7.3	内面ナデ・ハケ、外面ハケ、脚部ユビオサエ	１mm以下の砂粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/3
91	河道	台付鉢形土器	11.5	5.7	9.6	内外面タテミガキ、脚部ユビオサエ	0.5mm以下の砂粒僅、角閃石中、赤色酸化粒僅	良好	にぶい黄橙10YR7/3
92	河道	高杯形土器	27.8	19.7	19.6	内面ミガキ・シボリ、外面ミガキ・ハケ	0.5mm以下の砂粒・赤色酸化粒・角閃石中	良好	にぶい橙7.5YR7/4
93	河道	高杯形土器	24.4	16.8	17.6	杯部内面ミガキ、脚部内面しぼり、外面ミガキ、穿孔３	１mm以下の砂粒・角閃石・赤色酸化粒少	良好	にぶい橙7.5YR7/3
94	河道	高杯形土器	25.1	15.1	15.1	杯部内外面ミガキ、脚部内面シボリ、外面ミガキ	１mm以下の砂粒多、赤色酸化粒少、角閃石僅	良好	にぶい橙7.5YR7/4
95	河道	高杯形土器	23.8	－	－	内外面ミガキ、口縁部外面暗文風ミガキ	水こし粘土	良好	にぶい橙7.5YR7/4
96	河道	高杯形土器	－	16.4	－	内面シボリ・ハケ、外面ハケ後ミガキ、穿孔４	0.5mm以下の砂粒中、赤色酸化粒僅	良好	にぶい橙5YR6/4
97	河道	蓋形土器	11.7	7.7	－	内面シボリ後ナデ、外面ナデ	0.5mm以下の砂粒少	良好	黄灰2.5Y6/1
98	河道	製塩土器	－	4.8	－	脚部内外面ユビオサエ、外面タタキ	1.5mm以下の砂粒多	良好	にぶい橙5YR7/4
99	河道	器台形土器	－	－	－	内面ナデ・ミガキ、外面ミガキ・ハケ、３方透し	微砂粒少	良好	浅黄橙10YR8/3
100	河道	甕形土器	11.7	－	－	内面ケズリ、クシガキ沈線、赤色酸化粒僅	１mm以下の砂粒多、角閃石中	良好	にぶい褐7.5YR6/3
101	河道	甕形土器	13.8	－	－	クシガキ沈線、赤色酸化粒僅	0.5mm以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい橙7.5YR7/4
102	河道	甕形土器	13.5	－	－	内面ケズリ、クシガキ沈線、赤色酸化粒僅	１mm以下の砂粒中	良好	にぶい黄橙10YR7/2
103	河道	甕形土器	13.9	－	－	内外面ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒中	良好	橙5YR6/6
104	中世水田	椀	－	3.9	－	内外面ナデ	３mm以下の砂粒僅	良好	灰白2.5Y8/2
105	中世水田	椀	－	4.5	－	内外面ナデ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	浅黄橙10YR8/4
106	包含層	(須)台付壺？	－	11.1	－	内面ナデ、外面ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒中	良好	灰N6/0
107	包含層	(須)杯身？	－	8.0	－	内外面ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰N5/0
108	溝５	甕形土器	16.7	6.3	27.0	内面ケズリ、外面ミガキ、口縁部ヨコナデ	2mm以下の砂粒多	良好	にぶい橙7.5YR7/4
109	土壙９	備前焼擂鉢	35.7	－	－	内外面ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒なｋ	良好	灰N6/0
110	土壙10	白磁椀	14.0	－	－	全面施釉、貫入ナシ		良好	明緑灰7.5GY7/1
111	溝６	白磁皿？	－	－	－	内外面施釉、貫入有、放れ砂		良好	灰白5GY8/1
112	溝７	唐津焼椀	13.9	－	－	内外面施釉、砂土目		良好	黄灰2.5Y4/1
113	溝７	椀	－	5.0	－	内外面ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰白5Y8/1
114	溝７	椀	－	6.4	－	内外面ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰白7.5YR8/1
115	溝８	備前焼甕	－	－	－		３mm以下の砂粒中	良好	暗赤灰2.5YR3/1

番号	出土地点	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調
116	溝9	椀	−	6.9	−	内外面ナデ	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰白10YR8/2
117	溝9	椀	−	5.2	−	内外面ナデ	1mm以下の砂粒少	良好	橙5YR6/6
118	包含層	甕形土器	7.8	−	−	内面ナデ・ユビオサエ、外面ハケ?、口縁部ヨコナデ	1mm以下の砂粒少	良好	橙5YR7/6
119	包含層	高杯形土器	20.7	−	−	内外面ヨコナデ	1.5mm以下の砂粒中	良好	褐灰10YR4/1
120	包含層	(須)甕	29.7	−	−	内外面ヨコナデ	2.5mm以下の砂粒中	良好	灰N5/0
121	包含層	(須)平瓶	−	−	−	内外面ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰白N7/0
122	包含層	(須)壺	−	12.9	−	内面青海波タタキのちナデ、外面ヨコナデ	1mm以下の砂粒少	良好	灰N5/0
123	包含層	椀	−	6.9	−	内外面ナデ	0.5mm以下の砂粒少	良好	にぶい黄橙10YR7/2
124	包含層	内黒椀	−	7.1	−	内外面ナデ	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰白10YR8/2
125	包含層	椀	−	5.6	−	内外面ヨコナデ	1mm以下の砂粒少、赤色酸化粒僅	良好	灰白7.5YR8/1
126	包含層	椀	−	5.0	−	内外面ナデ	2mm以下の砂粒・角閃石少	良好	浅黄橙10YR8/3
127	包含層	皿	−	−	−	内外面ナデ	0.5mm以下の砂粒	良好	黄灰2.5Y4/1
128	包含層	平瓦	−	−	−	内面布目、外面剥落	2.5mm以下の砂粒多	良好	灰N6/0
129	包含層	平瓦	−	−	−	内面布目、外面縄目	3.5mm以下の砂粒少	良好	灰N6/0
130	溝11	甕形土器	−	−	−	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	1mm以下の砂粒中	良好	にぶい黄橙10YR7/2
131	溝12	内黒椀	14.9	−	−	内面ミガキ、外面ナデ	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰白2.5Y8/2
132	溝12	皿	14.9	−	−	内外面ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰白2.5Y7/1
133	溝12	杯	10.8	7.4	2.4	内外面ヨコナデ、底部	0.5mm以下の砂粒少	良好	灰白5Y7/1
134	溝12	皿	8.7	5.8	1.5	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り	1mm以下の砂粒僅	良好	にぶい黄橙10YR7/2
135	溝12	皿?	−	4.9	−	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り	0.5mm以下の砂粒中	良好	黄灰2.5Y6/1
136	溝12	皿?	−	−	−	内面ヨコナデ、外面ヘラケズリ	0.5mm以下の砂粒僅	良好	灰白5Y7/1
137	包含層	鉢形土器	−	−	−	内外面ナデ、内面沈線2条	4mm以下の砂粒多	良好	にぶい黄橙10YR7/3
138	包含層	鉢形土器	−	−	−	内外面ナデ、内面沈線2条	4mm以下の砂粒多	良好	にぶい黄橙10YR7/3
139	包含層	鉢形土器	−	−	−	内外面ナデ、外面下半ケズリ	4mm以下の砂粒多	良好	にぶい黄橙10YR7/3
140	包含層	壺形土器	8.5	−	−	内面ミガキ、外面ミガキ・削出突帯	1.5mm以下の砂粒中、角閃石少	良好	にぶい褐7.5YR5/3
141	包含層	甕形土器	13.0	−	−	内外面ナデ、口縁部外面凹線	0.5mm以下の砂粒少	良好	にぶい橙7.5YR7/4
142	土壙11	甕形土器	−	8.1	−	内面ナデ、外面ハケ	1.5mm以下の砂粒多	良好	にぶい黄橙10YR7/2
143	土壙12	壺形土器	13.6	−	−	内面ナデ、外面ハケ・貼付突帯	2mm以下の砂粒多、赤色酸化粒少	良好	浅黄橙7.5YR8/3
144	土壙12	壺形土器	−	−	−	内外面ナデ、沈線3条	3mm以下の砂粒多	良好	橙7.5YR6/6
145	土壙12	壺形土器	−	−	−	内外面ナデ、沈線2条	2mm以下の砂粒多	良好	黄灰2.5Y4/1
146	土壙12	不明	−	3.9	−	内外面ナデ・ユビオサエ	2mm以下の砂粒多、赤色酸化粒・角閃石僅	良好	浅黄橙10YR8/3
147	土壙12	甕形土器	−	−	−	内面ナデ、外面ハケ・沈線7条	1.5mm以下の砂粒多	良好	灰黄褐10YR6/2
148	土壙12	甕形土器	15.8	−	−	内面ナデ、外面ハケ・沈線3条	1.5mm以下の砂粒中	良好	灰黄褐10YR6/2
149	溝13	椀	13.0	6.4	4.4	内面ヨコナデ、外面ヨコナデ、重ね焼き痕	2.5mm～7mmの石粒僅、1.5mm以下の砂粒少	良好	灰白2.5Y8/2
150	包含層	皿	−	4.6	−	内外面ナデ、底部ヘラ切り	1mm以下の砂粒中、角閃石中、赤色酸化粒少	良好	にぶい黄橙10YR7/2
151	包含層	(須)杯身?	−	−	−	内面ナデ、外面ヘラケズリ	5.3mmほどの石粒1、1mm以下の砂粒少	良好	灰白N7/0
152	包含層	甕形土器	−	−	−	内面ナデ、外面沈線	3～4.5mmの石粒少、2.5mm程の砂粒多	良好	黄灰2.5Y5/1
153	包含層	壺形土器	−	−	−	内面ナデ、外面沈線	3～6mmの石粒少、2.5mm以下の砂粒多	良好	橙5YR7/6
154	包含層	壺形土器	−	−	−	内面ナデ、外面ミガキ	1.5mm以下の砂粒中	良好	にぶい橙10YR7/2
(須)＝須恵器							砂粒の量は多＞中＞少＞僅で表現		

土製品観察表

番号	器種	出土地点	時期	胎土	主な調整	色調	焼成	残存率	現存長cm	幅(径)cm	厚さcm	重量g	備考
C1	土錘	土壙2	弥生時代後期後半	0.5mm以下の砂粒・赤色酸化粒中	ユビオサエ	にぶい黄橙10YR7/2	良好	約1/4	8.8	8.8	−	386.6	
C2	土錘	土壙2	弥生時代後期後半	1mm以下の砂粒・赤色酸化粒少	ユビオサエ	にぶい橙7.5YR7/3	良好	一部欠	7.7	6.8	−	414.4	
C3	紡錘車	土壙2	弥生時代後期後半	1mm以下の砂粒少、角閃石少	ハケ・ケズリ	内:にぶい橙7.5YR7/4、外:灰褐7.5YR4/2	良好	半	−	31	4.1	3.2	甕形土器片転用
C4	土錘	土壙10	近世	2.5mm以下の砂粒・赤色酸化粒多	ユビオサエ	にぶい褐7.5YR6/3	良好	ほぼ完	3.5	4.5	−	63.3	
C5	不明	溝9	近世	1.5mm以下の砂粒中	ナデ	にぶい橙5YR6/4～にぶい黄橙10YR6/3	良好	脚部?のみ	81.2	77.5	−	−	支脚か
C6	おはじき	溝9	近世	4mmの石粒僅、1.5mm以下の砂粒中	ナデ	内:にぶい赤褐2.5YR5/4、外:灰褐7.5YR4/2	良好	完	4.8	5.0	1.5	−	備前焼転用
C7	土錘	包含層		0.5mm以下の砂粒少、角閃石僅	ユビオサエ	灰白2.5Y8/2	良好	完	5.0	4.1	−	91.9	
C8	土玉	包含層		0.5mm以下の砂粒・赤色酸化粒少	ナデ	にぶい黄橙10YR6/4・にぶい黄褐10YR5/3	良好	約2/3	−	11.9	−	1.6	
C9	土錘	包含層		0.5mm以下の砂粒多、赤色酸化粒中	ユビオサエ	にぶい黄橙10YR6/4・7/4	良好	完	67	29.2	−	57.3	

石器・石製品観察表

番号	器種	出土地点	時期	材質	残存率	長さmm	幅mm	厚みmm	重量g
S1	勾玉	竪穴住居3	5世紀末～6世紀初頭	蛇紋岩	完	21.0	8.0	6.0	2.11
S2	勾玉	竪穴住居3	5世紀末～6世紀初頭	蛇紋岩	完	13.5	6.0	3.0	0.55
S3	敲石	包含層		細粒花崗岩	完	133.0	60.0	39.0	474.9
S4	石鏃	水田	弥生時代前期	サヌカイト	完	21.5	14.0	2.5	0.6
S5	台石?	溝12	古代～中世	古銅輝石安山岩	完	181.0	189.5	68.0	3310
S6	石匙	土壙11	弥生時代前期後葉	サヌカイト	欠	59.5	52.0	8.5	16.0
S7	U. F	土壙11	弥生時代前期後葉	サヌカイト	完	43.0	33.5	8.0	12.3
S8	スクレイパー	土壙12	弥生時代前期後葉	サヌカイト	完	41.5	19.0	8.5	8.1
S9	楔形石器	土壙12	弥生時代前期後葉	サヌカイト	完	29.5	36.5	14.0	19.4
S10	台石?	土壙12	弥生時代前期後葉	アプライド	完	243.0	98.0	106.0	3745
S11	台石?	土壙12	弥生時代前期後葉	アプライド	完	179.0	91.5	91.0	2290
S12	スクレイパー	包含層	弥生時代前期?	サヌカイト	完	43.5	38.0	11.0	15.9

金属製品観察表

番号	種別	出土地点	時期	材質	残存率	長さmm	幅(径)mm	厚みmm	重量g
M1	刀子	竪穴住居3	5世紀末～6世紀初頭	鉄	切先のみ	34.6	20.5	5.7	4.4
M2	寛永通宝	包含層			完	−	24.8	1.1	2.5
M3	刀錐	包含層			錐のみ	60.5	56.0	5.0	51.9

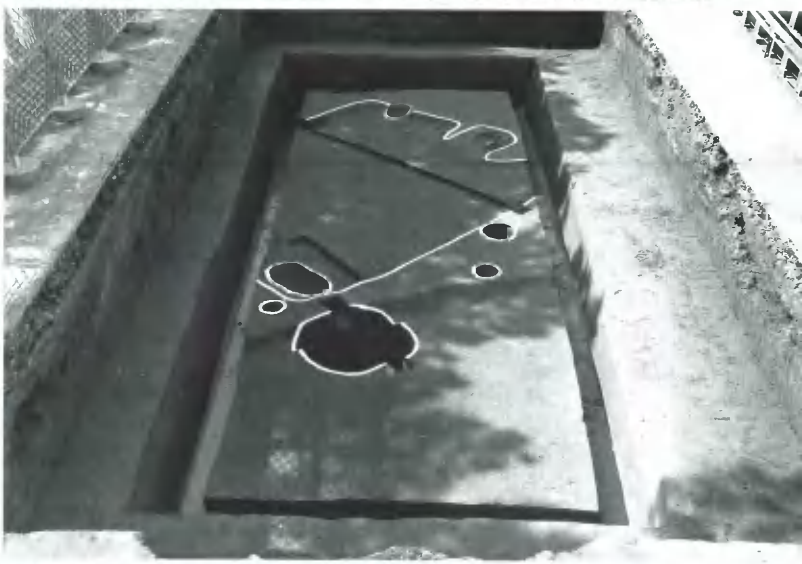
図版１

１．Ｔ１作業風景
（北から）

２．Ｔ２水田全景
（南から）

３．Ｔ３全景
（北から）

１．Ｔ４全景
（南西から）



２．Ｔ６全景
（南東から）

３．Ｔ６竪穴住居１
（東から）

図版３

１．Ｔ６井戸１
（北から）

２．Ｔ７弥生時代
全景（南から）

３．Ｔ７土壙２
（南西から）

１．Ｔ７土壙４
（南東から）

２．Ｔ７古墳時代
全景（南から）

３．Ｔ７竪穴住居３
カマド（南から）

図版5

1．Ｔ８全景
（南東から）

2．Ｔ９中～近世
全景（東から）

3．T10溝４・５
（北東から）

１．Ｔ10水田全景
（北から）

２．Ｔ10北半部
中～近世全景
（南東から）

３．Ｔ10土壙９
（東から）

図版7

1．T11溝10～12
（北東から）

2．T11溝10・11
（西から）

3．T11溝12
（東から）

１．Ｔ12作業風景
（南西から）

２．Ｔ13弥生時代
全景（上空から）

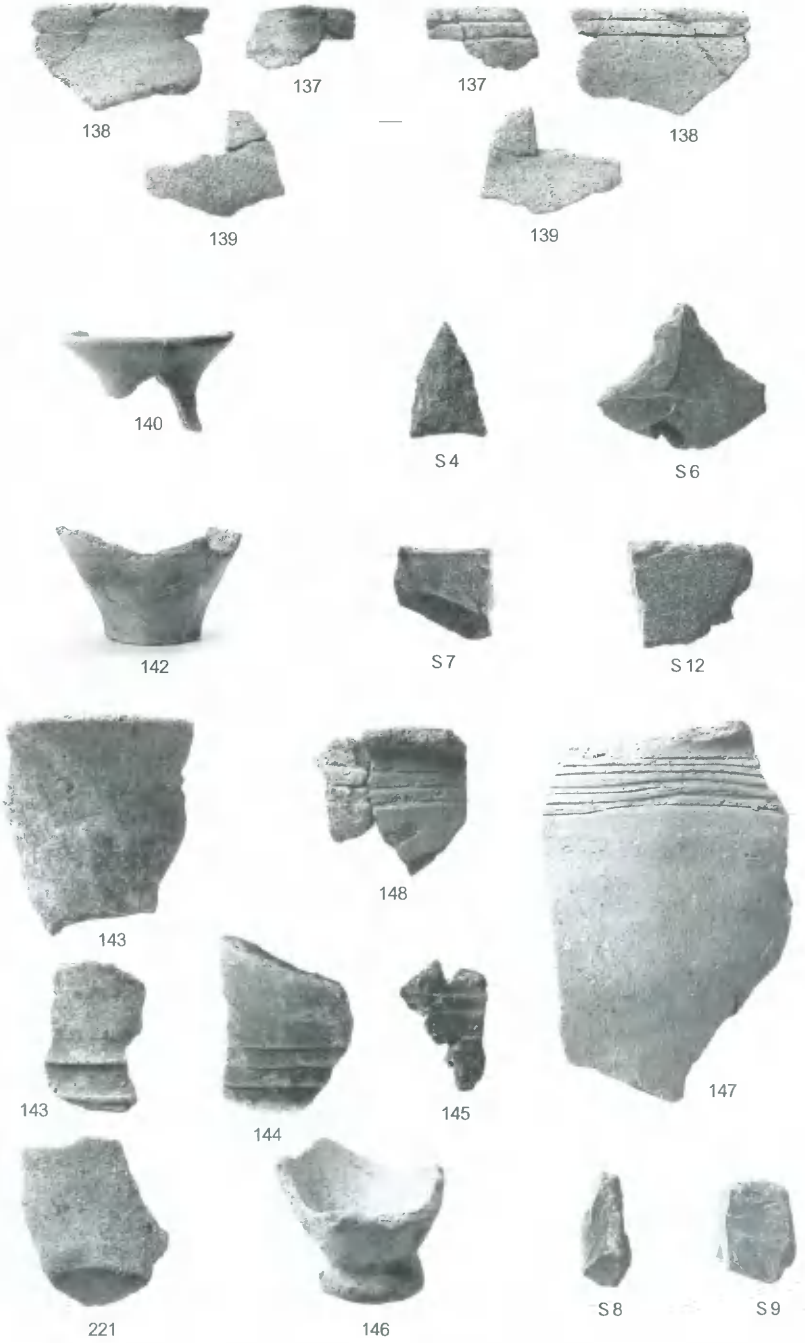
３．Ｔ13土壙11
遺物出土状況
（北東から）

図版９

１．Ｔ13土壙12
遺物出土状況
（北東から）

２．Ｔ14溝14
（北から）

３．Ｔ14古墳時代水田
全景（東から）



縄文時代～弥生時代前期の遺物

図版11

8

10

7

11

14

16

18

20

34

35

C1

C2

C3

Ｔ７　土壙２出土遺物

6

99

94

90

91

93

92

97

50

59

87

58

60

61

73

64

54

78

68

弥生時代～古墳時代の遺物

図版13

古代以降の遺物

報告書抄録

ふりがな	つしまいせき
書名	津島遺跡1
副書名	岡山県総合グラウンド第一次確認調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	137
編著者名	葛原克人・島崎東・渡邉恵里子・氏平昭則・正岡睦夫・高畑知功・金田善敬 岡本泰典
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山市西花尻1325－3　TEL086－293－3211
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
津島遺跡（つしまいせき）	岡山県（おかやまけん） 岡山市（おかやまし） いずみ町	33201		34度 40分 40秒	133度 55分 17秒	19980119 ～0323,0 422～0609	830	岡山県総合グラウンド内における遺跡範囲の確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津島遺跡	集落跡	縄文時代	包含層	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 青磁 白磁 備前焼 唐津焼 石器・石製品 土製品 鉄器 古銭	・縄文時代晩期包含層を確認 ・弥生時代前期の水田層を確認、土壌よりイネのプラント・オパール検出 ・弥生時代および古墳時代の微高地を確認 ・古代～中世の条里に伴うと思われる溝を検出
		弥生時代	竪穴住居　1軒 土壙　5基 溝　6条 水田 旧河道		
		古墳時代	竪穴住居　3軒 掘立柱建物　1棟 井戸　1基 土壙　1基 溝　1条 水田		
		古代～近世	土壙　6基 溝　8条		

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137

津島遺跡 1

岡山県総合グラウンド第一次確認調査

1999年３月２日　印刷
1999年３月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2－4－6
印　刷　ワシュウ印刷株式会社
岡山市当新田381－3